

主要地方道市原茂原線(刑部・金谷) 道路改良事業埋蔵文化財調査報告書

— 長生郡長柄町後領遺跡・市神遺跡 —

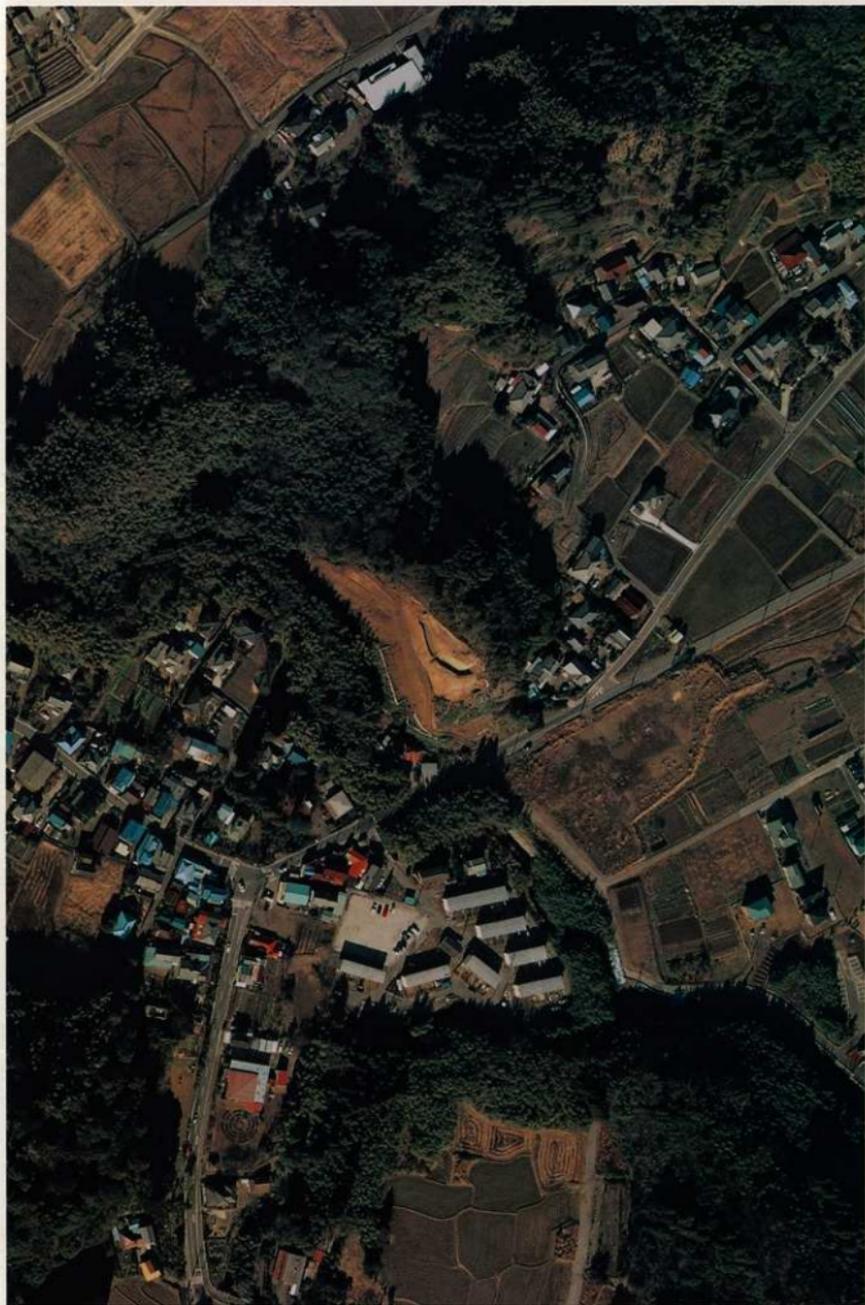
平成20年3月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

主要地方道市原茂原線(刑部・金谷) 道路改良事業埋蔵文化財調査報告書

— 長生郡長柄町後領遺跡・市神遺跡 —

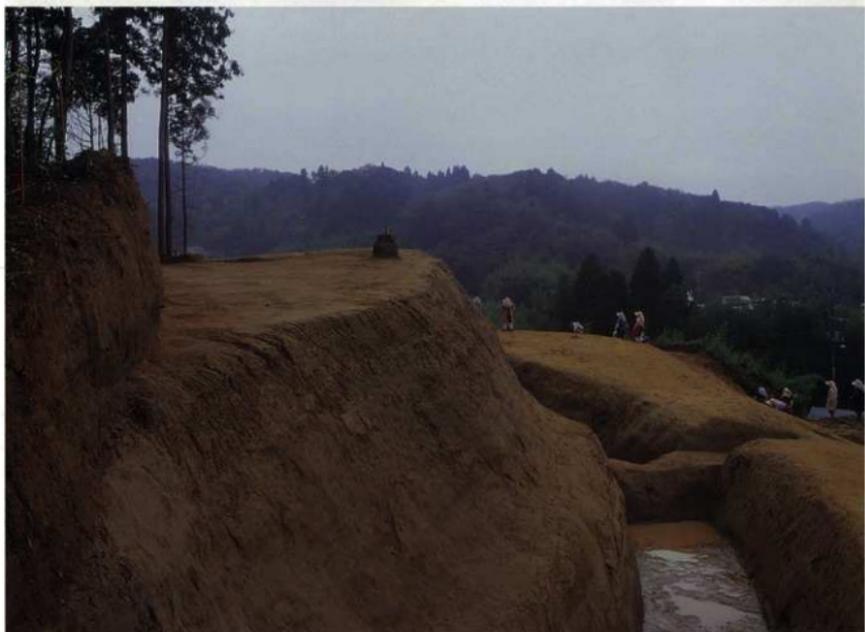




後領遺跡周辺の航空写真 (1×2,500)



1. 後領遺跡遠景（南から）



2. 曲輪・堀・障壁検出状況（北西から）



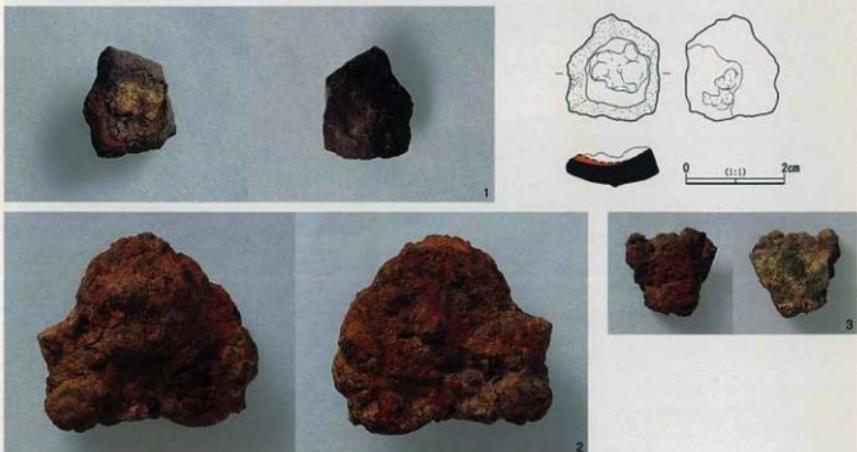
1. ISE001 完掘状況 (南から)



2. ISE001 断面 (南から)



1. 中世土器類



2. 中世鑄銅・鍛冶関連遺物

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第601集として、千葉県県土整備部の主要地方道市原茂原線刑部・金谷地区道路整備事業に伴って実施した長生郡長柄町後領遺跡・市神遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

後領遺跡では、中世の堀跡が検出された一方、縄文時代早期から晩期の土器等も出土しました。また、市神遺跡では、弥生時代後期の土坑、奈良・平安時代の竪穴住居跡、中世前半の掘立柱建物跡や井戸が検出されるなど、調査例の少ない当地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また、地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 福 島 義 弘

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による県道市原茂原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、次のとおりである。
 - 千葉県長生郡長柄町刑部字後領3054-3ほか 後領遺跡 (遺跡コード426-002)
 - 千葉県長生郡長柄町金谷字市神370-2ほか 市神遺跡第1次調査 (遺跡コード426-003)
 - 千葉県長生郡長柄町金谷字市神370-1ほか 市神遺跡第2次調査 (遺跡コード426-003-2)
- 3 発掘調査から報告書に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、第1章第2節・第2章・第4章第1節を上席研究員 小高春雄が担当し、それ以外の執筆と編集を上席研究員 半澤幹雄が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部長生地域整備センター、長柄町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、次のとおりである。
 - 第1図 長柄町発行 1/2,500長柄町地形図№19を1/5,000に縮小して使用した。
 - 第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「海上有木」(NI-54-19-16-1)
 - 国土地理院発行 1/25,000地形図「鶴舞」(NI-54-19-16-2)
 - 第3図 長柄町発行 1/2,500長柄町地形図№19
 - 第26図 長柄町発行 1/2,500長柄町地形図№19
 - 第44図 国土地理院発行 1/50,000地形図「姉崎」(NI-54-19-16)
 - 国土地理院発行 1/50,000地形図「茂原」(NI-54-19-12)を1/75,000に縮小して使用した。
- 8 後領遺跡周辺の航空写真(巻頭図版1)は、京葉測量株式会社が平成17年1月に撮影したものを1≒2,500に拡大して使用し、調査地周辺の航空写真(図版1)は、同社が昭和45年3月に撮影したものを1≒10,000に拡大して使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて日本測地系に基づく座標北である。なお、世界測地系に基づく数値は下表のとおりである。下表の数値は「Web版TKY2JGD Ver.1.3.79」により、パラメーターは「関東.par Ver.2.1.1」を使用した。
- 10 挿図に使用したスクリーン・トーン及び記号の用例は、各挿図に明示した。

		後領遺跡		市神遺跡	
		1A-00 (起点)	11G-00 (測量観測中央)	1A-00 (起点)	3I-00
日本測地系 (旧日本測地系) (Tokyo Datum)	X座標	63,600,000m	-63,800,000m	-63,620,000m	-63,700,000m
	Y座標	32,900,000m	33,020,000m	33,060,000m	33,380,000m
	北緯 東経	35° 25' 34.05397" 140° 11' 44.51064"	35° 25' 27.54895" 140° 11' 49.23947"	35° 25' 33.38581" 140° 11' 50.85173"	35° 25' 30.75109" 140° 12' 03.52792"
世界測地系 (日本測地系2000) (JGD2000)	X座標	-63,244,5120m	-63,444,5091m	-63,264,5184m	-63,344,5287m
	Y座標	32,606,5430m	32,726,5397m	32,766,5416m	33,086,5394m
	北緯 東経	35° 25' 45.84379" 140° 11' 32.77290"	35° 25' 39.33969" 140° 11' 37.50149"	35° 25' 45.17567" 140° 11' 39.11346"	35° 25' 42.54123" 140° 11' 51.78867"

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
第2節	遺跡の地理的環境と周辺の遺跡	3
1	遺跡の位置と地理的環境	3
2	遺跡周辺の歴史的環境	3
第2章	後領遺跡	5
第1節	調査の概要	5
1	調査の経過	5
2	調査の方法	6
第2節	中世の遺構と遺物	7
1	遺構	7
2	遺物	13
第3節	縄文時代の遺物	14
1	土器	14
2	石器	27
3	土製品	28
第4節	古墳時代以降の遺物	29
第3章	市神遺跡	30
第1節	調査の方法と基本層序	30
1	調査の方法	30
2	基本層序	31
第2節	遺構	32
1	中世	32
2	弥生時代	42
3	奈良・平安時代	42
第3節	遺物	43
1	土器類	43
2	鉄製品	48
3	銅・銀冶関連遺物	49
4	石製品	49
第4章	まとめ	56
第1節	後領遺跡	56
1	中世	56
2	縄文時代	57
第2節	市神遺跡	57
報告書抄録		巻末

挿図目次

第1章 はじめに	第25図 古墳時代以降の遺物……………29
第1図 調査地と周辺地形及び字名……………1	第3章 市神遺跡
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡……………4	第26図 トレンチ・本調査区と基本層序……………31
第2章 後領遺跡	第27図 遺構分布図……………33
第3図 後領遺跡グリッド配置状況……………5	第28図 遺構平面図(1)……………34
第4図 調査範囲と確認トレンチ配置状況……………6	第29図 遺構平面図(2)……………35
第5図 調査前遺跡地形図……………8	第30図 遺構平面図(3)……………36
第6図 堀断面図……………9	第31図 遺構平面図(4)……………37
第7図 曲輪断面図……………10	第32図 掘立柱建物跡等計測図……………38
第8図 遺構検出状況……………11	第33図 1SE001・002平面・断面図……………40
第9図 曲輪～堀断面図……………12	第34図 溝断面図……………41
第10図 堀出土遺物……………13	第35図 2SK001平面・断面図……………42
第11図 10F-04グリッド断面図……………14	第36図 2SI001平面・断面図……………42
第12図 縄文土器(1)……………15	第37図 中世土器類……………44
第13図 縄文土器(2)……………16	第38図 弥生土器……………45
第14図 縄文土器(3)……………18	第39図 古墳時代後期から奈良・平安時代土器類(1)……………47
第15図 縄文土器(4)……………19	第40図 古墳時代後期から奈良・平安時代土器類(2)……………48
第16図 縄文土器(5)……………20	第41図 鉄製品……………49
第17図 縄文土器(6)……………22	第42図 石製品……………49
第18図 縄文土器(7)……………23	
第19図 縄文土器(8)……………24	
第20図 縄文土器(9)……………26	
第21図 縄文土器(10)……………27	第4章 まとめ
第22図 縄文土器(11)……………27	第43図 刑部城跡東端堀切写真……………56
第23図 石器……………28	第44図 一宮川流域の低地遺跡分布図……………59
第24図 土製品……………29	

表目次

第2章 後領遺跡	第4表 掲載土器観察表……………52
第1表 縄文土器底部遺存度別個数……………25	第5表 鉄製品観察表……………55
第3章 市神遺跡	第6表 銅鋳・鍛冶関連遺物観察表……………55
第2表 柱穴一覧表……………50	第4章 まとめ
第3表 出土土器・土製品組成表……………51	第7表 一宮川流域の低地遺跡消長表……………59

図版目次

巻頭図版1 後領遺跡

後領遺跡周辺の航空写真 (1≒2,500)

巻頭図版2

1. 後領遺跡遠景 (南から)
2. 曲輪・堀・障壁検出状況 (北西から)

巻頭図版3 市神遺跡

1. ISE001 完掘状況 (南から)
2. ISE001 断面 (南から)

巻頭図版4 市神遺跡

1. 中世土器類
2. 中世銅・鍛冶関連遺物

写真図版

図版1 調査地周辺の航空写真

後領遺跡

図版2 調査前遺跡各景

図版3 確認調査トレンチ断面 (1)

図版4 確認調査トレンチ断面 (2)

図版5 曲輪盛土断面

図版6 曲輪遺構検出状況

図版7 堀・障壁検出状況

図版8 堀検出状況

図版9 縄文土器 (1) 前期・中期

図版10 縄文土器 (2) 中期

縄文集落推定範囲図

図版11 縄文土器 (3) 後期

図版12 縄文土器 (4) 後期

図版13 縄文土器 (5) 後期

縄文集落推定地遠景

図版14 縄文土器 (6) 後期

図版15 縄文土器 (7) 後期

図版16 縄文土器 (8) 後期

図版17 縄文土器 (9) 後期

図版18 1. 縄文土器 (10) 晩期

2. 縄文土器 (11) 底部

図版19 1. 石器・土器片錫ほか

2. 古墳時代以降の遺物

市神遺跡

図版20 1. 調査地遠景 (北東から)

2. 調査地遠景 (北西から)

図版21 1. ISB001 周辺 (南西から)

2. ISB001 周辺 (北東から)

3. ISA001 (北東から)

図版22 1. 2SB001 周辺 (北東から)

2. 2SB001 周辺 (東から)

図版23 1. 2SB002 周辺 (北東から)

2. 2SB003 周辺 (南西から)

図版24 1. ISE001・ISE002 周辺 (北東から)

2. ISE001 完掘状況 (南から)

図版25 1. ISE001 断面 (南から)

2. ISE002 完掘状況 (西から)

3. ISE002 断面 (西から)

図版26 1. 2SD001・2SD002 完掘状況 (南西から)

2. ISD001 完掘状況 (南東から)

3. ISD001 断面 (南東から)

4. 2SD010 完掘状況 (南から)

5. 2SD006 完掘状況 (南から)

図版27 1. 2SK001 完掘状況 (南西から)

2. 2SK001 断面 (南西から)

3. 2SK001 遠景 (北東から)

図版28 1. 2SI001 完掘状況 (東から)

2. 2SI001 完掘状況 (北から)

図版29 土器類1 (中世)

図版30 土器類2 (弥生時代・古墳時代後期手捏土器)

図版31 土器類3

(古墳時代後期から奈良・平安時代1)

図版32 1. 土器類4

(古墳時代後期から奈良・平安時代2)

2. 鉄製品

本報告書に所収した後領遺跡と市神遺跡の発掘調査は、平成16年度に後領遺跡を実施し、平成18年度に市神遺跡の現道北側を1次調査、平成19年度に市神遺跡の現道南側を2次調査として実施した。また、整理作業は後領遺跡を平成17年度、市神遺跡を平成18年度と平成19年度に実施し、平成19年度に両遺跡を合わせて刊行することとした。

発掘調査から整理作業・報告書刊行に至るまでの調査組織及び担当者は以下のとおりである。

平成16年度

期 間 平成16年9月1日～平成16年9月30日（発掘 確認調査）

平成16年10月18日～平成16年11月15日（発掘 本調査）

組 織 調査部長 矢戸三男

南部調査事務所長 高田 博

担当者 上席研究員 麻生正信

内 容 後領遺跡 確認調査 上層242㎡/4,300㎡、下層 0㎡

本調査 上層600㎡

平成17年度

期 間 平成18年1月1日～平成18年3月15日（整理）

組 織 調査部長 矢戸三男

南部調査事務所長 高田 博

担当者 上席研究員 鈴木弘幸、上席研究員 小高春雄

内 容 後領遺跡 整理 水洗・注記～原稿執筆

平成18年度

期 間 平成18年7月16日～平成18年7月27日（発掘 確認・本調査）

平成18年7月28日～平成18年7月31日（整理）

組 織 調査研究部長 矢戸三男

南部調査事務所長 高田 博

担当者 上席研究員 半澤幹雄

内 容 市神遺跡 確認調査 上層44㎡/440㎡、下層 —

本調査 上層280㎡

整理 水洗・注記～記録整理

平成19年度

期 間 平成19年10月1日～平成19年10月31日（発掘 確認・本調査）

平成20年2月1日～平成20年3月31日（整理）

組 織 調査研究部長 矢戸三男

南部調査事務所長 西川博孝

担当者 上席研究員 小高幸弘、上席研究員 半澤幹雄

内 容 市神遺跡 確認調査 上層525㎡/525㎡、下層 —

本調査 上層284㎡

市神遺跡 整理 水洗・注記～刊行・移管整理

第2節 遺跡の地理的環境と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と地理的環境（第2図）

後領遺跡は長生郡長柄町大字刑部字後領に所在する。遺跡の立地する丘陵は上総丘陵東部に属し、地質的には下総層群と上総層群の境目にあたる。丘陵尾根伝いの北2.5kmには標高173mの権現森が聳え、また、西側は一宮川が堰に添って流れ、少し先で支流の水の上川と合流し、東流する。一方、東側は一宮川の谷底平野である金谷の広い田地が開けている。後領遺跡はこの丘陵の先端にあり、更に調査地点はその南西縁に当たっている。背後はこの周辺の丘陵部には珍しく平坦面が形成され、小高い台地状（標高約50m）の地形を呈している。恐らくこのような環境が、縄文時代を通して多量の遺物が出土した事実（性格としては集落跡か）に対応するのであろう。中世に城跡が築かれた経緯はその当時における更に多様なファクターが介在することとなるが、基本的には長南武田領の北西部を扼する恰好の地であることは確かで、市原から長南、茂原へ入るルートを押さえる位置にある点も大きく作用したであろう。

市神遺跡は長生郡長柄町金谷字市神に所在する。遺跡の立地する自然堤防は、一宮川により形成されたもので、標高27mから28mである。現在は遺跡の南東側を一宮川が東流するが、遺跡の北側に標高26m前後の湿地が広がり、往古は遺跡の北側を流れていたものと考えられ、前掲の後領遺跡との間には河川を挟み対峙していた可能性も高い。御領遺跡の東には標高30m前後の段丘面が見られ、古くから続く集落が形成されており、上位の段丘面と考えられることから、本遺跡はその下部の低位段丘面とも言える。

2 遺跡周辺の歴史的環境（第1・2図）

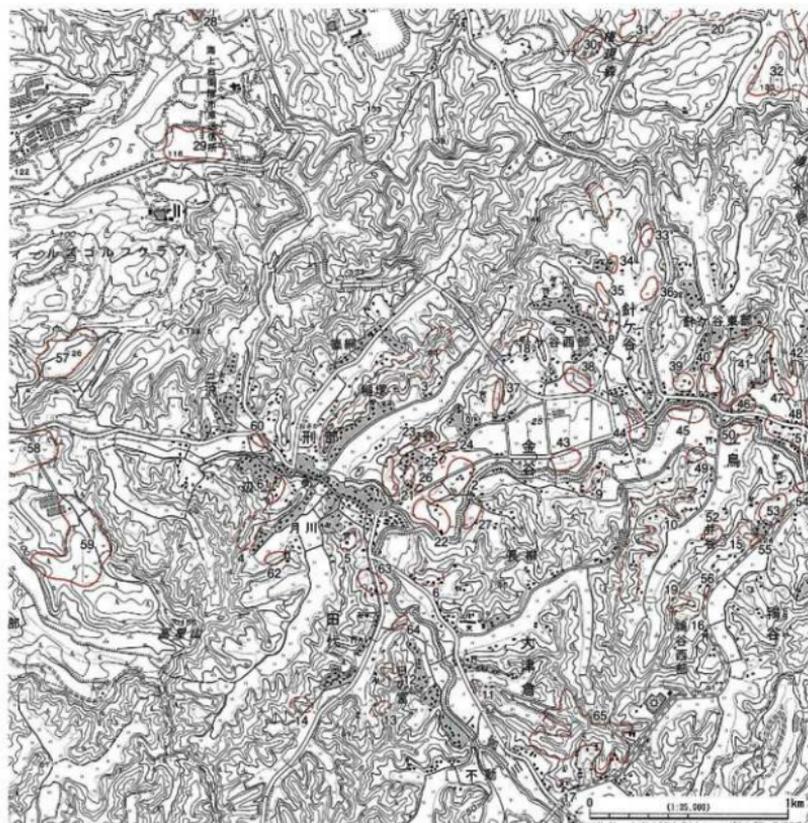
長柄町西部の刑部・金谷地区を特色付ける遺跡は、横穴墓と鍛冶・鋳造関連遺跡である。

横穴墓は長柄のみならず上総の古墳時代それも後期の特徴的な葬制であるが、とりわけ長柄町は大正大学による分布調査の結果、数多くの横穴墓が確認され且つその内容も大凡把握されている。後領遺跡周辺でいえば、北側の刑部・稲塚横穴群（9基）、金谷・小金谷横穴群（5基）、南側の天津倉長柳横穴群（3基）、東側の立烏汲井谷横穴群（64基）等が代表例ながら、未だ人知れず埋もれている例も多くあろう。

鍛冶・鋳造関係については、周辺でスラグを出土する遺跡が5か所確認されている。ただ、詳細は不明であり、その意味では鍛冶遺構の存在をそのまま示すものではない。今回、市神遺跡で出土した鍛冶滓も鍛冶遺構に伴うものではないが、屋敷跡に関連する井戸からの出土であり、時期を示す資料を伴うという点に於いてその意義は大きいといえる。一方、市神遺跡の西側は大字刑部字吹谷前（丘陵は吹谷）といい、これは吹屋つまり鋳物師の存在を示す字名でもある。町内では吹矢、吹谷等字こそ違え「ふきや」地名が数か所もあり、これはかつて市村高男氏がまとめた上総鋳物師の3拠点（長柄町金谷・刑部、木更津市矢那、市原市矢田）と対応するものであろう。中世の鋳物師は寺社の需要に大きく支えられており、梵鐘等の鋳造遺跡も当然遺されていると考えられ、出土した埴塼は鋳銅関連資料として特筆される。

その一方、後領遺跡で出土した多量の縄文土器は従来当地のような丘陵地域では限られた採集資料が知られている程度で、換言すれば限られた場所へ遺跡が偏在している結果を示しているとも受け取れる。この点、満遍なく縄文土器の散布する道脇寺～権現森に至る市原市寄りの台地群とは好対照をなしている。

また、後領遺跡で検出された城郭遺構も同様に記録・伝承さえないが（僅かに北東山麓に堀之内の通称あり）、このような状況は町内に多少共通するもので（立烏城、要害城等）、長南武田氏の勢力下にあった当地を反映したものと見えようか。



- | | | | |
|--------------|--------------------------|----------------------|-----------------------|
| 1 後領遺跡 | 20 轉作古墳(古墳)・塚群(近世) | 33 堀田遺跡(平安) | 51 湯谷久保向遺跡(古墳、中・近世) |
| 2 市神遺跡 | 21 後領下遺跡(縄文) | 34 高田遺跡(平安、中世) | 52 豊作遺跡(平安) |
| 3 前部・福原横穴群 | 22 北一丁目遺跡(平安) | 35 岡谷遺跡(平安) | 53 瀬戸遺跡(平安、中世) |
| 4 前部・月川横穴群 | 23 那ノ沢北遺跡 | 36 瀬津根遺跡(平安) | 54 吹良遺跡(平安) |
| 5 前部・八重垣神社横穴 | 24 那ノ沢東遺跡(奈良・平安、中・近世) | 37 八幡谷遺跡(奈良・平安、中・近世) | 55 瀬戸南遺跡(奈良・平安) |
| 6 大社倉長前横穴群 | 25 水引遺跡(奈良・平安、中・近世) | 38 鍛冶ノ作遺跡(縄文、平安) | 56 中谷遺跡(奈良・平安) |
| 7 針ヶ谷長房院谷横穴群 | 26 吹谷前遺跡(奈良・平安、中・近世) | 39 芝付遺跡(平安) | 57 八百谷遺跡(縄文、古墳、奈良・平安) |
| 8 針ヶ谷東谷横穴群 | 27 清水谷遺跡(縄文、平安) | 40 町田遺跡(平安) | 58 新巻遺跡群・滝尻遺跡(縄文、平安) |
| 9 金谷・島山横穴群 | 28 関谷遺跡(縄文、平安) | 41 立鳥城跡(戦国) | 59 太田切遺跡群(縄文、平安) |
| 10 立鳥・浪井谷横穴群 | 29 嵐見遺跡(縄文、古墳、奈良・平安) | 42 谷口遺跡(平安) | 60 宿津遺跡(平安、中世) |
| 11 駒免横穴 | 30 推現跡遺跡(古代) | 43 内合遺跡(平安) | 61 倉山遺跡(平安) |
| 12 日影横穴 | 31 上ノ代遺跡(縄文、弥生、平安) | 44 蒸籠遺跡(平安) | 62 新宮遺跡(平安) |
| 13 向井横穴群 | 32 針ヶ谷遺跡(縄文、弥生、奈良・平安、中世) | 45 吹取遺跡(平安) | 63 堀田遺跡(平安) |
| 14 越田横穴群 | | 46 切通前遺跡(平安) | 64 外道遺跡(平安) |
| 15 湯谷西部Ⅰ横穴群 | | 47 前田北遺跡(平安) | 65 高山城跡(中世) |
| 16 一千町遺跡 | | 48 前田南遺跡(平安) | |
| 17 高田脇谷横穴 | | 49 浪井遺跡(平安) | |
| 18 金谷・小金谷横穴群 | | 50 戸正遺跡(平安) | |
| 19 湯谷西部Ⅱ横穴群 | | | |

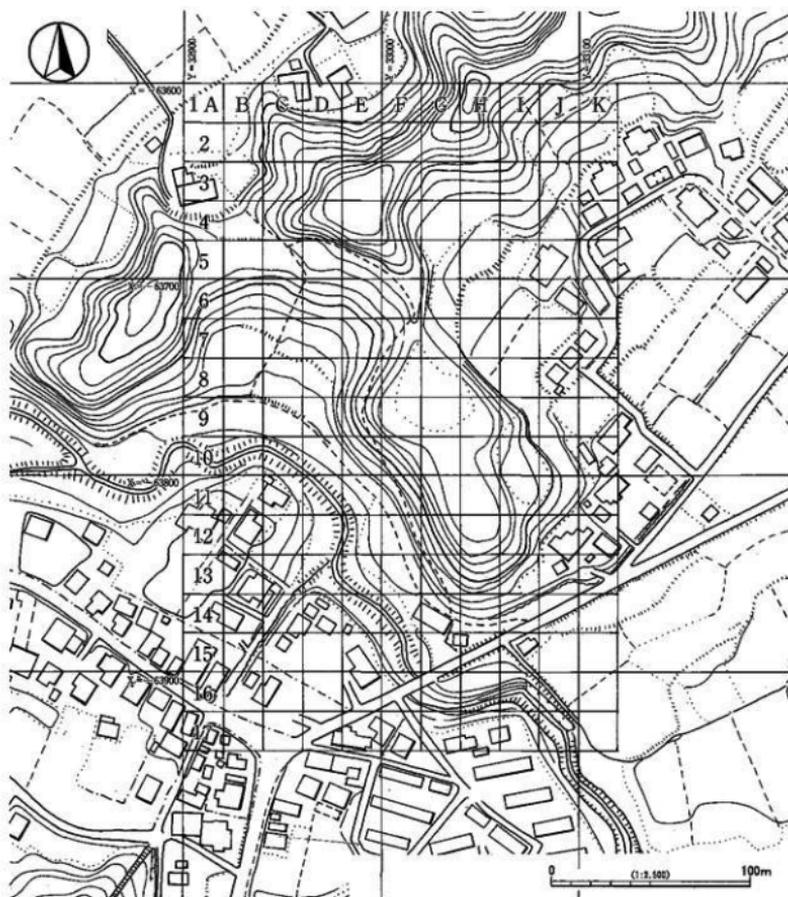
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2章 後領遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の経過

発掘調査は、県道市原茂原線内の遺跡対象面積4,300㎡について、平成16年9月1日から9月30日までを期間として確認調査を実施した。その結果、丘陵上において人為的な盛土が、また、丘陵から斜面へ至る肩口で堀跡が確認されたことから調査範囲内が城郭の一部であることが確認された。



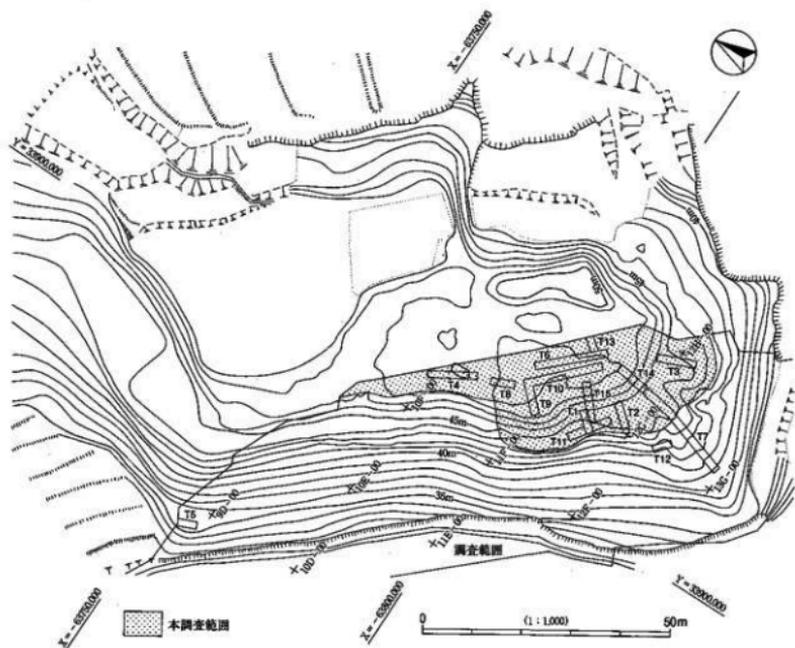
第3図 後領遺跡グリッド配置状況

この確認結果を受けて、丘陵肩口から上面までの600㎡が本調査対象となり、同年10月18日から11月15日までの間に本調査を実施した。検出された遺構は城郭に伴う堀と曲輪（槽状遺構含む）それに溝状遺構等であり、また、遺構に伴うものではないが調査区北側で縄文土器が多量に出土した。

2 調査の方法 (第3・4図)

後領遺跡では、20m×20mの大グリッドを設定し、さらにその中に2m×2mの小グリッドを設定した。大グリッドはX=-63,600m、Y=32,900mを起点に、南に1、2、3・・・、東にA、B、C、・・・とし、1A、2B、3Cと表記した。小グリッドは北西隅を00とし、東に00、01、02・・・と1の位を増し、南に00、10、20・・・と10の位を増し、00～99の小グリッドを設定した。これにより、各グリッドは1A-00などと表記し、同時に北西隅の座標点を意味することとした。

遺構の大半を占める曲輪跡および堀跡では、基本的に土層観察用のベルトを設定して調査を行ったが、重複の著しい部分や遺存状況の悪い部分では、ベルトの設定を一部省略したものもある。遺物の取り上げは、小グリッド毎に通し番号で出土状況と出土レベルを記録した。遺構の実測は、主に簡易測量を用い、適宜平板も使用した。遺構番号は、遺構の種類毎に通し番号を付した。



第4図 調査範囲と確認トレンチ配置状況

第2節 中世の遺構と遺物

1 遺構

検出された遺構は丘陵縁を廻る堀が明瞭で、その内側に曲輪一面、その外側に堀と並行する細長い平場、更にその下に狭い平場2面がある。また、堀の間には1か所の障壁がみられ、曲輪内は一旦地山まで削りだしたあと、再度土盛りしたようで、とりわけ南側は小高い槽状を呈していた。未調査区との間には溝状の凹みが遺っていたが、これは其処だけを盛り土せずに遺した結果であり、いわば見かけ上の堀ともいえるものである。

便宜上、これら各遺構に対し、曲輪、堀、障壁、溝状遺構と呼称することとし、その対応関係は第8図を参照されたい。

曲輪（第5～10図、巻頭図版1・2、図版2～8）

山上の曲輪は後世に大きく改変を受けている。それは斜面の堀を人為的に埋めて平場をせり出している事実から明らかながら、その時期と意図するものについては必ずしも明瞭ではない。というのは、山上は小山状の高まりが連続する状況であり、畑として利用できる程に削平されている訳ではない。そして、斜面の堀跡ラインがかって水田であったという伝承から、その行為がいわゆる城破りとは異なって近世以降の所産、それもそれ程古い段階の造成とも思えないことである。

とすると、その目的は堀跡を埋め肩口を養生することにあつたとみられる、恐らく急斜面上に盛り土された土砂が土砂崩れを起こし、その結果として抜本的な対策を迫られたのではないかと推測する。

そこで、旧状の復元であるが、北側の確認トレンチ№4付近は一段低く、逆に南側は小山状を呈していたことがわかっている。つまりかつては複雑な地形を呈していたところに厚く盛土して曲輪を造成したのである。恐らく、この丘陵の南西端を空堀でもって切り離し、凹凸のある傾斜面を埋め立てて曲輪を造成したのであろう。その規模は現状から復元して大体東西10m、南北45mにならうか。

普請の状況については、南側は表層を多少削る一方（本来表土の発達が悪かったらうが）、北側は表土の上にそのまま土盛りしたようである。その順序はまず北側の窪地（10F-03～04）を埋め、その上を水平に盛り土した後、漸次南側に向けて笹身状に土を置いていくものである。そして、一応それが終わった後（約2尺半程度の厚み）、同様な作業を2回繰り返すが（約1尺半と2尺半の厚み）今度は水平の盛土部分が南側へ延びている。調査前の現状はこの3回目の盛土ラインの有無が凹凸となって表れたものである。

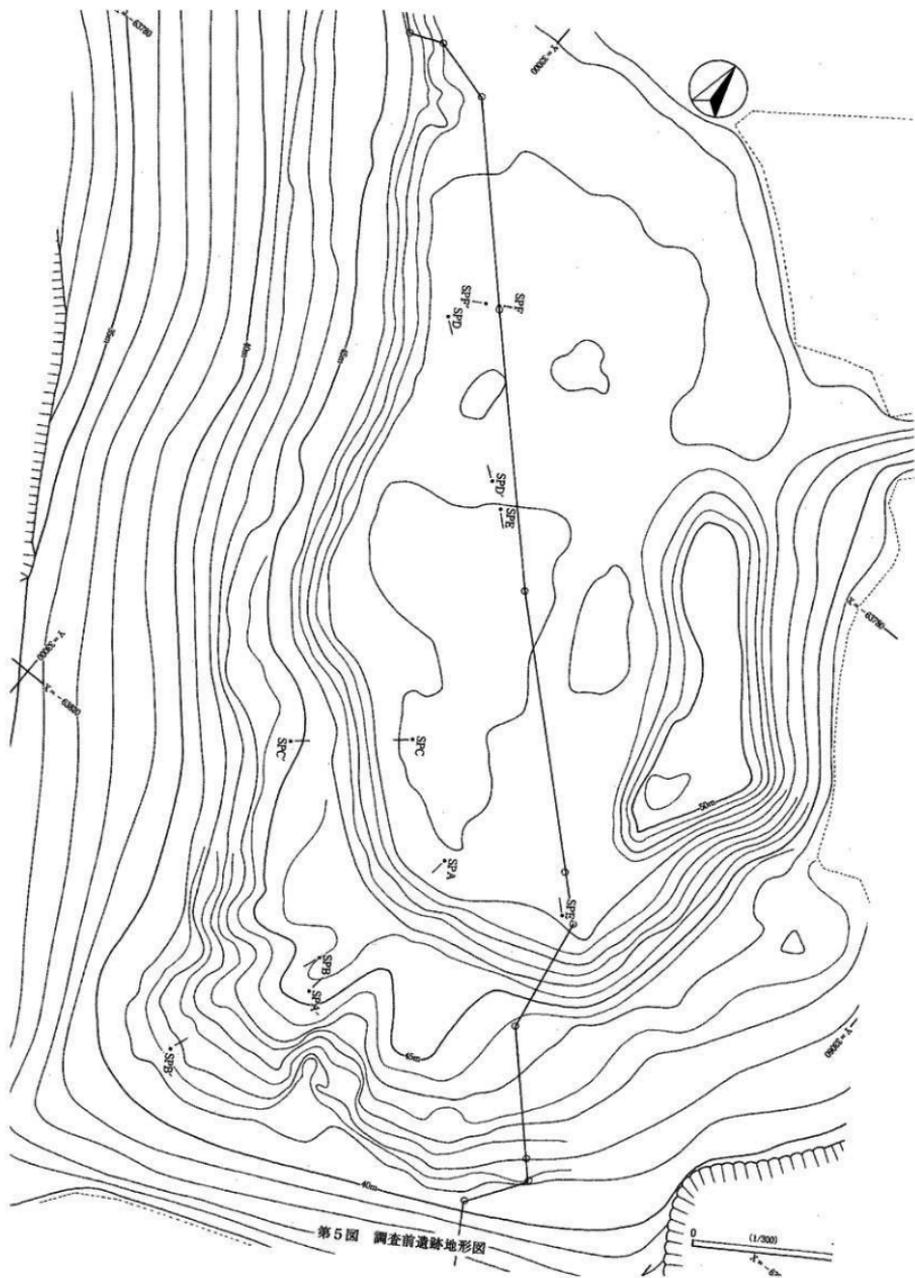
盛土の土は堀の排土と考えられるが、一部に多少粘性を帯びた暗褐色土層が確認される。この土は旧表土と思われることから、北側窪地付近の堀の掘削時を始め、丘陵内のどこかで調達したものであろう。

堀（第6・9・10図、巻頭図版1・2、図版4・6～8）

丘陵の縁を廻るかたちで堀が検出されている。その廻り方は丘陵の向きや形に沿っており、結果として曲線的なあり方である。

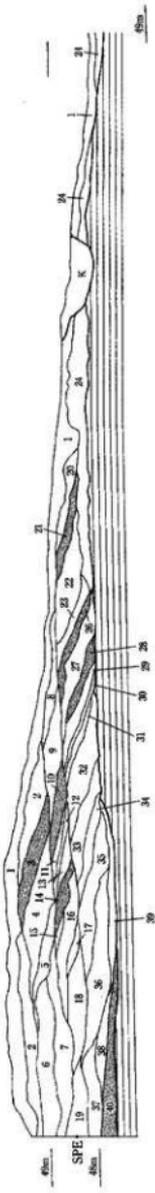
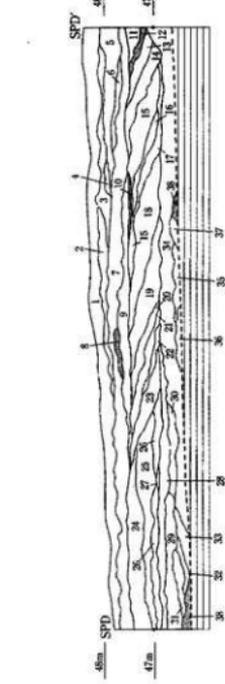
規模は幅が約10m前後、深さが5m～7m（丘陵側、なお下った斜面側では2m前後）であり、断面形態は逆台形を呈する。なお、内側中場ラインに犬走りのような面があるが、これは水田として使うに当たり、内側を多少削ったためである。

堀の間には1か所、地山整形による（掘り残し）障壁が存在する。上幅1.3m、基底幅2m～3mであり、手前から多少開削しているのであたかも土橋のようにみえるが、前面は急崖となるので障壁とみるべきだろう。



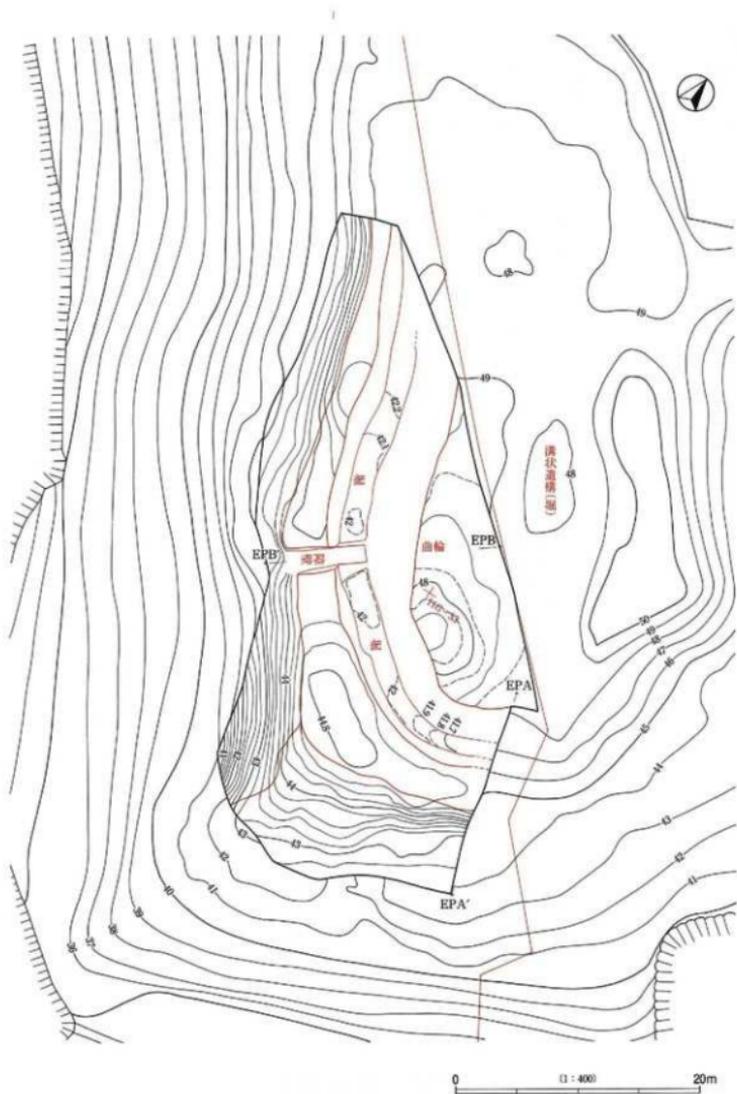
第5圖 調査前遺跡地形圖

- 1 砂層 小礫を多く含む
 2 砂層 黒褐色粘質土を含む
 3 砂層
 4 砂層
 5 砂層
 6 砂層
 7 砂層
 8 砂層
 9 砂層
 10 砂層
 11 砂層
 12 砂層
 13 砂層
 14 砂層
 15 砂層
 16 砂層
 17 砂層
 18 砂層
 19 砂層
- 20 砂層 小礫を多く含む
 21 砂層 径2-3cmの褐色砂アロノクを多く含む
 22 砂層 小礫を多く含む
 23 砂層
 24 砂層
 25 砂層
 26 砂層
 27 砂層
 28 砂層
 29 砂層
 30 砂層
 31 砂層
 32 砂層
 33 砂層
 34 砂層
 35 砂層
 36 砂層
 37 砂層
 38 砂層
 39 砂層
 40 砂層
- 41 砂層 小礫を多く含む
 42 砂層 径3-5cmの褐色粘質土を含む
 43 砂層
 44 砂層
 45 砂層
 46 砂層
 47 砂層
 48 砂層
 49 砂層
 50 砂層
 51 砂層
 52 砂層
 53 砂層
 54 砂層
 55 砂層
 56 砂層
 57 砂層
 58 砂層
 59 砂層
 60 砂層
- 61 砂層 小礫を多く含む
 62 砂層 径3-5cmの褐色粘質土を含む
 63 砂層
 64 砂層
 65 砂層
 66 砂層
 67 砂層
 68 砂層
 69 砂層
 70 砂層
 71 砂層
 72 砂層
 73 砂層
 74 砂層
 75 砂層
 76 砂層
 77 砂層
 78 砂層
 79 砂層
 80 砂層

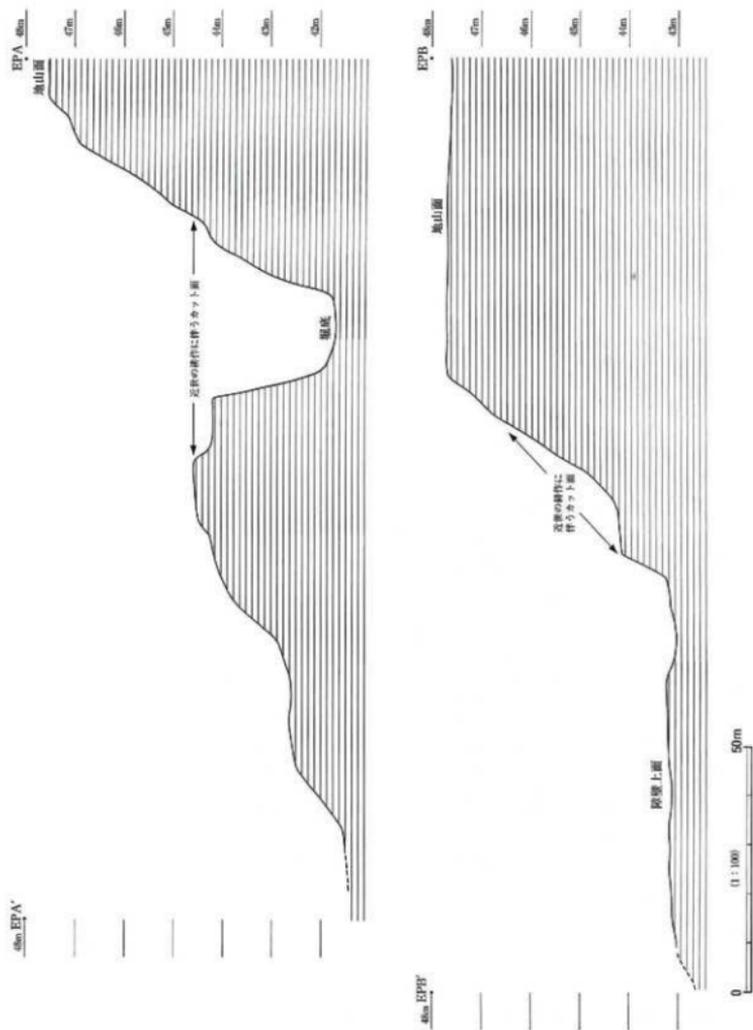


- 1 砂層 小礫を多く含む
 2 砂層 径3-5cmの褐色粘質土を含む
 3 砂層
 4 砂層
 5 砂層
 6 砂層
 7 砂層
 8 砂層
 9 砂層
 10 砂層
 11 砂層
 12 砂層
 13 砂層
 14 砂層
 15 砂層
 16 砂層
 17 砂層
 18 砂層
 19 砂層
 20 砂層
 21 砂層
 22 砂層
 23 砂層
 24 砂層
 25 砂層
 26 砂層
 27 砂層
 28 砂層
 29 砂層
 30 砂層
 31 砂層
 32 砂層
 33 砂層
 34 砂層
 35 砂層
 36 砂層
- 37 砂層 小礫を多く含む
 38 砂層 径3-5cmの褐色粘質土を含む
 39 砂層
 40 砂層
 41 砂層
 42 砂層
 43 砂層
 44 砂層
 45 砂層
 46 砂層
 47 砂層
 48 砂層
 49 砂層
 50 砂層
 51 砂層
 52 砂層
 53 砂層
 54 砂層
 55 砂層
 56 砂層
 57 砂層
 58 砂層
 59 砂層
 60 砂層
- 61 砂層 小礫を多く含む
 62 砂層 径3-5cmの褐色粘質土を含む
 63 砂層
 64 砂層
 65 砂層
 66 砂層
 67 砂層
 68 砂層
 69 砂層
 70 砂層
 71 砂層
 72 砂層
 73 砂層
 74 砂層
 75 砂層
 76 砂層
 77 砂層
 78 砂層
 79 砂層
 80 砂層

第7図 地層断面図



第8图 遺構検出状況



第9図 曲輪ノ横断面図

堀の堆積状況は堀がほぼ埋没した段階の整地・耕作面を境に二分される。下層は丁度堀の凹みが埋まるまでは凹レンズ状の堆積を示し、水が堆積していたような様子も窺えない。柔らかい多少シルト質の砂で、粘性を帯びた層が不規則に間に入る。整地・耕作層は2ないし3層からなり、北側（トレンチ15）では明らかに水田の床土と思われる層が確認される一方、南側（トレンチ14）では2層の整地上のみであった。水田と畑の違いであろうか。耕作土の上は上部の小規模な崩壊ないしは自然堆積による斜め縞状の堆積をみるか、ある時点で大規模に土盛りして全体に肩口を2m～3m程せり出している。これが調査前の旧状となる。

なお、堀前面には幅2mから場合によっては6m程の土塁状の高まりがあるが、これは意図したのではなく、比高差を大きくとれるように肩口から堀を掘った結果であり、むしろ斜面の状況から生じたものと理解される。それゆえ、腰曲輪とみるべきではない。

溝状遺構（第5・7・8図、図版5）

その他についてここで扱う。丘陵上の曲輪と東側の土塁状の高まりとの間は幅3m以上、深さ1m前後の溝状の落ち込みがみられる。セクションの様子やピンボール探査での手応えからして、その深さは地表下50cmを越えることはなく、当初から浅いものとしてよい。恐らくこの落ち込み自体は堀の機能を持っていたであろうが、西側の曲輪盛土が流失ないしは削平を受けた結果、その境界が不明瞭となったのではなかろうか。

その他（第5図、図版2）

南側斜面には表面上は堀割道とも縦堀ともつかぬ地形に直交する溝が2か所視認された。調査の結果、東寄りのものは斜面中段の平場と下とを結ぶ道跡、西寄りのものは自然地形と判断された。

調査区北端の斜面下段（標高35m付近）には僅かながら平場が認められたことから、確認トレンチ（No 5）を入れてみたが人為的な痕跡は窺えなかった。

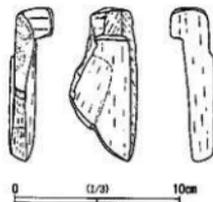
調査区南東端の斜面中段には多少の平場がみられたことから一部調査の手を入れたところ、崖下に小溝を有する平場が確認された。城郭遺構とは思えず、畑地とその耕作に伴う溝とみるべきだろう。

2 遺物

中世に属すると思われる遺物は1点の硯を除いて出土しなかった。これは表層が多く失われた事実を考慮しても意外というべきで、まして旧表土面まで確認した結果でもある。但し、生活痕跡がなく且つ戦国末期の城では時折このような例を見かけるのでそれも城の性格と関連するであろう。また、調査した場所にもよる。

硯（第11図1）

北側の堀覆土中より出土した。縁の一部を含むものの、全体からすれば限られた部分である。それ故大きさ等は縁の厚み（25cm程）を知る程度である。なお、内面は中央に向かう辺りで磨り減っている（20mm→8mm）。しかしその割には墨の付着はみられない。石質は灰緑色の砂岩である。

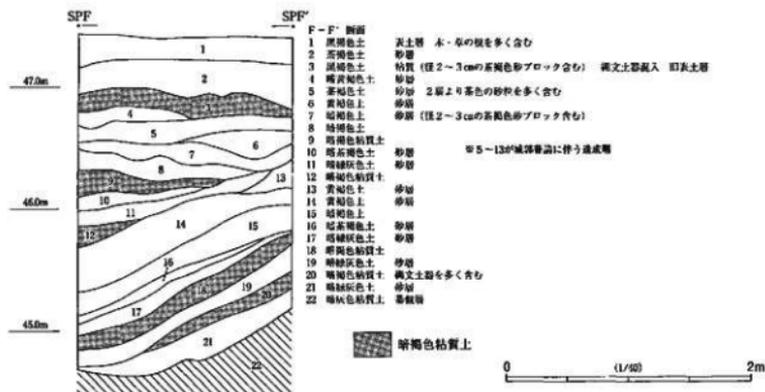


第10図 堀出土遺物

第3節 縄文時代の遺物

縄文時代の遺構は検出されていないが、それで済ましてしまうと次項で扱う大量の縄文土器の位置付けが不明瞭となってしまいます。それ故、未調査地域の様子もふまえ出土した土器が何に伴うものか、見通してみたい。

出土した縄文土器は全部で約2,530点を数えた。調査区の北側からまともに出て出土し、南側では少ない。また、その出土状況は、10F-04グリッドセクションで顕著なように城郭普請以後動かされた土のなかに多く含まれていた。調査区内では北側へ行く程平坦面に近く、南側はまったくその逆となる。つまり、これらの事実から言えることは、平坦面に縄文時代の集落があって（第3図参照）、その住居跡を始めたとした遺構が城郭の普請に伴って壊され、その土砂が斜面から更に堀内に埋没した結果であると思われる。南側との出土量の落差は大きい、集落から離れた地でおかつ堀の排土を用いたということもあるのだろう。縄文時代の遺物には、土器、石器、土製品等がある。以下その項目毎に概説する。



第11図 10F-04グリッド断面図

1 土器

(1) 前期の土器 (第12図、図版9)

明確に縄文前期に属する土器は僅かに1点のみであったが、土器片そのものが小破片が多いので、数量的には断定しえない。

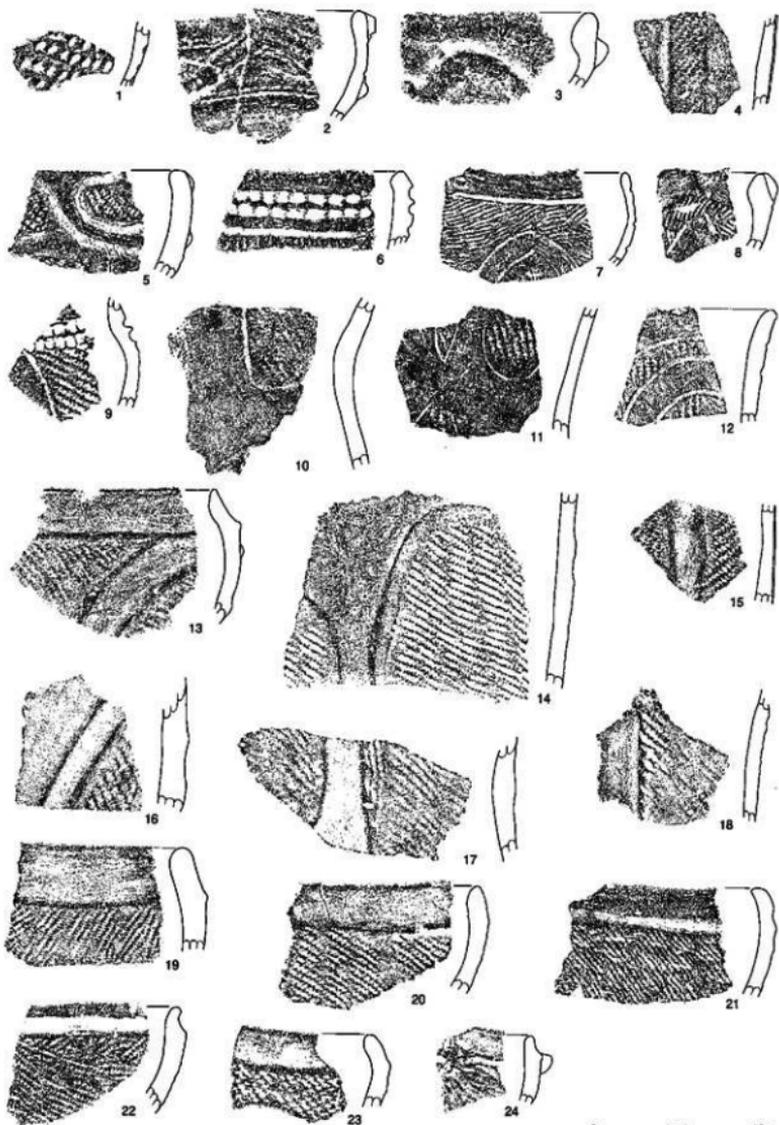
1は浮島式土器の胴部片であり、この期に特徴的な刺突による三角形の連続する文様を配する。

(2) 中期の土器 (第12・13図、図版9・10)

中期の土器は阿玉台式が若干で、主体をなすものは加曾利E期の後半以降である。だがその数量は決して多くなく、推定を含め大凡破片で100点位(底部除外)である。

2、3は阿玉台式土器である。2はキャリパー形の深鉢形土器口縁部片であり、口縁の文様帯はいわゆるキャタピラー文によって区画する。胎土に雲母、石英・長石粒の混入が著しい。3も深鉢形土器口縁部片であり、波状の隆帯が口縁を廻る。胎土に石英・長石粒の混入が著しい。

4~7は加曾利EⅢ式相当の土器である。4は深鉢形土器の胴部片で、縦位の無文帯と縄文帯を沈線で



第12圖 縄文土器(1)

区画する。なお、この土器は周囲を多少整形した様子が窺える。5は隆起線による楕円区画文（区画内は縄文）を施す。6は口縁に2条の連続刺突文と1条の沈線を施し、下位に縄文が僅かに確認される。7は小形の土器で、縄文を沈線による横位の弧線文で面す。把手の一部らしき隆起が認められる。

8～24は加曾利EⅣ相当の土器である。8は小形の深鉢形土器と思われる口縁部である。上位に両脇から削りだしたような突起を有し、以下を山形の縄文と沈線区画の無文部で構成する。9は口縁が内傾して立ち上がる鉢形土器上胴部片である。括れ部下に2条の連続刺突文によって区画された沈線区画の縄文帯と無文帯が確認される。10、11は瓢箪形深鉢形土器の胴部片である。沈線による楕円や剣先状の縄文部外側を擦り消している。12は口縁が多少外反する深鉢形土器口縁部片である。沈線区画の渦卷文を施す。13以下はいわゆる微隆起線文系土器の深鉢形土器片である。

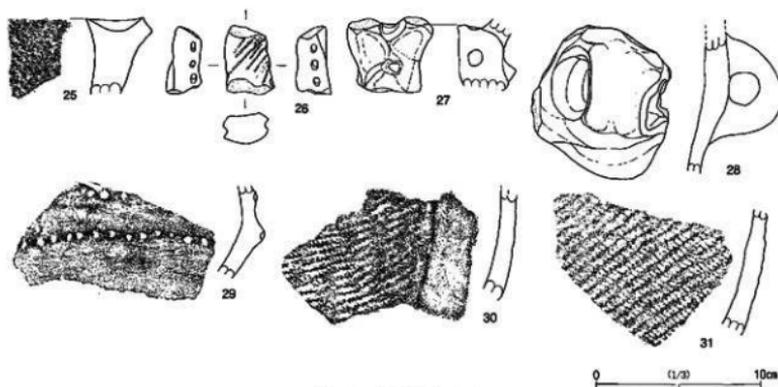
13は口縁部に幅広の無文帯が廻り、胎土には多量の砂礫を混入する。14～18は胴部片であるが、厚手で多少もろい胎土である。この内、14はとりわけ大型の土器にならうかと思われる。19、20も口縁は13と同様ながら、微隆起線文以下は一面の縄文帯となる。なお、15は胎土にスコリアらしき赤褐色の塊が顕著である。21、22は口縁に凹線文を伴う多少内傾する深鉢形土器口縁部片である。23以下は全体に縄文を施すものであろう。23は口縁無文の微隆起線文系深鉢型土器口縁部片であるが、隆起は弱く、無文部のなぞりもない。また、縄文は複節である。24は小形の鉢形土器であり、口縁部に突起を有する。

25～27は把手ないし突起部である。時期的には加曾利EⅣ期に伴うものであろう。25の縄文施文は一面のみであり、26は側面に刺突文を施す。27は全体の形状が不明であるが一応推測で向きを示してある。28は深鉢形土器の口縁部に付くものである。

29は位置付けが不明ながら中期の所産であろう。器形的には直立する口縁を腰で受ける形態にならうか。腰の突起部と立上り部に列点文を施し、内外面ともにミガキが入っている。

30、31は中期の深鉢形土器胴部大型片である。30は微隆起線文系、31は縄文のみである。

これら中期の土器は既にある程度個々に説明したが、概して胎土が軟質であり表面は砂粒が浮き出た感じで、色調は明るい黄褐色を呈するものが多い。



第13図 縄文土器（2）

(3) 後期の土器 (第14~20図、図版11~17)

32~41は称名寺式に相当する土器である。32~35、37は深鉢形土器の口縁部(～胴部)ないし胴部片である。32は数単位の波状口縁となる土器で、口縁端が内側に肥厚するものである。沈線区画の縄文を地文に崩れたX字の無文帯を核として文様を構成する。33も同様であるが、文様構成はより直線的で、無文帯は擦消しによる。34は表面が軟質で縄文は認められない。35は口縁部片で、間に列点を伴うものであり、胎土は軟質である。37は胴部片であり、沈線区画の文様のみである。36、38~41は胴部片である。36は鳥の足跡状のアトランダムな施文、38は35と同様の文様構成である。39~41は鉢形ないし碗形土器の胴部片であり、沈線による幾何学的な文様構成をとるものである。なお、胎土や色調は前代と類似する。

42~86は堀之内Ⅰ式相当の土器である。42~48は深鉢形土器の口縁部及び胴部片であり、何れもこの期に特徴的な炭手状文を施すものである(地文は縄文)。口縁部は外反させて凹線を廻らすもの(42)、多少肥厚させた上に凹線を廻らすもの(43、46)、断面S字状とするもの(45)、平口縁に沈線を廻らすもの(47)と様々である。

49~52は胴部片であり、縄文を地文として沈線による直線や弧線、また、剣先状の文様を施す(内部は擦消し)。53は平縁の口縁端を指頭による圧痕列を加えたものであり、口縁が多少外反するタイプであろう。54は口縁を肥厚させ、そこに円形の圧痕列を加えたもので、胴部にかけては半円の重弧文を施す。なお、口縁は低い波状となる。55は1点から派生する隆帯に刻みを入れたもの、56は隆帯で小突起から派生する弧線を、57は太い沈線と窠書状の線で地文(縄文)上に文様を描いたものである。また、58はキュービットアイ状に細長い粘土帯の中央を凹ませたもの、59は細い条線を縦位に施し、60は沈線による同心円文を施したものである。

61以降は中～小形の深鉢形土器と思われる。61は波状口縁の頂部から両端を凹ませた粘土帯を貼り付ける。62は口縁外面を三角縁状とし、そこに工具による円形の圧痕文を廻らしている。63は口唇部に沈線を廻らし、縄文を地文としてその上に縦位また斜位の沈線を等間隔で施す。比較的薄手である。64は口縁が多少内傾する小形の鉢になろうか。二重の円弧に縄文という組合せである。65は多少波状口縁となる土器で、沈線下部に縄文を施し、円形刺突を結ぶかと思われる沈線が垣間見える。66~69は平縁の鉢形土器口縁部で、66は一条の沈線下に縄文を、また、67は4本の条線を廻らし、68、69は竹管らしき工具による条線(地文は縄文)を施している。70は小形の広口壺とも称すべき器形と思われ、多少波状をなして肥厚する口縁頂部に円形の刺突を有するものである。71は胴部であり、櫛歯状の同心円になろうか。

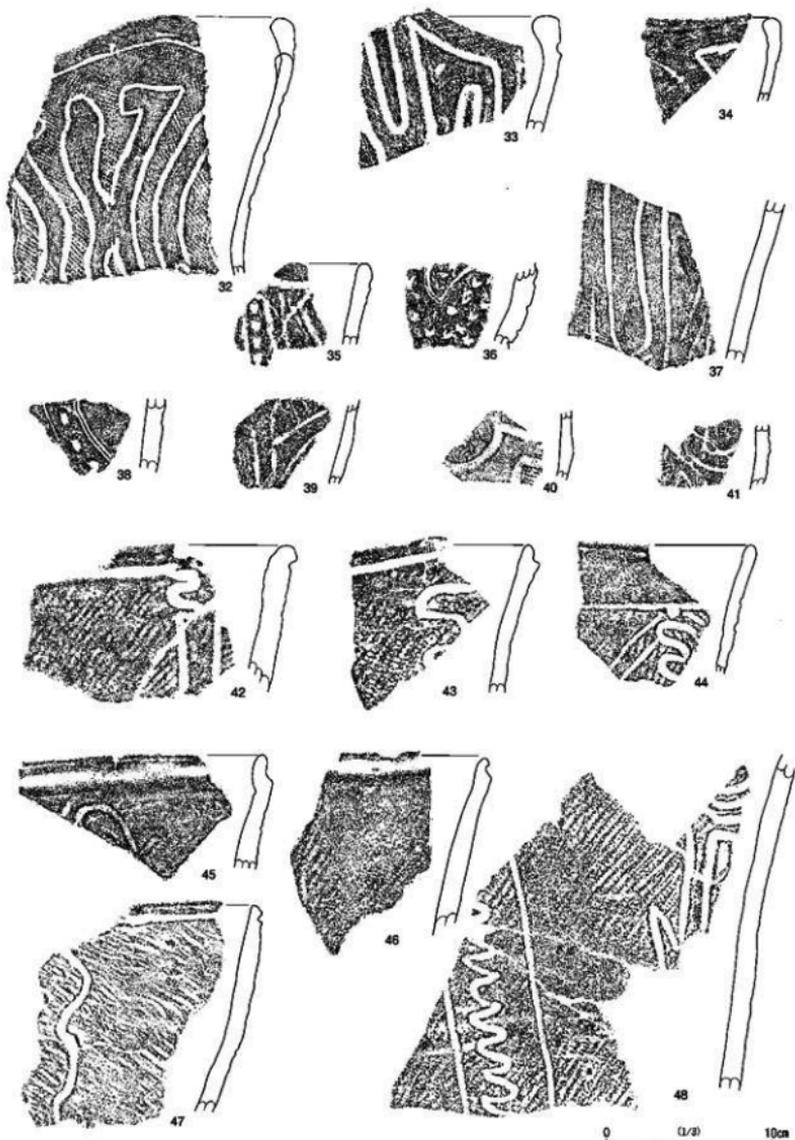
72~77は縄文のみで飾られる深鉢形土器で、77は底部を欠くものそれ以外はほぼ完存品である。

78は文様がなく、波状口縁と口縁下部に小孔を有するものである。79は波状口縁の頂部に円形の凹みを付け、その下に同じく円形の刺突痕を廻らす。

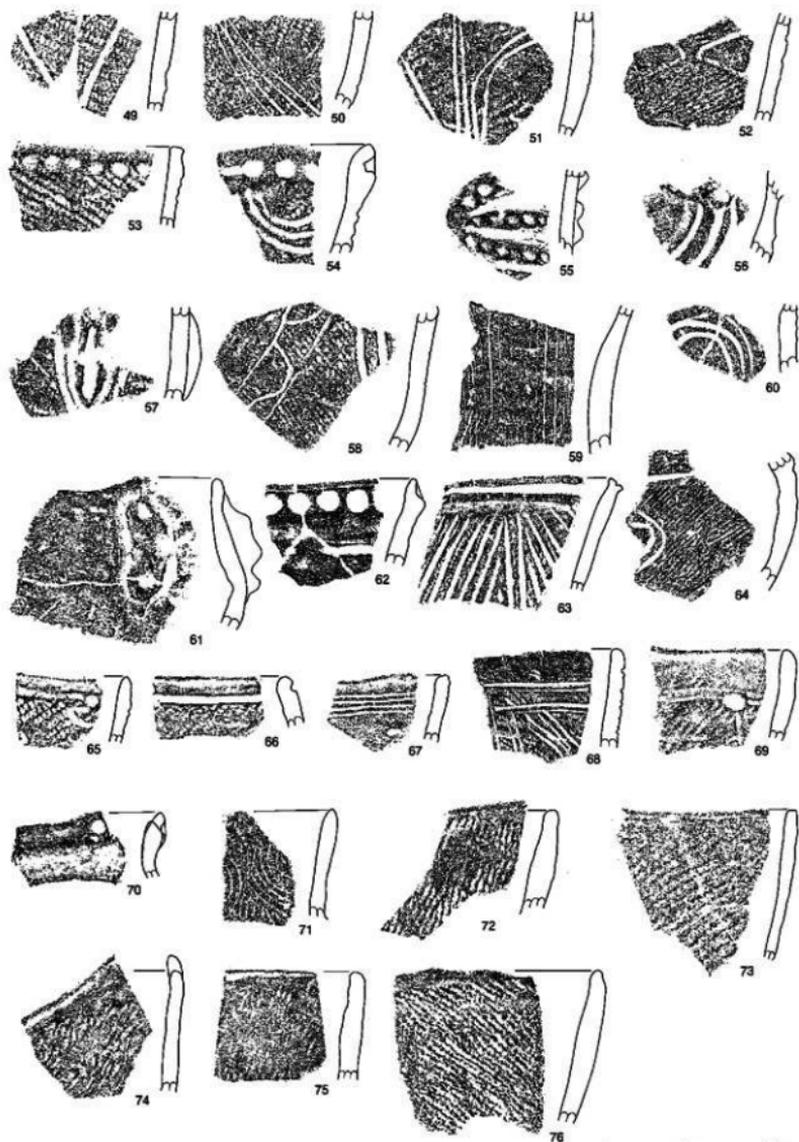
80~86は把手である。80~73はいわゆる環状把手、74、75は橋状把手である。76は動物を象ったかと思われる把手で、内面には刺突と沈線を組み合わせた文様を施す。77は注口土器の注口部である。

胎土・焼成は明るい色調の土器が概して赤色のスコリアを多く含む軟質なのに対し(34~36に代表される)、黒褐色～褐色の土器は器壁表面に砂粒が顕著である。

87~90は口縁が外反するコップ形の鉢形土器を一括した。堀之内Ⅱ式相当に比定されるかもしれない。87は緩い波状口縁を呈する土器であり、縄文を地文とし、口縁部と胴部に竹管状工具で横位の条線を施す。胴部の条線下に斜位方向の条線もみられることから、ハの字状の文様になるかもしれない。88は浅い沈線



第14図 縄文土器(3)



第15圖 縄文土器(4)

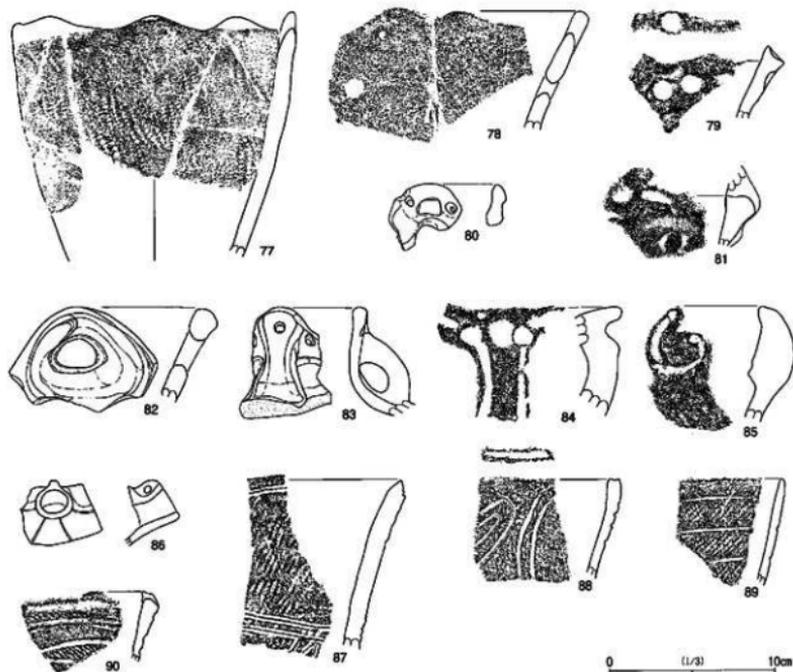
のみ、89、89は帯縄文帯を有するもので、90は口唇部に小突起を設ける。

胎土は87が砂粒を含み明るい色調を呈する一方、88以降は薄手で黒褐色を呈する。

91~142は加曾利B式に相当する土器である。

91~119は浅鉢ないし小形の鉢形土器としてよい器形で、口縁部また体部（胴部片）片である。91は口縁部が段をなして内傾するもので、体部中位には沈線区画の縄文帯を施す（沈線上に2ヶ対の凹形工具圧痕）。92は口縁が直立するタイプであり、口縁部外面はヘラケズリ状の調整痕がみられる。93は胴部に一段を有するもので、横位の沈線区画の縄文帯に縦位の楕円形圧痕を区画的に施す。94は内湾する体部中~下半の土器で、同じく沈線区画の縄文帯を施すものである。95は多少内傾する土器で、外面は全体に縄文を施し、口縁内面に一条の沈線を施す。

96~103までは口縁がほぼ直線的に外反するものである。96は外面に縄文を施し、内面は竹管状の工具で横位に多条の段を作り出している。97は外面は無文で、内面は縄文施文後に沈線を施す（多条）。なお、一部に沈線を鈎状とする。98は蹄状工具による横位の条線文上にVの字状の刺突（2単位）を施す。99は口唇部が断面三角形となるもので、外面は3本の沈線を施した下をヘラケズリ調整とする。100も99と同様の口唇部を有するもので、体部に条線らしき文様がみられる。101は口縁が多少波状になるもので、沈線帯下



第16図 縄文土器（5）

は無文とする。器形的には口の開いたコップ形になろうか。102は外面に縄文を施すのみの土器で、薄手である。103は細い沈線以下に斜条線を施すものである。104は口縁が多少S字状に屈曲し、口唇部に荒い刻目を施し、体部に横位の条線を施す。浅い碗形の器形で台付きになろうか。

105~108は胴部で一旦窪まる小形の波状口縁鉢形土器口縁部である。110~113は胴の屈曲部破片であり、恐らく同種の土器になろう。110は刻み目というより刺突であり、沈線で区画し、条線はみられない。111は括れ部に刺突で区画し、そこから斜めに条線を引いて文様とする。小形の土器である。112は胴部の括れが明瞭であり、上胴部はミガキを入れ、下胴部は弧線を横位に連ねる文様になろう。113も括れ部付近の破片であるが、沈線区画の縄文帯であり、該期と思われるものの類例は少ない。109はひねった波頂部に刻みを入れた口唇部を有し、体部は等間隔の斜条線を網状に施す。小形の土器である。115も同様ながら、こちらは口唇部に刻み目を有する。114、116、117は器形がはっきりしないものを報告する。114はコップ形、116はあるいは波状口縁をとる可能性がある。118、119は無文の浅鉢形土器体部と口縁部であり、体部の段より下位はヘラケズリを施す。

120~126は大形の深鉢形土器口縁部（一部胴部）片であるが、いわゆる絢線文系以外に相当する。斜格子文（120、121）、縄文（122、125、126）、多少波状口縁を呈し条線を荒く施すもの（123）、無文（124）、と様々である。このうち、125、126は大形の破片でもあり、いわゆる精製深鉢形土器としてよい。

127以降は絢線文系土器を一括した。127は縦位にも押捺帯を貼り付けるもので、この種の土器はこれのみであった。128~140まではこの期に特徴的な土器群である。口縁のほかにも胴部にも押捺粘土帯を有し、縄文施文後に荒い条痕を弧状ないし横位に施すものが多いが、135、136のように縄文のみの場合もある。なお、134は押捺の際の爪痕が明瞭にのこっている。

137、138は既述したグループと類似するものであるが、大形の破片でもあり別個にまとめた。同様、139、140も絢線文系土器の胴部大形片である。

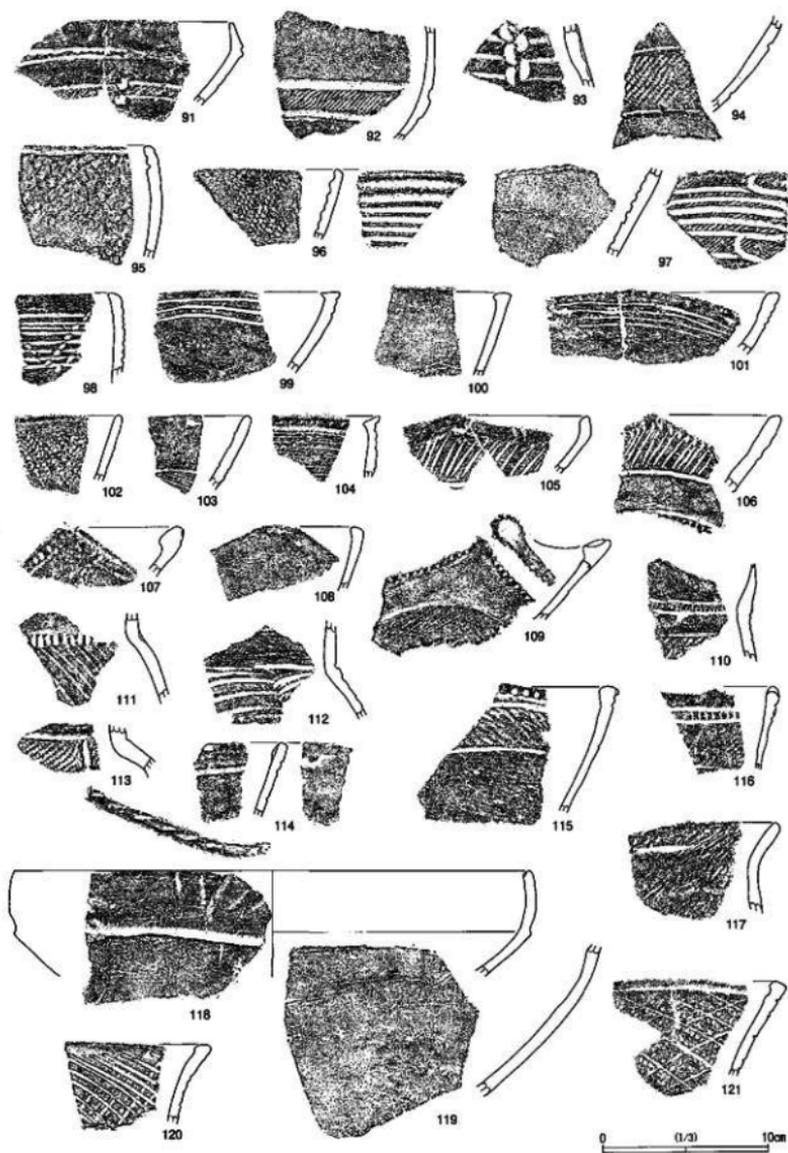
141、142は台付鉢形土器の台部である。その文様構成から本期に伴うものと思われる。142は円形の透孔を穿つ。

これら加曾利B式土器の胎土・色調については、砂粒分が多いためか器表がザラザラして暗い色調のものが多く、逆のものは少ない。また、前代の堀之内式と較べると明らかに器壁が薄く、これはいわゆる粗製の深鉢形土器においても同様である。

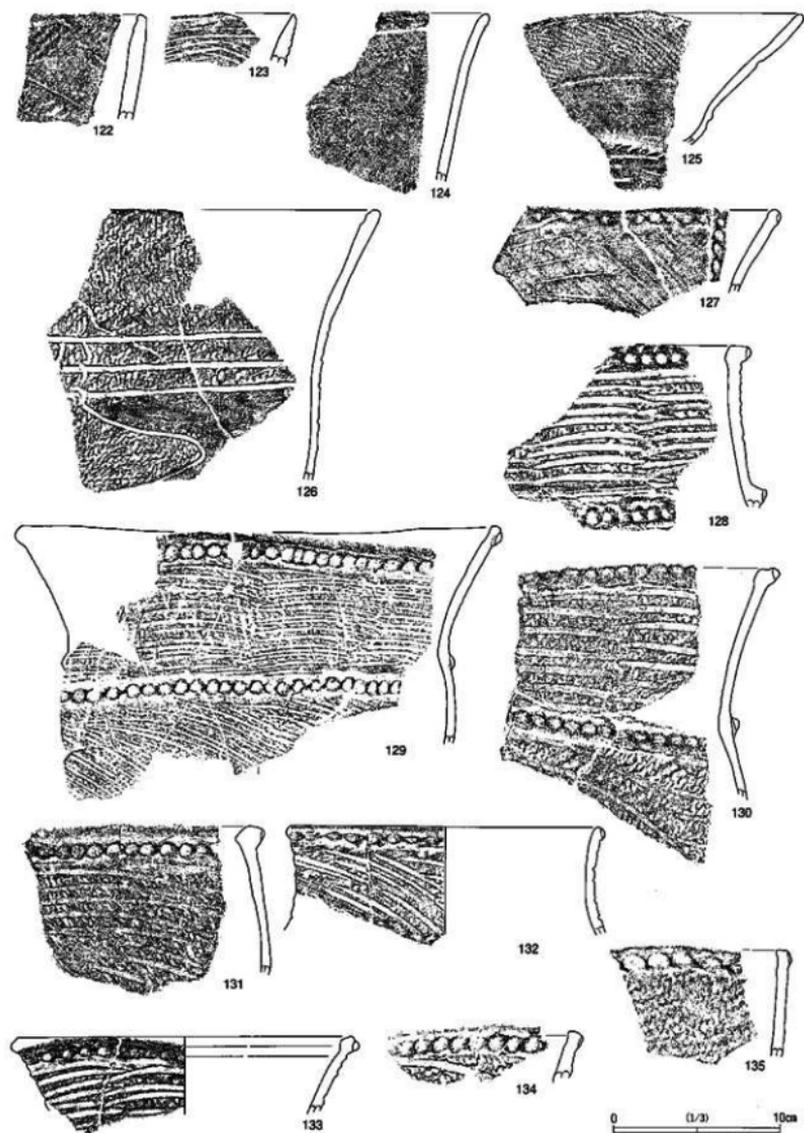
143~150は曾谷式相当と思われる土器である。143は口唇部を平縁とし、口縁に沈線区画の刻み目を施し、以下を目の詰まった縄文で充たす。口縁が多少内傾気味の深鉢形土器になろうか。144は口縁が大きく外反する小形の浅鉢ないしは台付浅鉢形になるかと思われる。縄文帯間を無文帯で分けるもので、体部の刻み目は竹管による。145、146は突起状の貼瘤を有する土器である。145は小形の鉢形土器で、口縁は明瞭な刻み目となる。146は胴部が大きく外反し、口縁が直立する深鉢形土器の各部である。胴部の刻み目帯と沈線による半円の縄文区画を特徴とする。147~150は横位の弧線縄文帯とでも称すべき土器であり、共に薄い器壁である。

胎土は砂粒を含むものの前代ほどではなく、概して焼き締まった感がある。色調は黄褐色ないしは暗（赤）褐色を呈する。

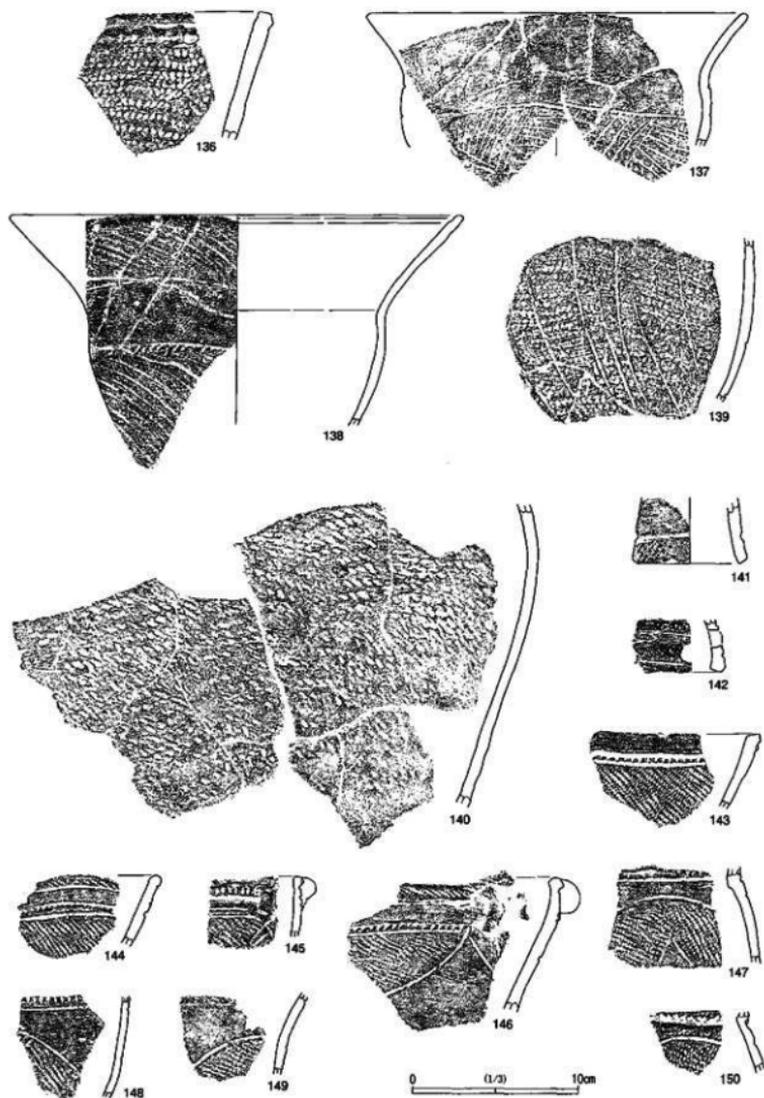
151~181は安行式相当の土器であるが、172~174、178などは晩期に属する可能性もあろう。何れも口縁部である。151~153は口縁部に縦長の貼瘤を有する深鉢形土器であり、文様は類似する。154も同種である。



第17图 縄文土器 (6)



第18回 縄文土器 (7)



第19図 縄文土器(8)

155は口縁が内傾する鉢形土器で、文様構成は同じである。156～160は山形の波状口縁を有する深鉢形土器である。156は頂部に豚鼻状の突起、157は突起状の貼瘤を有し、158～160は刻み目付縦長の貼瘤と一部に豚鼻状の突起を文様起点部に配したものである。161～174は紐線文系土器の系統である。口縁の押捺は半円の刻みに近く（169は指頭によるもの）、背面の凹線は消えている。また、口縁と胴部の刻み目隆帯間を縦に弧線で区画するもの（173）や口縁の刻み目がほとんど感じられないもの（174）があるが、これらは後出する要素であろう。何れも厚い口縁部に対し胴部が薄いという特徴がある。175～177は荒い条線を施すのみの深鉢形土器であり、口縁部が多少内傾するものである。178、179は無文の深鉢形土器である。180は小形且つ薄手の鉢形土器であり、口縁部に半捻りの突起を基点とする区画文を施す。縄文の施文はなく、黒褐色を呈する。181は台付深鉢形土器の大形片と思われる。口唇部と胴有段部に浅い刻み目列を施し、内面は丁寧なナデ調整である。

胎土は紐線文系統の土器を除いて砂粒を含む点は前代と同様ながら、焼き締まりは弱い。色調は様々だが多少全体に赤みを帯びている。

（4）晩期の土器（第21図、図版18）

182以降は晩期に相当すると思われる。182、183は深鉢形土器口縁部である。沈線による枠を口縁部に連続させるもので、表面の調整はヘラナデによる。184は鉢形土器口縁部である。口唇部に貼付けよるボタン状の突起を作り出し、口縁～体部は沈線による楕円や入組み文様を施す。185は浅鉢形土器口縁部であり、口縁に陰刻によるボタン状の突起を、口縁～体部には入組み文様を施す。186は深鉢形土器口縁部であり、内外面の口縁下を太い沈線で区画し、外面は粒の太い縄文を施文する。厚手の割には堅牢な土器である。187、188は器形は不明ながら小形品であろう。沈線というより彫りだしたような施文で、器壁も薄い。189は口縁が外側に屈曲する小形の土器である。横位の低い粘土帯に円形の刺突列を廻らす他は無文である。なお、187～189については一応晩期としたが確信はない。190は口唇部に小突起を有する小形且つ短頸の壺で、無文の土器である。191は屈曲する口縁を有する比較的小型の深鉢形土器である。口唇部に小突起を5単位程度作りだし、口縁上部に横位の条痕を施す他は無文である。

胎土は砂粒を含むが、186を除きその程度は弱い。概して薄手で堅牢ながら、189や190は比較的軟質である。色調は185、187～189が黒褐色を呈する他は黄褐色～赤褐色である。

（5）中期～晩期の土器底部（第22図、図版18）

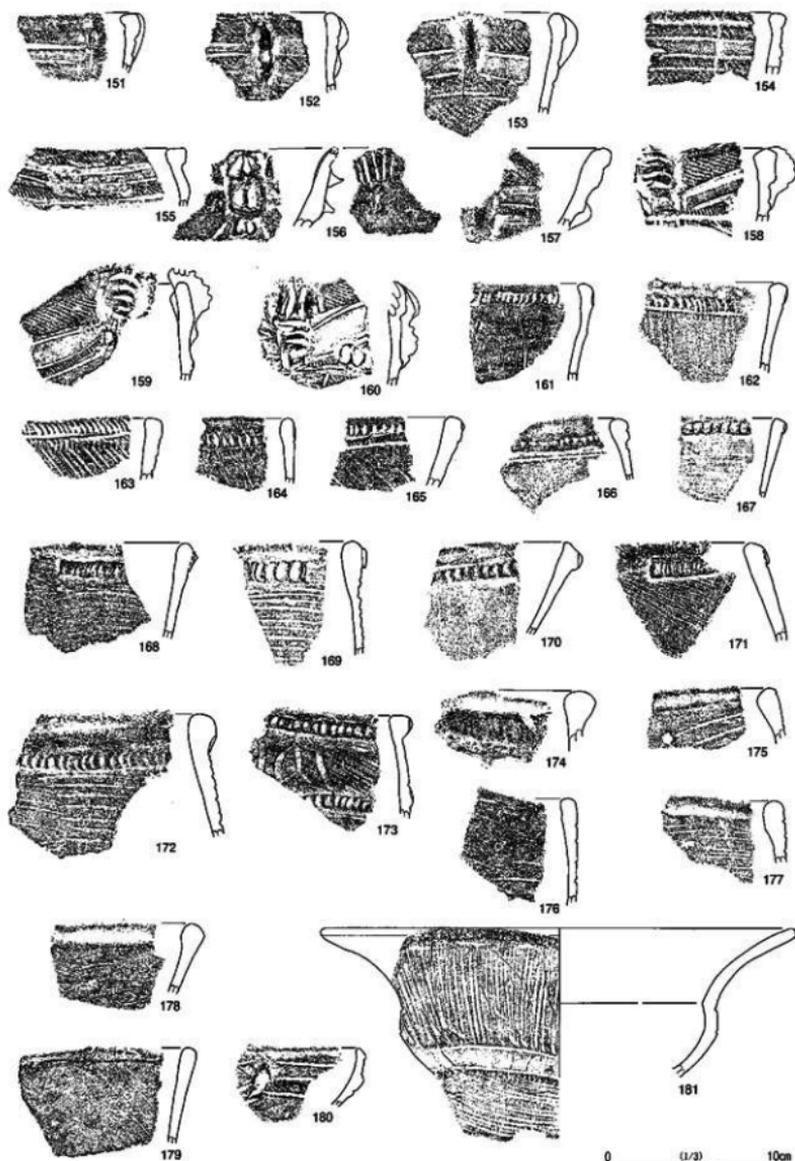
出土した土器のうち、底部で且つ図示に堪えるものをここで報告する。

192～195は底からそのまま上に立ち上がるもので、このうち192は内面が黒色を呈し、195は網代底となる。196、197は底から幾分外に傾きながら立ち上がるもので、器壁は他より薄い。198～200は小さな底部でありこのうち198は比較的厚手である。なお、201は底部近くまで条線が施されている。

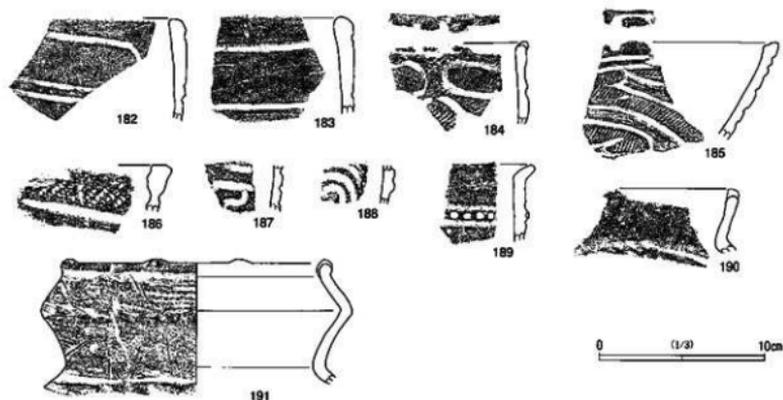
これら底部の時期であるが、ほぼ後期の所産と思われ、201のように明確に加曾利B期に比定できるものもある。なお、底部については個体数との関連もあるので一定の基準でカウントしたが、土器片の全体量からしてそれが即対応するとも思われない。あくまでも一つの種類結果である。

第1表 縄文土器底部遺存度別個数

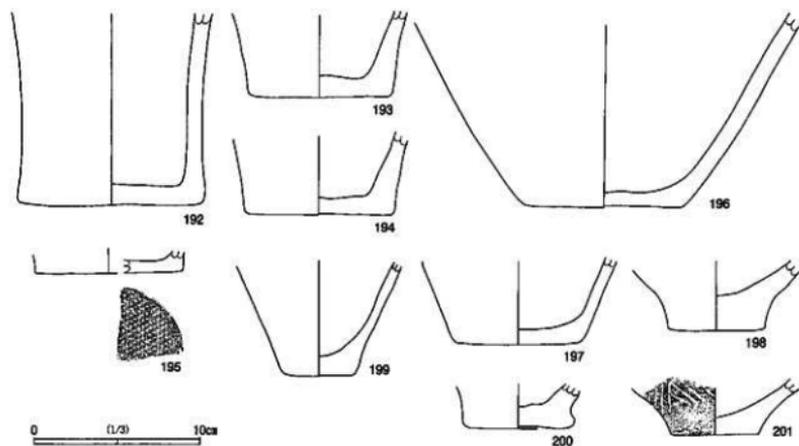
個数	1/4以下	1/4強	1/3強	2/3強	1/2強	完存
数量	53	6	1	1	7	2



第20圖 縄文土器 (9)



第21図 縄文土器 (10)



第22図 縄文土器 (11)

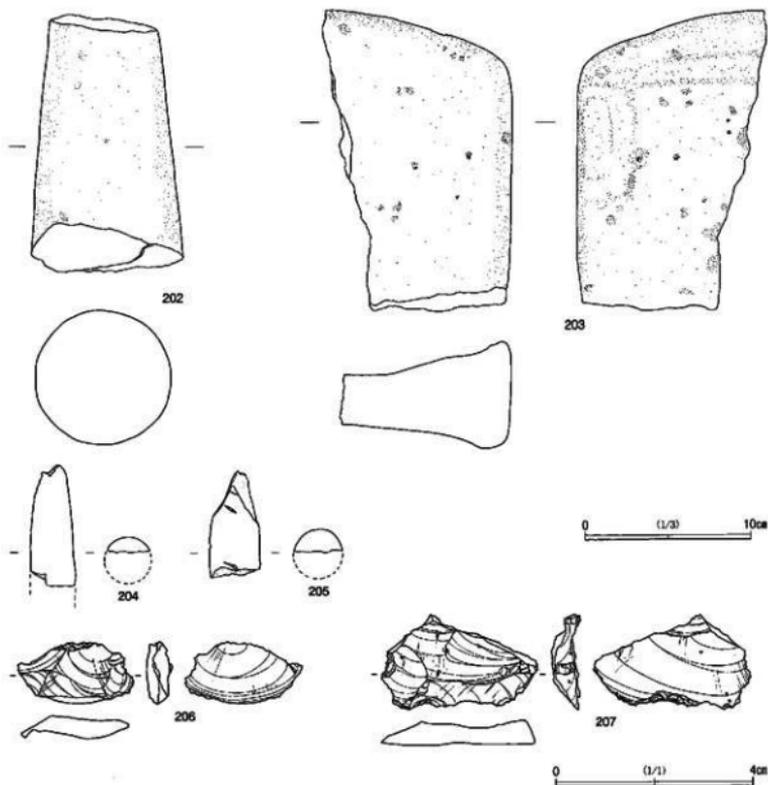
2 石器 (第23図、図版19)

202から204は石棒である。202は端に近い部分の破損品で、石質は細かい気泡のある安山岩であり、色調は灰白色を呈する。203、204は良く磨かれた泥岩製の破損品であり、203はくすんだ灰赤色、204は灰黒色を呈する。

205は石皿で、先端が多少外側に弧を描く方形のタイプかと思われ、その右端コーナー部に当たる。底面四隅に突起が付き、内面は両脇に縁帯らしき痕跡がある。また、先端の底面は弧に合わせて薄く整形され

ている。石質はブロック状に気泡のある安山岩であり、色調は暗灰色を呈する。内面の使用痕は明瞭であり、もっとも深い部分でその厚みは約1cmに減っている。

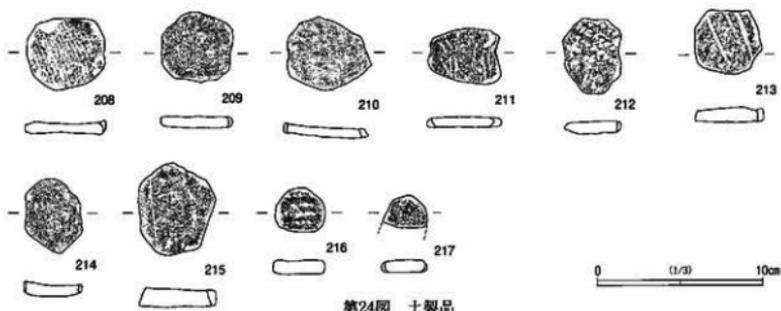
206、207は何れも圓縁の一部に使用痕のある剥片である。共に黒曜石製であるが、207は透明な、208は気泡のみられる素材である。



第23図 石器

3 土製品 (第24図、図版19)

208～213は土器片鏃である。しかし、縄の掛け口はそれほど明瞭でなく、一応僅かな刻みないしは痕跡の窺えるものを報告する。時期的には後期加曾利B式に属する土器片で占められる。214、215は土器片鏃の未製品ともとれるが断定はしえない。214は加曾利B期、215は堀之内期に属する土器片である。216、217は土製円盤である。周縁部を擦っているものを分離したが、217は半個体である。所属時期は後期と思われる以外は不明である。



第24図 土製品

第4節 古墳時代以降の遺物 (第25図、図版19)

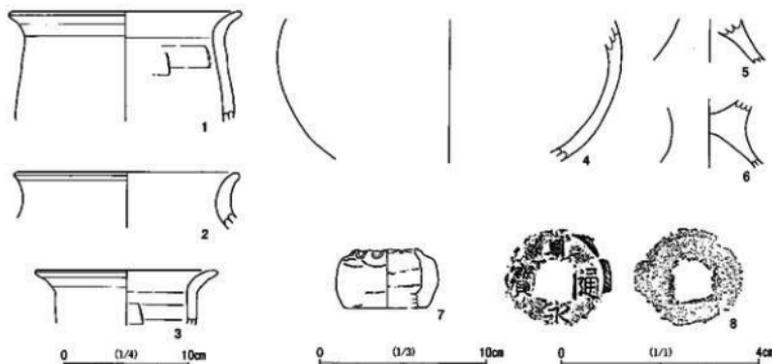
古墳時代についても縄文時代の章で述べたことと同様の関係が指摘しう。即ち、縄文時代と較べればはるかに少ないものの(報告遺物も加えて土器片30点程度)、古墳時代の遺物が多少出土している。調査範囲内にはもちろん鉄器はなく、また、遺物自体も縄文時代と同様、北側の斜面や堀覆土内にはほぼ限られていることからして、やはり北側の平坦面に対応する遺構が存在するのであろう。

古墳時代の遺物は土器片のみであるが、出来る限り復元実測して報告した。そのため、径については確実とは言えない点もある。なお、時期的には総て後期に属すると思われる。

1は甕形土器口縁部であり、縦方向の荒いヘラケズリが明瞭である。2は器形としては広口壺に近いものであろう。3は1に近似する土器である。4は甕形土器胴部1/2~1/3個体の土器である。5、6は高坏脚部であるが、5は約半個体である。6は手捏土器約1/3個体であり、口縁に指頭圧痕(列)を施す。

胎土は2、4、6が赤色スコリアを含む軟質且つ黄褐色なに対し、それ以外は砂粒が浮き出たような赤褐色を呈する。

その他に平安時代の甕形土器の破片と近世の陶磁器、銭貨(いわゆるハ貝の新寛永)が出土している。近世の磁器としては伊万里産の茶碗片、瀬戸産の貧乏徳利片などである。丘陵端という条件を考慮すると少ないともいえないだろう。なお、銭貨を除いては図示しない写真を省略した。



第25図 古墳時代以降の遺物

第3章 市神遺跡

第1節 調査の方法と基本層序

1 調査の方法（第26図、図版1・20）

市神遺跡は、南西から北東方向にのびる自然堤防上の東半部に立地しており、現河川、一宮川は遺跡の南側を西から東に流れるが、遺跡の北側にも低い部分が帯状に認められ旧河道であった可能性が高い。今回の調査地点は、遺跡の北東端を横切る県道市原茂原線の両側であり、現況では畑と水田、住宅への進入路や耕地への作道である。発掘調査は前述したように平成18年度と平成19年度に実施した。

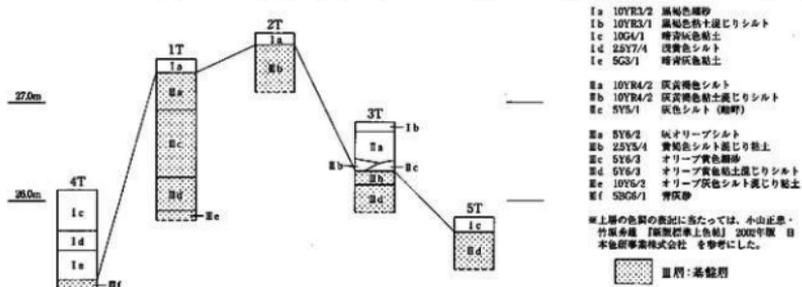
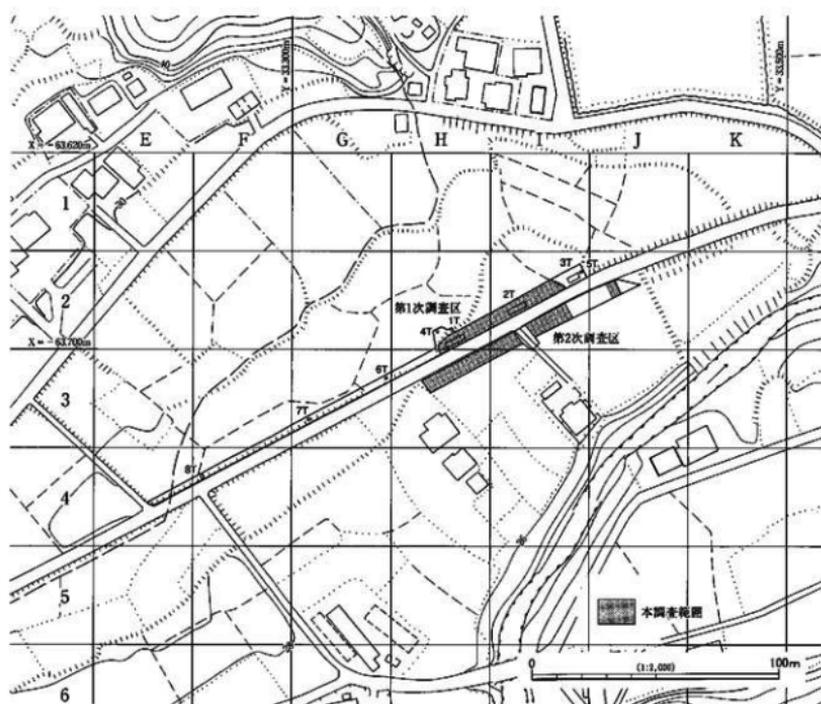
平成18年度に実施した第1次調査では現道の北西側440mについて確認・本調査を実施した。調査区は幅約4mと狭く、小規模なものも含めて8か所に確認トレンチを設定し、確認調査の面積は44m²である。確認調査の結果、掘立柱建物跡や井戸などの遺構が検出された自然堤防上の280mについて本調査を実施した。確認調査の図面作成にあたっては事業者により設定された用地境界杭（幅杭）を使用し平面図を作成した。本調査の実施にあたり、40m×40mの大グリッドを設定し、さらにその中に4m×4mの小グリッドを設定した。大グリッドはX=-63,620m、Y=33,060mを起点とし、南に1、2、3・・・、東にA、B、C・・・とし、1A、2B、3C・・・と表記した。小グリッドは北西隅を00とし、東に00、01、02・・・と1の位を増し、南に00、10、20・・・と10の位を増し、00～99の小グリッドを設定した。これにより、各グリッドは1A-00などと表記し、同時に北西隅の座標点を意味することとした。

平成19年度に実施した第2次調査では現道の南東側525mについて確認調査を実施した。確認調査は全域の表土除去を行い、その内遺構の検出された北東端と南西半284mについて本調査を実施した。図面作成にあたっては事業者により設定された用地境界杭を使用して平面図を作成し、断面図等の作成に使用した用地境界杭については、水準測量を実施して標高を持たせた。1次調査の成果との突き合わせについては整理作業時に用地境界杭の測量成果をもとに、1次調査で作成した大・小グリッドに合わせ、その方眼を図面に加筆した。

遺構の調査にあたっては、遺構の内容ごとに略号を使用し、その下に3桁の番号を付した。使用した略号は1次調査では、SA：櫛列跡・跡跡、SB：掘立柱建物跡、SD：溝、SE：井戸、SH：柱穴である。2次調査では、SD：溝、SI：堅穴住居跡、SK：土坑、P：柱穴である。1次調査と2次調査ではそれぞれ001から始めているため一部の遺構で重複する。遺構の略号の先頭に1：1次調査、2：2次調査とし、本報告では1SB001、2SK001などと表記することとした。また、2次調査のP：柱穴はSH：柱穴に読み替え、2SH001などと表記したが、遺物の注記は従前のままである。なお、個々の柱穴については1次調査、2次調査ともに遺物の出土した柱穴のみ番号を付したため、それ以外の柱穴については番号を付していなかった。整理時に調査時ごとに連続する番号を付し、中世以前の柱穴と考えられるもの全てに番号を付した。但し、調査時に既に番号を付した柱穴については、近・現代のものと考えられるものでもそのままとしてある。

2 基本層序 (第26図)

基本層序は、1次調査で両側の水田を含み、自然堤防を横断するように作成した土層柱状図によるものである。I層が現耕作土層、II層が近世・近現代の耕作及び整地土層、III層が基盤層である。遺構はIII層上面で検出した。



第26図 トレンチ・本調査区と基本層序

第2節 遺構

第1次調査で検出された遺構は、中世の掘立柱建物跡3棟、欄列跡・塀跡1条、井戸2基、溝2条、第2次調査で検出された遺構は弥生時代の土坑1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、中世の掘立柱建物跡4棟、欄列跡・塀跡2条、溝5条である。両調査を通し、中世が最も充実していることから中世、弥生時代、奈良・平安時代の順に詳述する。

1 中世

掘立柱建物跡

1SB001 (第30・32図、第2表、図版21)

1次調査区中央、2I-42~52グリッドで検出した柱穴列群である。1SH029・030、径0.5mの円形の柱穴2基のみで建物の南東角と判断した。柱列方位はN-39°-Eである。

いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

1SB002 (第30・32図、第2表、図版21)

1次調査区中央、2I-42~52グリッドで検出した柱穴群であり、1SB001に重なる様に検出された。1SH031・032・037、径0.4m~0.5mの円形の柱穴3基のみで建物の南東角と判断した。東側柱列の方位はN-3°-Eである。

いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

1SB003 (第29・32図、第2表、図版21)

1次調査区中央、2I-42~52グリッドで検出した柱穴群である。1SH001・002・004・010~022・038・039、径0.2m~0.3mの円形小柱穴により構成される。1SH005周辺と1SH010周辺は複数の柱穴が見られることから隅柱とした。中央に間仕切りを有し、北西を欠く建物とし、梁方位N-19°-Wである。

遺物は1SH001から平安時代の灰釉瓶底部(第39図51)が出土しているが、本遺構との関連は薄いものと判断した。

2SB001 (第31・32図、第2表、図版22)

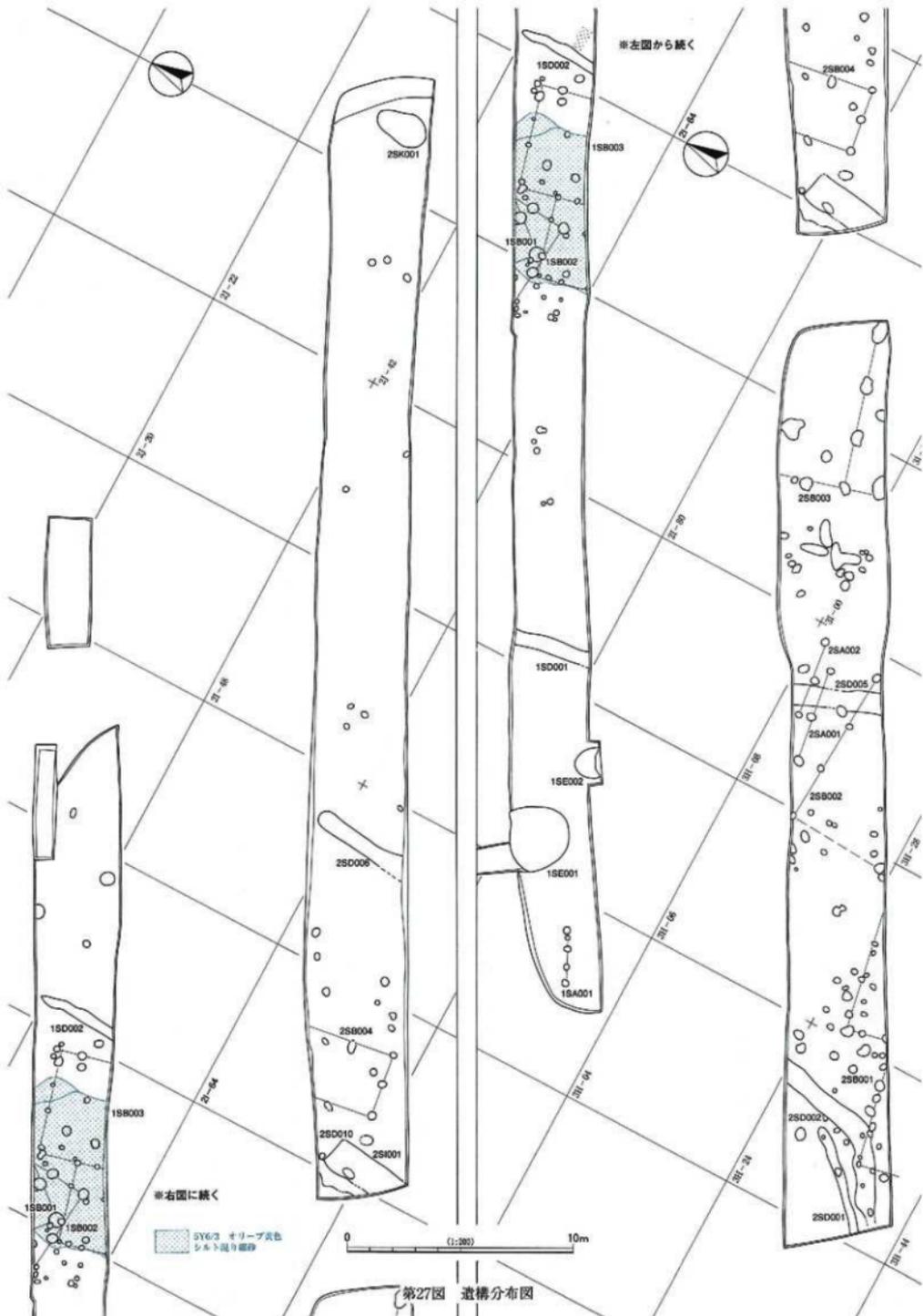
2次調査区南西端、3H-26~34グリッドで検出した柱穴群である。2SH004~008・011・013・014・049~051・053・055・056・067・073・074・077・078の小柱穴で構成され、かなり不揃いであるが、耕作痕とは考えられない柱穴が集中するため、1SB003のような北西を欠く建物とした。梁方位は概ねN-13°-Wである。

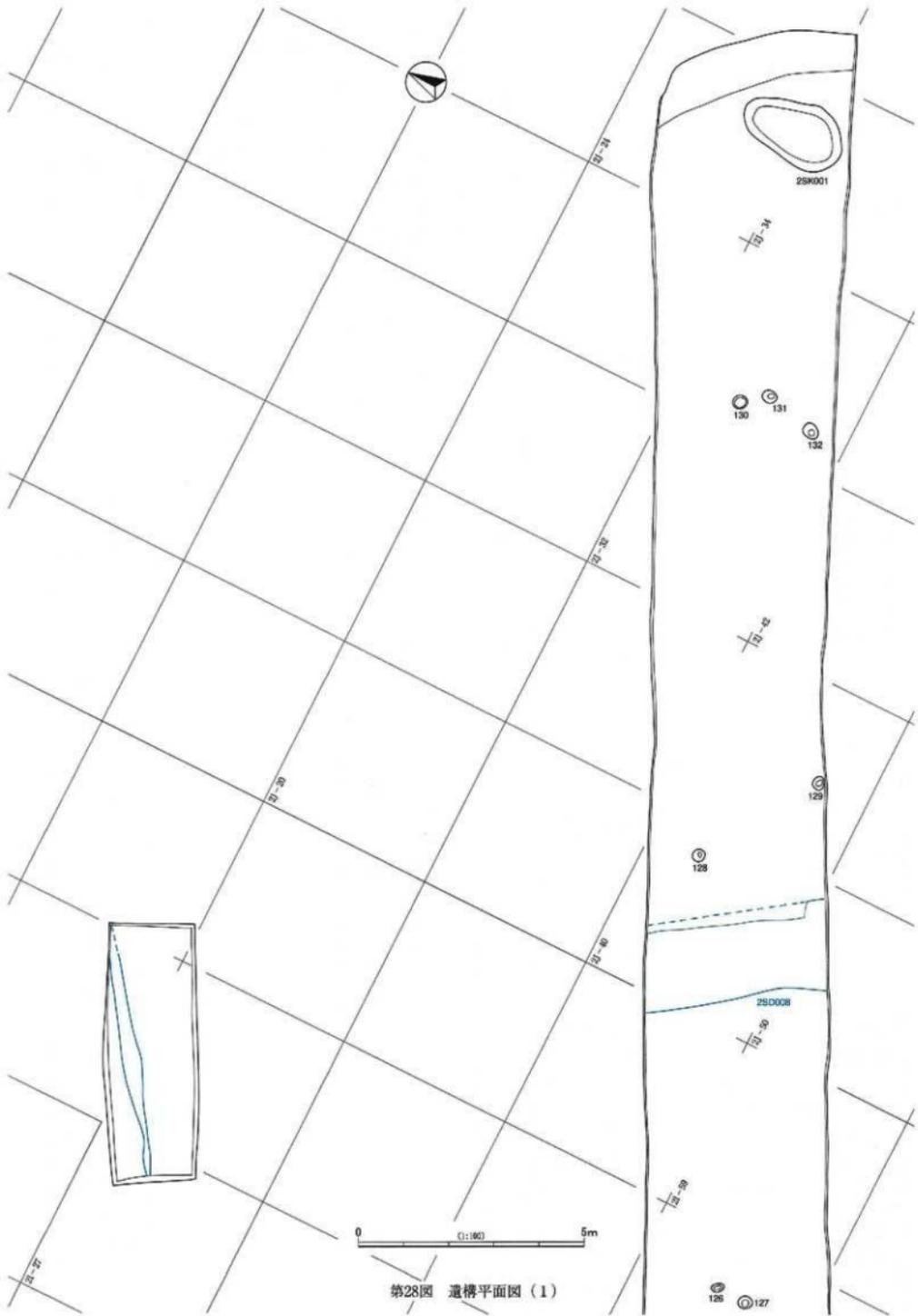
遺物は該期のものとして2SH013から鉄刀の茎(第41図1)が出土した他は、2SH004~014までの柱穴で弥生時代、古墳時代後期から奈良・平安時代の土器片などが出土したが図示可能なものはない。なお、隣接する2SH015からは中世陶器甕の胴部片(第37図1)が出土している。

2SB002 (第31・32図、第2表、図版23)

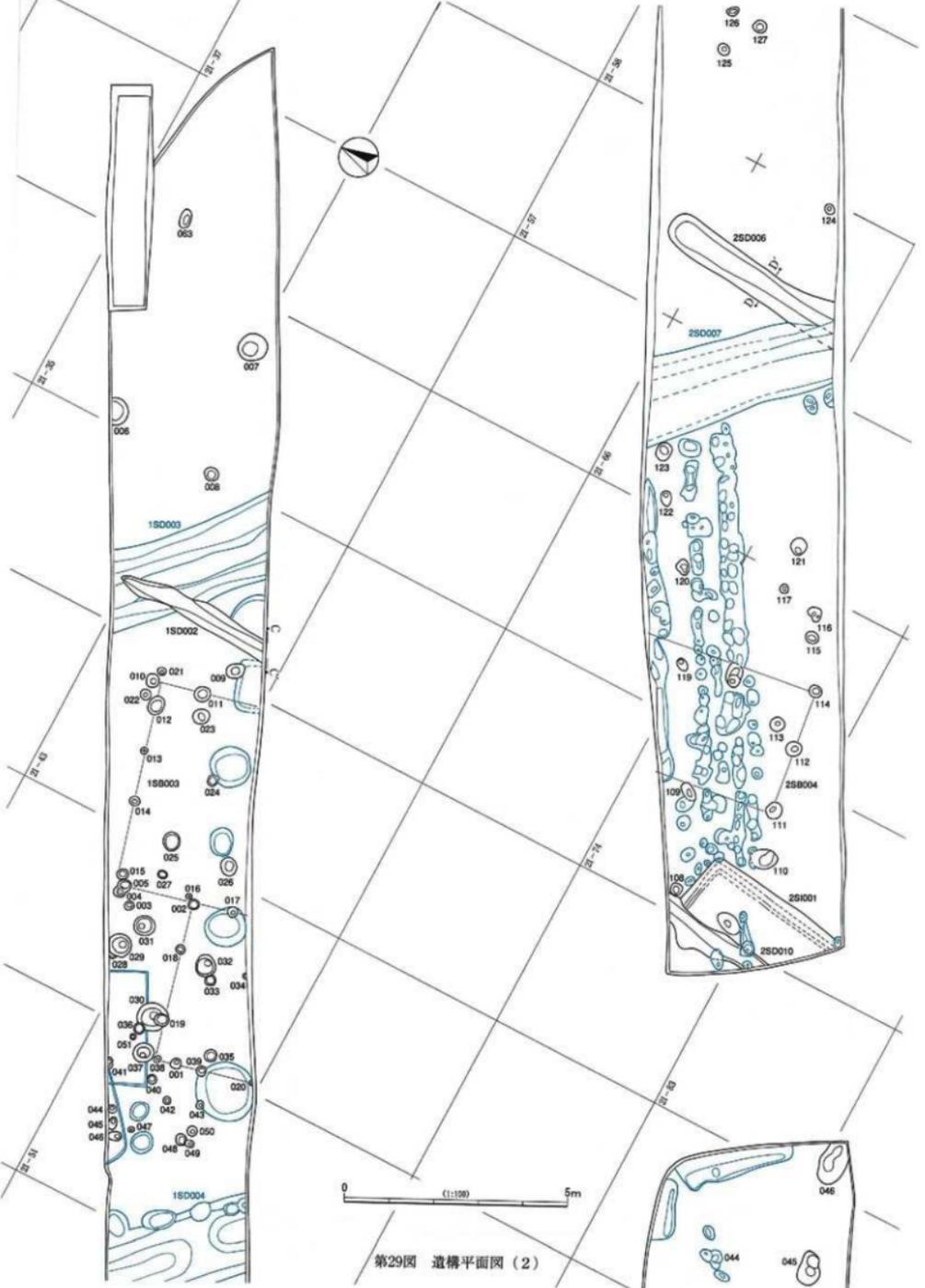
2次調査区南西部、3H-07~09グリッドで検出した柱穴列である。西から2SH086・090・092・029、柱間は約2.4mの8尺等間である。北側2SA001、2SA002と2条の欄列が検出されたことから、南側に展開する掘立柱建物跡の可能性を考え、2SH021・080を対となる柱穴とした。柱穴列は桁の可能性が高く、梁方位はN-3°-Eである。

遺物は2SH021・029で古墳時代後期から奈良・平安時代の土器片が出土したが図示可能なものはない。

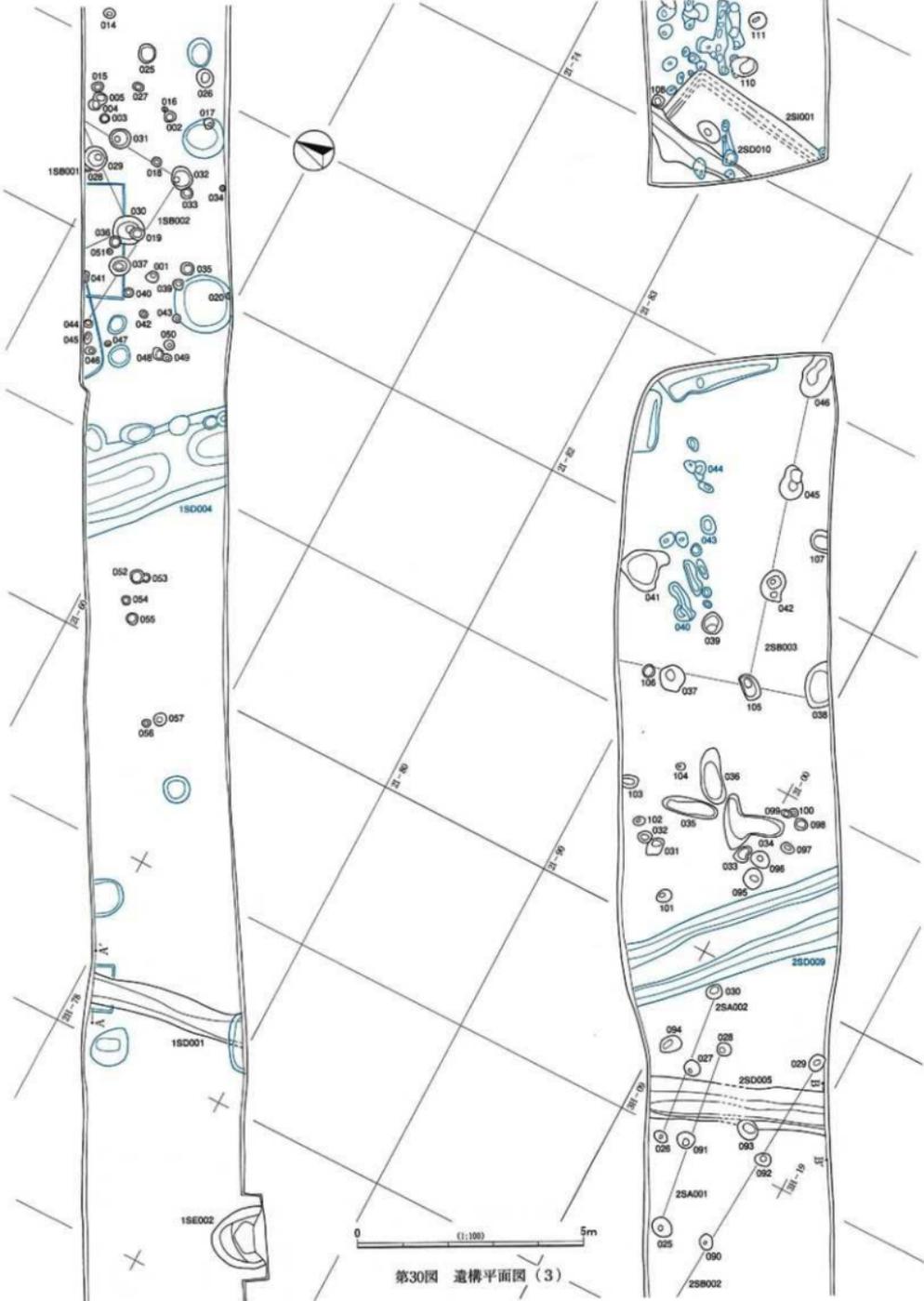




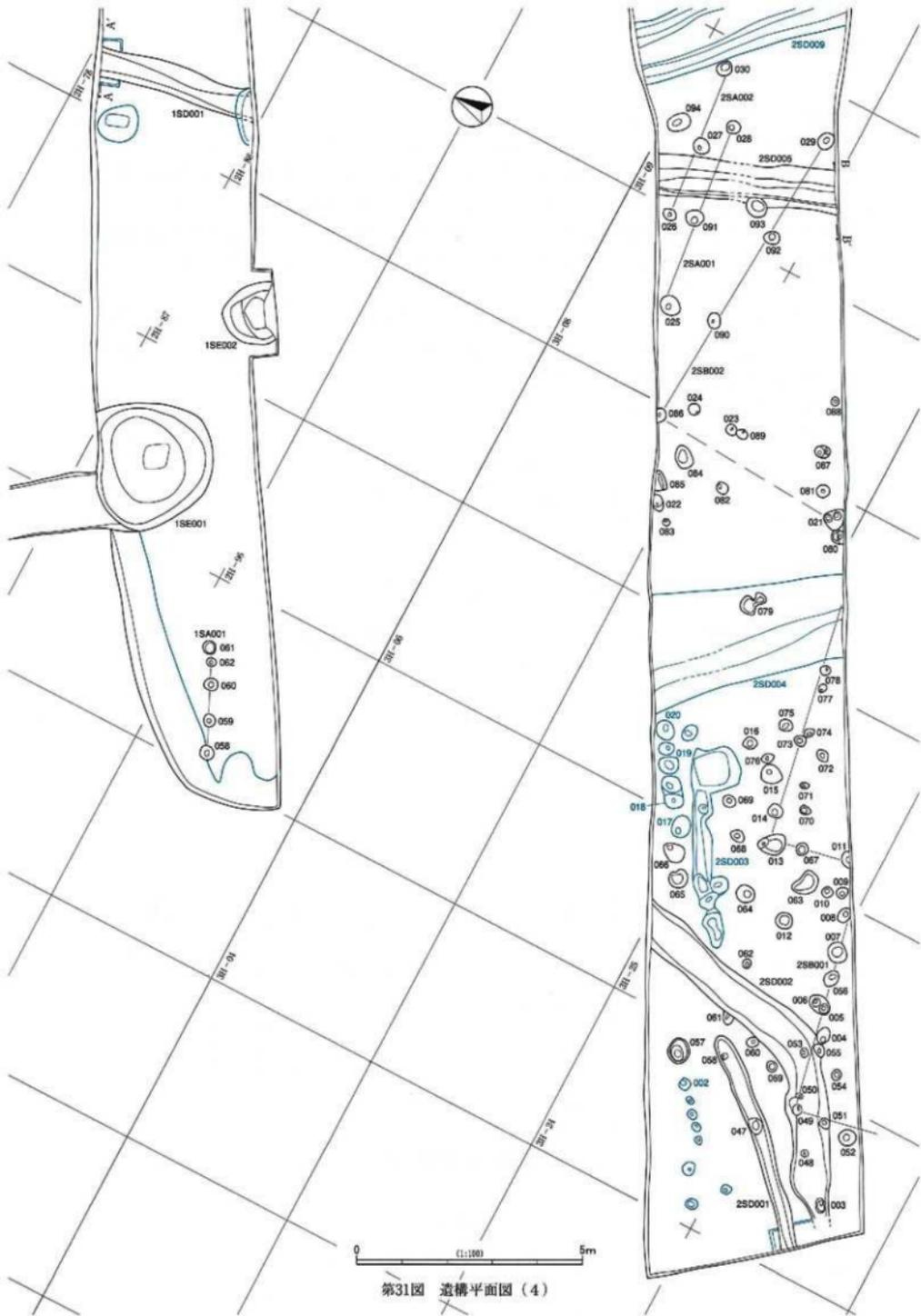
第28圖 遺構平面圖(1)



第29図 遺構平面図(2)



第30図 遺構平面図 (3)



横列跡・堀跡

1SA001 (第31図、第2表、図版21)

1次調査区南西端、2H-95グリッドで検出した柱穴列である。1SH058・059・060・061と南西から北東に径0.2mの円形小柱穴が一直線に並ぶため横列跡・堀跡と判断した。柱穴列の方位はN-65°-Eである。1SH060と1SH061の間に1SH062が入るが、本遺構との関連は不明である。

いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

2SA001 (第30図、第2表、図版23)

2次調査区南西部、3H-08-09グリッドで検出した柱穴列で、2SB002の北側に位置する。西から2SH025・091・028と3基の柱穴が2.1m間隔で並ぶため横列跡・堀跡と判断した。柱穴列の方位はN-81°-Eである。

遺物は2SH028から中世土師質土器片と鉄滓、2SH025から奈良・平安時代の土器片が出土しているが図示可能なものはない。

2SA002 (第30図、第2表、図版23)

2次調査区南西半、3H-08-09グリッドで検出した柱穴列で、前述の2SA001の北側に平行する。西から2SH026・027・030と3基の柱穴が1.8m間隔で並ぶため横列跡・堀跡と判断した。柱穴列の方位はN-82°-Eである。

遺物は2SH027から該期の鉄滓が出土したほか、奈良・平安時代と思われる土器片や焼けた粘土塊が出土したが、図示可能なものはない。

井戸

1SE001 (第33図、巻頭図版3、図版24・25)

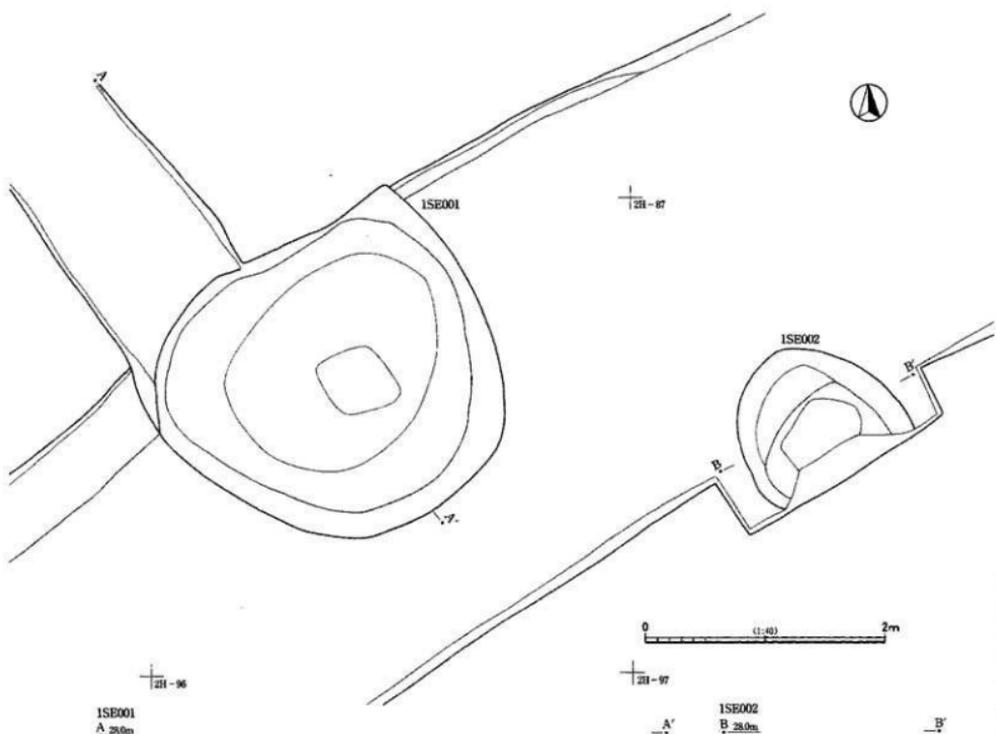
2H-86グリッドで検出した楕円形を呈する井戸である。自然堤防の北西肩部、1SA001の北東に位置する。井戸の北西肩は斜面に入り、崩落等の危険があるため、一部をトレンチ状に調査せざるを得なかった。長軸を等高線方向にとり2.86m、短軸2.67m、検出面からの深さ1.52mを測る。完掘後の底面は長軸1.96m、短軸1.53mの楕円形を呈するが、断面の11・12層は井戸壁面が崩落した可能性が高い土壌であり、井戸使用時の底面とは考え難いものである。底面の精査時に検出した酸化鉄の沈着部分を使用時の井戸底面とし、一辺0.5~0.6mの隅丸方形を呈していたものとするべきであろう。

遺物は土師質土器小皿・杯(第37図8・9)、常滑甕頸部片(第37図10)が出土しており、中世前半、13世紀前半を中心とする時期のものとして判断される。

1SE002 (第33図、図版25)

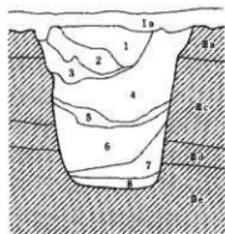
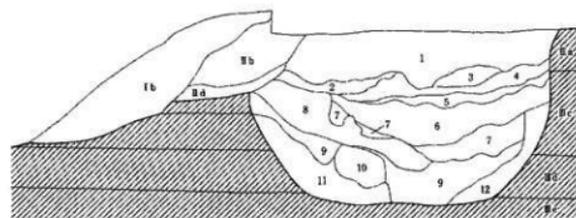
2H-87グリッドで検出した楕円形を呈する井戸である。自然堤防の北西部、1SE001の東約4mに位置している。遺構の南東半は現道下に続き、路盤工事による削平を受けている。道路付近の上端が緩やかに内湾しており、削平された方向を長軸とする楕円形を呈していたものと考えられる。長軸1.18m以上、短軸1.41m、検出面からの深さ1.27mを測る。長軸方向北西側に段を有しており、段の高さは底面から0.85m、検出面からの深さは0.42mを測る。完掘後の底面は北西隅がL字状、南東が丸みを帯びた舌状であるが、北西隅を使用時の底面の痕跡が強く残されているものとするならば、一辺0.6m前後の隅丸方形を呈していた可能性が高い。

遺物は陶器甕(第37図11)が出土しており、第37図1・16と同一個体の可能性もある。



ISE001
A 28.0m

ISE002
B 28.0m



ISE001

- 1 2SV3/1 黒褐色シルト混じり粘土。オリブ黄色砂ブロックを含む
- 2 SV3/1 オリーブ黒色粘土
- 3 10YR3/1 黒褐色細砂混じりシルト。オリブ黄色砂ブロック多い
- 4 10YR3/1 黒褐色細砂混じりシルト。オリブ黄色砂ブロック多量
- 5 10YR3/1 黒褐色粘土。酸化跡少量。オリブ黄色砂ブロック多い
- 6 7.5Y4/1 灰色砂。オリブ黄色砂ブロック多い
- 7 7.5Y4/1 褐色粘土上
- 8 2.5Y6/3 に近い黄色シルト
- 9 SV3/2 灰オリブ細砂。黒色粘質土を層状に含む
- 10 SV6/3 オリーブ黄色シルトブロック
- 11 SV6/2 灰オリブシルト。地山崩落土か?
- 12 2SV6/4 に近い黄色細砂混じりシルト。地山崩落土か?

表土

- 1a 10YR2/2 黒褐色細砂
- 1b 10YR3/1 黒褐色粘土混じりシルト
- 1c 10YR4/2 灰褐色粘土混じりシルト
- 1d SV3/1 灰色シルト(硬砂)

基礎層

- 層a SV6/2 灰オリブシルト
- 層c SV6/3 オリーブ黄色細砂
- 層d SV6/3 オリーブ黄色粘土混じりシルト
- 層e 10Y6/2 オリーブ灰色シルト混じり粘土

ISE002

- 1 2SV3/1 黒褐色シルト混じり粘土。酸化跡を含む
- 2 2SV3/1 黒褐色シルト混じり粘土。φ10mm程度ブロック含む
- 3 SV7/2 灰白細砂
- 4 2.5Y8/2 黒褐色シルト混じり粘土。φ20mm程度ブロックを含む
- 5 SV4/1 灰色細砂。10mm程度ブロックを含む
- 6 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト混じり粘土。互層を含む
- 7 SV6/4 オリーブ黄色砂
- 8 SV3/1 オリーブ黄色細砂混じりシルト

第33図 ISE001・002平面・断面図

溝

1SD001・2SD005 (第30・34図、図版26)

1SD001は1次調査区南西部、2H-76グリッドで検出した南北方向(N-18°-W)の溝である。検出面での幅0.66m、底面幅0.16m~0.40m、深さ0.46m、底面標高27.0mである。2SD005は2次調査区南西部、3H-09~19グリッドで検出した南北方向の溝である。検出面での幅0.95m、底面幅0.16~0.28m、深さ0.57m、底面標高約27.1mである。

遺物は1SD001から土師質土器杯口縁から体部片(第37図12)、2SD005から土師質土器杯底部片(第37図13)が出土している。胎土及び焼成が近似しており、同一個体の可能性も考えられるが接合しなかった。13世紀前半のものと考えられる。

1SD002・2SD010 (第29・34図、図版26)

1SD002は1次調査区北東部、2I-44グリッドで検出した南北方向(N-4°-E)の溝である。検出面での幅0.35m、底面幅0.18m~0.25m、深さ0.20mを測る。底面標高は北端で27.1m、南端で27.2mと南側が若干高い。2SD010は2次調査区中央部、2I-73~84グリッドで検出した、2SI001を切る南北方向の溝である。検出面での幅0.61m、底面幅0.22m~0.28m、底面標高約27.1mである。

いずれの溝からも遺物は出土していない。

2SD001 (第31図、図版26)

2次調査区南西端3H-25~34グリッドで検出した、北東から南西方向(N-45°-E)の直線的な溝である。

遺物は該期のものは出土していないが、古墳時代後期土師器甕(第39図61)などが出土した。

2SD002 (第31図、図版26)

2次調査区南西端3H-25~34グリッドで検出した、逆し字状に屈曲する溝である。溝の方向は北東半でN-11°-E、南西半でN-53°-Eである。

該期の遺物は出土していないが、古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器・須恵器(第39図62~68)などが出土しており、最も新しいと判断される62・63は平安時代後半の可能性が考えられる。

2SD006 (第29・34図、図版26)

2次調査区中央2I-57~67グリッドで検出した、南北方向(N-6°-E)の直線的な溝である。

該期の遺物は出土していないが、古墳時代後期の土師器杯・甕(第39図53・54)、須恵器短頸壺(第39図55)などが出土した。

1SD001 (第30図)

A 28.0m

A'



1SD001・2SD005

- 1 10YR3/1 赤褐色細砂
2 3YR/2 灰赤リニアシルト
3 10YR3/2 黒褐色シルト

2SD005 (第30図)

B 28.0m

B'



- 4 10YR4/2 灰青褐色シルト
5 7.5YR/1 赤褐色細砂
6 10YR3/3 暗褐色細砂

1SD002 (第29図)

C 28.0m

C'



1SD002

- 1 10YR3/1 赤褐色胎土
2 2.5Y3/4 赤褐色シルト凝り粘土
3 5Y3/2 オリーブ黒色胎土

2SD006 (第29図)

D 28.0m

D'



2SD006

- 1 2.5Y7/6 弱黄褐色砂状シルト
2 2.5Y6/4 濃い黄褐色シルト

0 (1:50) 2m

第34図 溝断面図

2 弥生時代

土坑

2SK001 (第35図、図版27)

2次調査区北端、2J-24・34グリッドで検出した土坑である。長軸2.36m、短軸1.45mの卵形の平面形態を呈し、深さ0.12mの浅い皿状の断面形態を呈する。

遺物は弥生時代後期末葉の高杯脚部(第38図19)、鉢口縁部(第38図20)や、高杯底部(第38図21)が出土しており、該期の所産と判断した。

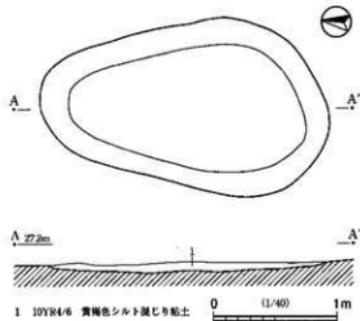
3 奈良・平安時代

堅穴住居跡

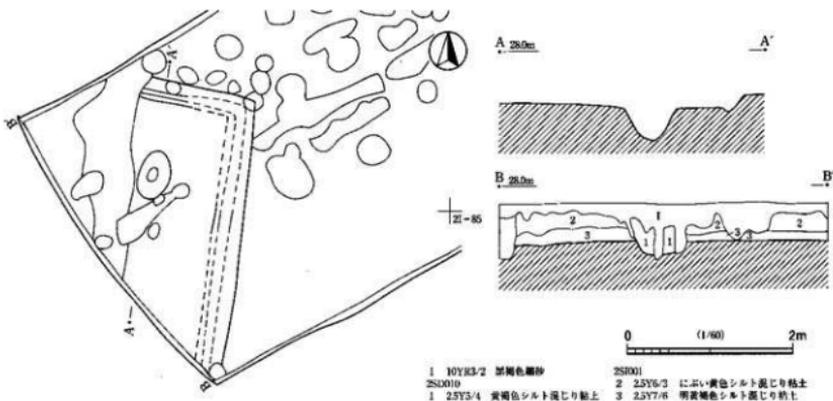
2SI001 (第36図、図版28)

第2次調査区中央、2I-73~84グリッドで検出した方形の堅穴住居跡である。事業地外及び住宅進入路のため北東隅及び北東主柱穴を検出したのみである。検出部の一边は最大3.4mである。進入路を挟んだ調査区で南西隅が検出されないことや主柱穴の位置から一边が3.8mから5.5mの間であろう。検出面からの深さは0.43mを測る。床面直上に焼土が多く認められたが、焼土は北側が多く、南側が少ない。耕作や2SD010溝状遺構による攪乱等により床面を明確にとらえることが出来なかったが、周囲には幅0.15m~0.20m、深さ0.05mの周溝が廻らされていたものと判断される。北東主柱穴は北東隅から1.5m、北辺及び東辺からそれぞれ1.1mの位置で検出した。主柱穴は長軸0.56m、短軸0.38m、南北方向に長い楕円形を呈し、床面からの深さは0.4mを測る。

遺物は土師器甕(第39図40~42)が出土しており、8世紀後葉から9世紀初頭のもつと判断した。床面下から弥生時代中期後葉の弥生土器(第38図22~25)が出土したが遺構の検出には至らなかった。



第35図 2SK001平面・断面図



第36図 2SI001平面・断面図

第3節 遺物

1 土器類

中世(第37図、第4表、巻頭図版4、図版29)

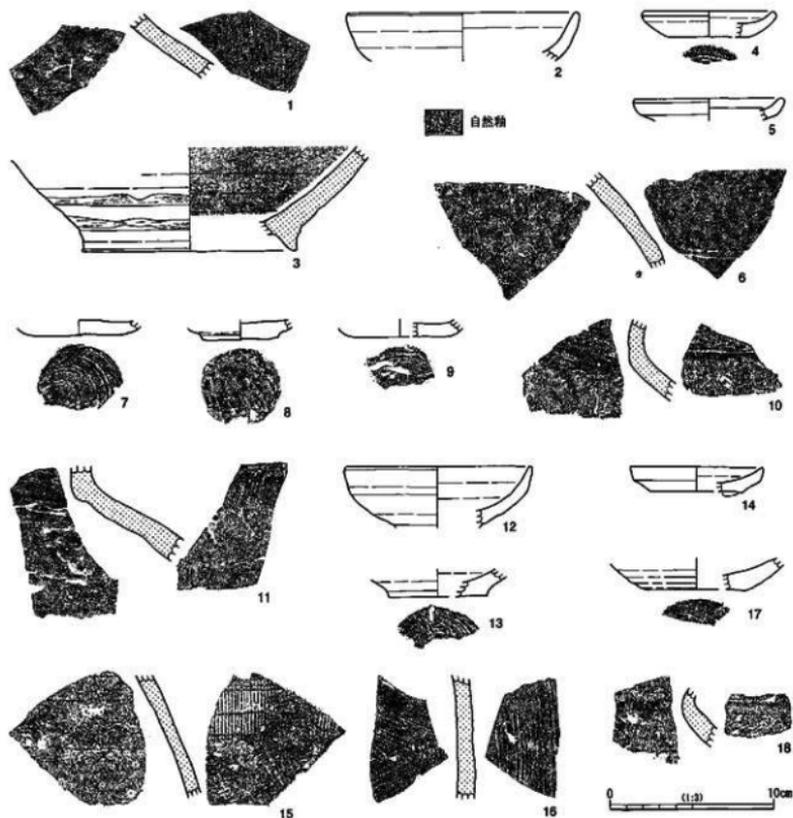
第37図1～7は2次調査の柱穴内から出土した中世土器類である。4～7が2SB003に関連するものと判断される以外は、掘立柱建物跡や欄柵跡・塀跡に関連すると判断されたものはない。1は2SH015から出土した須恵質の陶器甕の胴部片である。外面にハケ状の工具痕、内面に刷毛による施釉が認められる。2は2SH032土師質土器杯の口縁～体部片である。体部外面に強めのロクロナデが見られるが内湾して底部にいたるものと思われ、器高はそれほど高くはないものであろう。他の遺物と考え合わせれば13世紀前半を中心とする年代が考えられる。3は2SH041から出土した常滑片口鉢の体部下半から底部片である。ロクロ整形によるもので、断面三角の付高台は外側に僅かに張り、高台の周辺と体部下半に回転ヘラ削りが見られる。体部内面には自然釉と思われる灰釉が斑紋状に見られ、底部の無釉の部分とが明確に分かれることから重ね焼きの痕跡と考えられる。13世紀前半のものであろう。4は2SH042から出土した土師質土器小皿片である。厚めの底部から緩やかに内湾して口縁に至る。口縁は角頭状を呈し、底部には糸切り痕が見られる。5は2SH045から出土した土師質土器小皿の口縁から体部片である。体部下半が強く屈曲する点は4と異なる。6も2SH045から出土したもので、常滑甕胴部片である。外面には褐色の釉が見られる。7は2SH046から出土した土師質土器小皿底部片である。厚めの底部には糸切り痕が見られ、底部からそのまま体部が緩やかに立ち上がる。

第37図8～11は1次調査の井戸内から出土した中世土器類である。8～10は1SE001から出土した。8・9は土師質土器小皿底部片である。8は底部が柱状高台を呈し、スノコ痕が見られる。9はやや薄い底部からそのまま体部が立ち上がる。底面には糸切り痕、内面にはロクロ目が見られる。10は常滑甕の頸部片である。露胎は淡褐色を呈し、外面と頸部内面は釉により明灰褐色を呈する。また、外面にはハケ目が見られる。

11は1SE002から出土した須恵質の陶器甕頸部片である。露胎は須恵質で黄色味を帯びた淡灰色を呈し、外面と内面の一部に黄白色の釉が見られる。内面は輪積み痕が顕著である。

第37図12～15は溝内から出土した中世土器類である。12は1SD001から出土した土師質土器杯の口縁から体部片である。僅かに底部端の痕跡が認められ、柱状高台を呈していた可能性が高い。底部から体部中位までは横に強く引き出され、体部中位が屈曲して口縁に至るが、内面の屈曲は緩やかである。13・14は1SD001に連続すると判断された2SD005から出土した土師質土器である。13は杯の底部片である。柱状高台の底面には回転糸切り痕が見られる。12・13は胎土や色調が近似する。14は小皿で、体部中位に強い屈曲を持って口縁に至るが、内面は緩やかである。外面はヌケ痕や整形時の粘土塊が付着している。底部は回転糸切りであろう。15は常滑甕の胴部片である。

第37図16～17は1次調査で該期の遺構以外から出土した中世土器類である。16は1次2H区(1-1区)から出土した須恵質の陶器甕胴部片である。内外面にハケ状の工具痕、外面に刷毛による施釉が認められ、1や11と同一個体である可能性が考えられる。17は1次2I区(3トレンチ)から出土した土師質土器杯の底部から体部の破片である。回転糸切り痕の残る底部から緩やかに体部が立ち上がる。18は1次2I区(1SD003)から出土した常滑甕頸部片である。外面には緑色の釉が掛かり、内面は赤褐色を呈する。



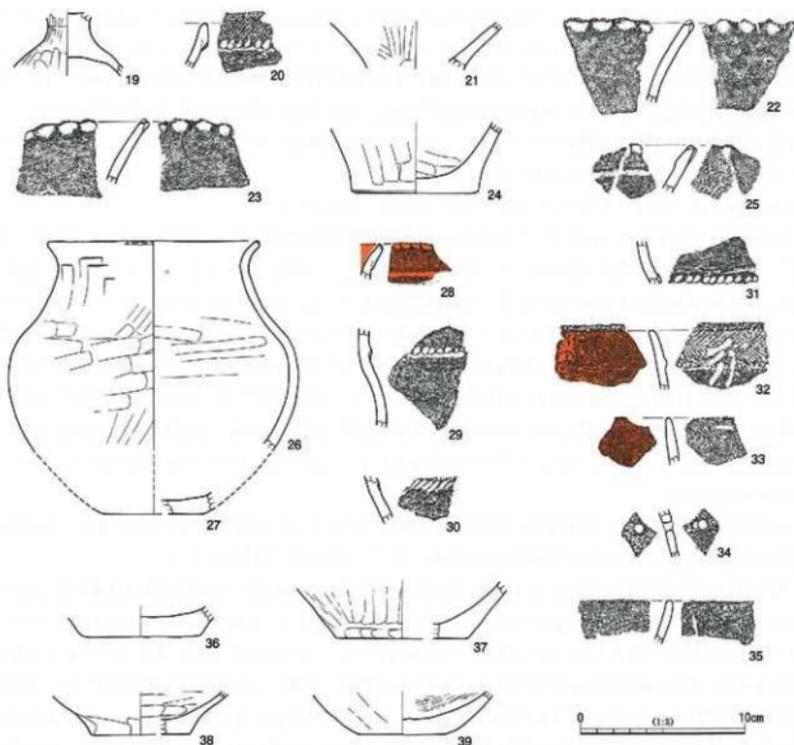
第37図 中世土器類

弥生時代 (第38図、第4表、図版30)

第38図19～39は2次調査で出土した弥生時代の遺物である。2SK001のみが該期の遺構と考えられるもので、大半は2SI001下層を含む2次調査区東半部、2Jグリッドから出土した。

第38図19～21は2SK001から出土した弥生土器である。19は半球状を呈する高杯脚部である。20は鉢の口縁部片で折返し口縁には斜縄文が施され、境目には縄文原体の押捺による刻目が施される。体部内外面には横方向のミガキが施される。21は高杯の底部片とした。脚部を欠損し、内面も剥落が著しい。

第38図22～25は2SI001下層から出土した。22・23は同一個体の可能性の高い甕口縁部片である。指頭押捺による波状口縁を呈し、内面にはハケ状の工具痕が認められる。24は甕の底部片である。底部としては全体が残されている。22～24は同一個体の可能性が高く、そのほかにも同一個体と思われる破片が多数出土しているが、復元は出来なかった。25は内側に有段口縁となる甕の口縁部片である。摩滅が著しいが口



第38図 弥生土器

縁端部は押捺による波状を呈するものと判断した。

第38図26～39は2次調査区グリッド内から出土した弥生土器である。39が3H区(2SD005)から出土した以外は全て2次調査区東半、2J区から出土した。26は口縁から体部下半まで遺存する甕である。27は甕の底部と考えられる破片である。接合はしなかったが26と同一個体と考えられ、図上で復元を試みた。28～31は甕の胴部片と思われるものである。28は有段口縁の甕の口縁部片である。口唇部は工具による刻目が施され、内外面の一部及び刻目に赤彩が残されていることから破片全体に赤彩が施されているものと判断した。29は頸部から胴部の破片であり、頸部が厚くなる。下端に刻み目が施され、他の部分は内外面ともにヘラナデが施される。刻み目は糸を巻き付けた棒状工具によるものと思われる。30も頸部から胴部の破片である。頸部下端に施された刻みは胴部に一部かかり、小口状工具によるものと判断される。31も同様の破片であるが、頸部がほとんど遺存しない。頸部下端の刻み目は、29と同様に糸を巻き付けた棒状工具の可能性が高い。32～35は鉢の口縁部片である。32は有段口縁部に2段の交互斜縄文が施され、羽状縄文帯となっており、縄文は口唇部にまでおよんでいる。口縁帯の下端には刻み目が施される。刻み目の痕跡

は体部にまでおよぶが摩滅等により施紋具については不明である。33も交互斜縄文が羽状縄文帯となるものであるが、口縁部分のみであるため、有段口縁であるかどうかは不明である。内面は赤彩される。34は口縁帯と体部の境目で、穿孔されている。口縁下部には刻み目が施されるが、施紋具は不明である。35は口唇部が角頭を呈するため、無紋であるが鉢の口縁部片としたものである。36～39は底部片である。36は壺、37は甕、38は鉢の可能性が考えられる。39は3H区(2SD005)から出土したもので、内面に細かなヘラナダが施されており鉢の底部片と判断した。

古墳時代後期から奈良・平安時代(第39・40図、第4表、図版30～32)

第39図40～42は2SI001から出土した土器類である。40は土師器甕の口縁から胴部片である。他に同一個体と思われる破片が多数出土しているが、復元できなかった。口縁部は横に引き出され、端部は丸く収められる。口縁部外面には端部の整形に伴い沈線風に段が見られる。胴部外面は縦方向のヘラ削りが施され、下端部では斜め方向のヘラ削りに移行する。胴部内面には横方向のヘラ削りが認められるが外面ほど顕著ではなく、ヘラナダに近い。41は土師器甕の口縁から胴部上半の破片である。口縁端部は上方に引き出されながら丸く収められる。胴部外面には縦からやや斜めのヘラ削りが施され、内面には横方向のヘラ削りが施される。胴部の張りがほとんどないことから甕の可能性も考えられる。42は土師器甕底部片である。外面には横方向のヘラ削り、底部にもヘラ削りが施される。奈良時代末葉から平安時代初頭を中心とした時期が考えられる。

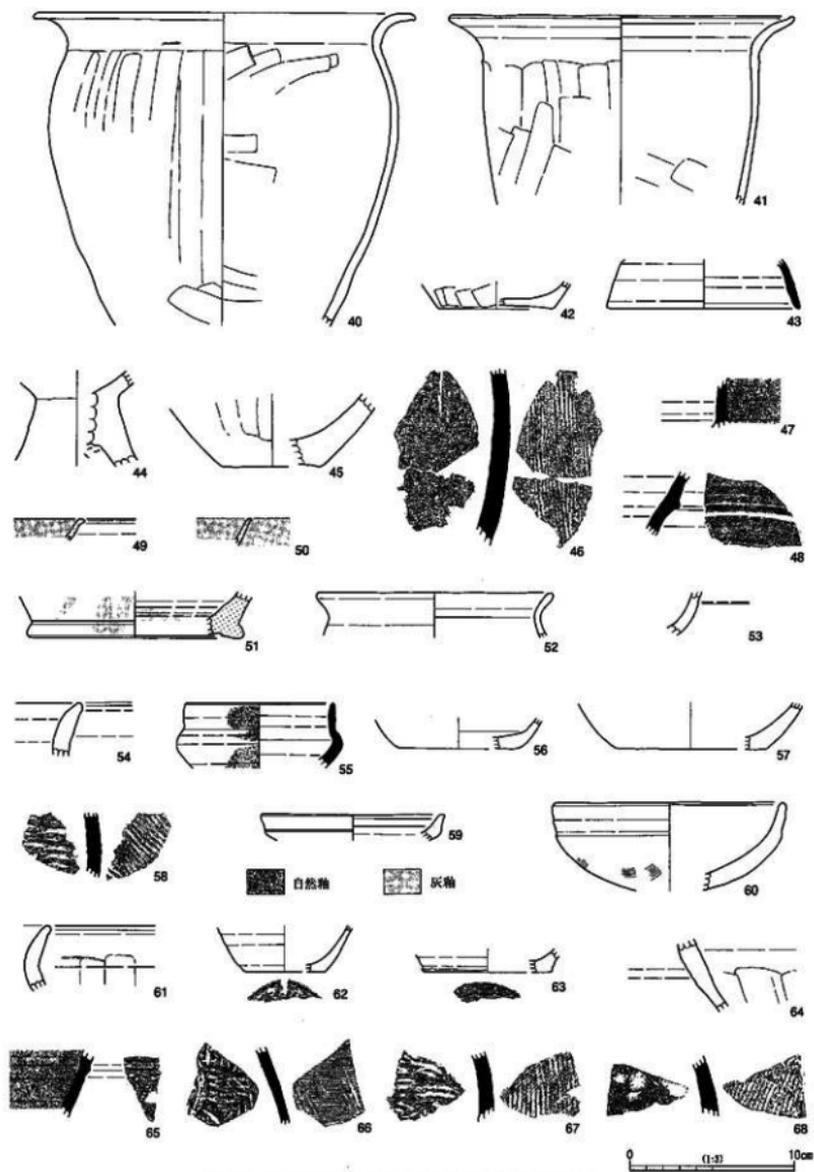
第39図43～55・57～68、第40図69～70は堅穴住居跡、井戸、柱穴、溝内から出土した土器類であるが、何れも該期の遺構ではないものと判断されたため、グリッドと同様の取扱いとした。

第39図43～55は2I区から出土した土器類である。43は2SI001から出土した須恵器蓋の口縁部片である。内面はロクロ目が顕著で広い端面を有し、三角形に近いものである。古墳時代後期後半のものであろう。44～50は1SE001から出土した。44は土師器高杯の脚部である。摩滅が著しいが、底部にヘラナダの痕跡が見られる。45は土師器甕の底部片である。外面にヘラ削り、内面にヘラナダの痕跡が見られる。46は須恵器甕の胴部片である。外面に平行叩き目が見られ、内面のアテ具痕は擦り消されている。44～46は古墳時代後期のものであろう。47は須恵器瓶頸部片で外面に自然釉、内面にはロクロ目が見られる。内面下端が強く内側に入り、体部に程近いものであろう。48は須恵器甕頸部片である。頸部中程には、断面三角形の凸帯が見られる。47・48は奈良時代後半から平安時代初頭のものであろうか。49・50は灰軸陶器碗の口縁である。49は口縁部が外に引き出され玉縁状を呈し、内面にのみ軸が認められる。9世紀中頃のものであろう。50は口縁部が緩やかに外反し、内外面に軸が認められる。50に遅れ9世紀後半以降のものであろう。51は1SH001から出土した灰軸陶器瓶の底部片である。内外面に灰軸が見られる。平安時代前半のものであろう。52は2SH038から出土した土師器小型甕の口縁から頸部片である。横方向のナダが顕著で端部外面はわずかに上方に引き上げられるように収められている。奈良時代末葉から平安時代前半のものであろう。53は土師器杯の体部片、54は土師器甕口縁部片である。55は須恵器短頸壺の口縁から胴部片である。

第39図56は2J区から出土した土師器杯の底部片である。内面見込み、体部と底部の境は沈線状で明瞭である。奈良時代末葉から平安時代初頭のものであろう。

第39図57～68、第40図69～72は3H区から出土した。

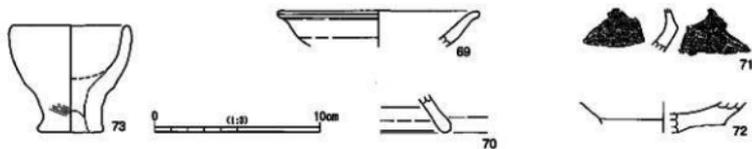
57・58は2SH011から出土した。57が土師器甕底部片、58が須恵器胴部片である。58は外面に平行叩きの



第39図 古墳時代後期から奈良・平安時代土器類(1)

上にハケによるカキ目が見られ、内面には同心円アテ具による青海波紋が見られる。57・58は古墳時代後期のものであろう。59は2SH024から出土した土師器杯口縁部で古墳時代後期後半のものであろう。60は2SH029から出土した土師器杯である。約4分の1が残されている。全体的に摩滅しているが、須恵器蓋模倣の杯で体部から底部外面にはハケ目が見られる。全体的に黒味を帯び、黒色処理の可能性も考えられる。古墳時代後期後半のものであろう。61は2SD001から出土した土師器甕の口縁から頸部片である。厚みのある頸部から玉縁状の口縁を呈する。62～68は2SD002から出土した土器類である。62は土師器杯の底部から体部下端の破片である。体部はロクロナデ、底部は糸切り未調整である。63も土師器杯の底部片で、62と同様に体部はロクロナデ、底部は糸切り未調整である。体部下端にヌタ痕が見られる。62・63は平安時代後半のものである。64は土師器甕の胴部片である。器壁が厚い。外面と内面下半に縦方向のヘラ削り、内面上半は横方向のナダが顕著であり、頸部に程近いものと判断した。65は須恵器甕頸部片である。上部に凸帯、その下に櫛状工具による連続刺突紋が見られる。66は須恵器甕胴部片である。外面には櫛状工具によるカキ目が施され、内面の青海波紋もナデ消されている。古墳時代後期のものであろう。67も同様の須恵器甕胴部片であるが、内外面ともに平行叩き目、青海波紋が良く残されている。古墳時代後半のものであろう。68も須恵器甕胴部片である。外面に平行叩き目が施され、内面のアテ具痕はヘラ削りにより消されている。69・70は2SD003から出土した土師器高脚碗であらう。69は外面のロクロ目が顕著で、口縁端部は外反し、丸く収められる。柄部の体部から口縁部の破片であらう。70は内外面にロクロ目が見られ、厚く仕上げられている。内面が雑であり脚部片とした。接合はしないが、同一個体の可能性も否定できない。69・70は平安時代後半のものであろう。71・72は2次調査3H区から出土した。71は土師器杯の体部片である。内面は黒色処理されている。72はやや大型であるが、土師器高杯の杯底部片である。71・72は古墳時代後期後半のものであろう。

第40図73は2次調査2J区から出土した手捏ねの高杯である。製作時の櫛状工具痕が本来の器壁の内部に認められ、脚部から杯部まで筒状に作った後に脚部の中央と底面に粘土塊で蓋をして整形している痕跡が認められるなど、製作工程を考える上で興味深い資料である。



第40図 古墳時代後期から奈良・平安時代土器類(2)

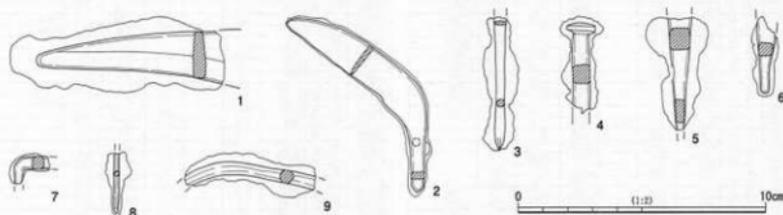
2 鉄製品(第41図、第5表、図版32)

第41図1～3は2次調査柱穴内から出土した鉄製品である。1は2SH013から出土した刀の茎と思われ、鉄製品である。刃側が薄く造られている。峰側に緩やかに反り、茎先端に向かって徐々に細くなり、先端は丸く収められる。船底形の茎で茎尻は栗尻とすべきか。目釘穴は見あたらないため大型品の茎の可能性も考えられる。2・3は2SH042から出土した。2は小型の鎌である。茎の先端が欠失するもののほぼ完形である。茎中央付近は錆蝕れよりに盛り上がり目釘の可能性が高いが目釘穴の形跡はX線フィルムからは読み取ることができなかった。3は釘である。断面が丸く、先端は面取りされて鋭利に作られている。

第41図4～6は1SE001から出土した鉄製品である。4は釘である。頭部が方形をしたいわゆる犬釘であ

る。頭部の折目は不明である。5は先端部で厚みを減じる楔状の鉄製品である。6は断面が台形を呈する棒状の鉄製品である。

第41図7～9は2次調査溝内から出土した鉄製品である。7・8は2SD003から出土した。7はL字状の鉄製品で断面は隅丸方形を呈する。鋸の可能性が高い。8は断面が丸く、先端も丸く収められた棒状の鉄製品である。9は2SD009から出土した棒状の鉄製品で断面は丸い。



第41図 鉄製品

3 鋳銅・鍛冶関連遺物（第6表、巻頭図版4）

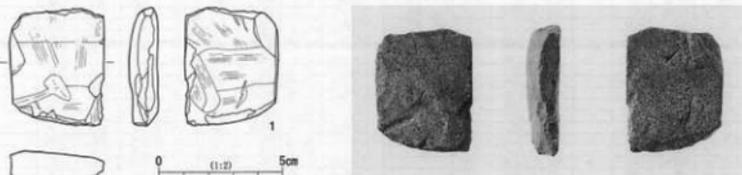
鋳銅関連遺物は、3I区（2SD009）から埴場1点が出土した。鍛冶関連遺物は、1SE001を主体に鍛冶滓やガラス質滓が22点、370.43g（うち鉄を多く含むと思われるもの2点、66.78g）、鍛冶炉の炉壁2点、13.64gが出土した。このうち、埴場、椀形鍛冶滓、炉壁を巻頭図版4に掲載した。

巻頭図版4-2-1は2次調査3I区（2SD009）から出土した埴場の破片である。長軸2.3cm、短軸1.8cm、厚さ0.4cm、重量8.23gである。胎土は砂で、周囲は全て破面で青味灰色を呈するが、一部は内側が赤味橙色を呈す部分がある。外面は紫味黒色を呈し、ガラス質で光沢を持ち、滑らかである。内面は黄味白色を呈し、凹凸が見られる。一部に緑青の可能性のある部分が認められる。

巻頭図版4-2-2は1次調査、1SE001から出土した椀形鍛冶滓である。鍛冶炉底面に形成された炉底滓を破砕したものであろう。3は2次調査2I区（2SI001）から出土した炉壁である。内面は紫味黒色を呈し、発泡しながらも平滑である。外面は灰味赤紫色を呈し、砂っぽく凹凸が著しい。

4 石製品（第43図）

第42図1は2SD003から出土した砥石である。両端が欠損し、長さ4.7cm、幅3.8cm、厚さ1.1cm、重量30.72gである。表面上端が使用により丸みを帯び、下半は横方向の使用が見られる。裏面は横方向の使用が顕著であり、左側の斜めの細い段も使用によるものであろう。石材は黒色粒の顕著な安山岩である。



第42図 石製品

第2表 柱穴一覧表

※計測時の水位はすべて由である。

番号	アグリ	字	平面形状	柱径	埋深	高さ	埋込深	埋込高	備考
150001	21-31	内野	0.25	-	0.14	27.51	27.37	150001	
150002	21-32	内野	0.24	-	0.14	27.55	27.41	150002	
150003	21-42	内野	0.18	-	0.15	27.56	27.43		
150004	21-52	内野	0.25	-	0.20	27.57	27.37	150003	
150005	21-42	内野	0.31	-	0.15	27.56	27.43		
150006	21-35	内野	0.62	-	0.09	27.47	27.10		
150007	21-32	内野	0.45	-	0.11	27.51	27.41	150004	
150008	21-44	内野	0.34	-	0.09	27.53	27.16		
150009	21-44	内野	0.38	0.30	0.07	27.40	27.33		
150010	21-43	内野	0.41	-	0.07	27.47	27.40	150005	
150011	21-43	内野	0.36	-	0.09	27.46	27.37	150006	
150012	21-43	内野	0.44	-	0.10	27.49	27.30	150007	
150013	21-43	内野	0.44	-	0.04	27.51	27.47	150008	
150014	21-43	内野	0.21	-	0.08	27.51	27.46	150009	
150015	21-42	内野	0.25	-	0.13	27.48	27.45	150010	
150016	21-32	内野	0.10	-	0.18	27.55	27.37	150011	
150017	21-32	内野	0.21	-	0.17	27.50	27.33	150012	
150018	21-32	内野	0.20	-	0.11	27.53	27.41	150013	
150019	21-32	内野	0.31	-	0.24	27.52	27.28	150014	
150020	21-32	内野	0.12	-	0.19	27.49	27.30	150015	
150021	21-43	内野	0.15	-	0.17	27.47	27.30	150016	
150022	21-43	内野	0.25	-	0.07	27.48	27.41	150017	
150023	21-43	内野	0.40	0.32	0.12	27.46	27.34		
150024	21-43	内野	0.25	-	0.07	27.47	27.40		
150025	21-43	内野	0.40	-	0.06	27.53	27.47		
150026	21-33	内野	0.41	-	0.11	27.55	27.44		
150027	21-42	内野	0.20	-	0.11	27.55	27.44		
150028	21-42	内野	0.21	-	0.05	27.57	27.52		
150029	21-42	内野	0.30	-	0.06	27.51	27.47	150018	
150030	21-42	内野	0.30	-	0.26	27.54	27.28	150019	
150031	21-42	内野	0.45	-	0.20	27.56	27.30	150020	
150032	21-32	内野	0.49	-	0.19	27.53	27.31	150021	
150033	21-32	内野	0.29	-	0.12	27.51	27.40	150022	
150034	21-32	内野	0.14	-	0.10	27.48	27.38	150023	
150035	21-32	内野	0.47	-	0.14	27.51	27.37	150024	
150036	21-32	内野	0.22	-	0.17	27.54	27.40	150025	
150037	21-31	内野	0.46	-	0.17	27.51	27.40	150026	
150038	21-31	内野	0.21	-	0.07	27.53	27.46	150027	
150039	21-31	内野	0.21	-	0.14	27.51	27.37	150028	
150040	21-31	内野	0.21	-	0.10	27.56	27.35	150029	
150041	21-31	内野	0.24	-	0.09	27.48	27.45	150030	
150042	21-31	内野	0.17	-	0.07	27.52	27.45	150031	
150043	21-31	内野	0.18	-	0.14	27.50	27.36	150032	
150044	21-31	内野	0.45	-	0.17	27.50	27.36	150033	
150045	21-31	内野	0.28	0.18	0.22	27.51	27.29	150034	
150046	21-31	内野	0.28	0.18	0.23	27.54	27.19	150035	
150047	21-31	内野	0.13	-	0.08	27.54	27.46	150036	
150048	21-31	内野	0.23	-	0.15	27.51	27.47	150037	
150049	21-31	内野	0.18	-	0.05	27.52	27.47	150038	
150050	21-31	内野	0.21	-	0.14	27.51	27.37	150039	
150051	21-31	内野	0.13	-	0.10	27.54	27.44	150040	
150052	21-60	内野	0.30	-	0.23	27.48	27.16	150041	
150053	21-60	内野	0.18	-	0.07	27.38	27.31	150042	
150054	21-60	内野	0.19	-	0.16	27.39	27.23	150043	
150055	21-60	内野	0.25	-	0.20	27.40	27.24	150044	
150056	21-60	内野	0.18	-	0.15	27.36	27.21	150045	
150057	21-60	内野	0.29	-	0.20	27.36	27.16	150046	
150058	21-95	内野	0.32	-	0.22	27.12	26.90	150047	
150059	21-95	内野	0.29	0.22	0.27	27.15	26.92	150048	
150060	21-95	内野	0.30	-	0.23	27.18	26.95	150049	
150061	21-95	内野	0.29	-	0.10	27.21	27.11	150050	
150062	21-95	内野	0.22	-	0.20	27.16	26.99	150051	
150063	21-35	内野	0.42	0.30	0.21	27.13	26.92	150052	
250000	21-24	内野	0.47	-	0.10	27.71	27.61		
250002	21-24	内野	0.28	-	0.10	27.71	27.61	250000	
250003	21-24	内野	0.36	0.23	0.25	27.68	27.49		
250004	21-25	内野	0.36	0.30	0.25	27.84	27.55	250001	
250005	21-35	内野	0.55	0.37	0.26	27.81	27.55	250002	
250006	21-35	内野	0.55	0.37	0.27	27.83	27.44	250003	
250007	21-35	内野	0.45	-	0.23	27.80	27.52	250004	
250008	21-25	内野	0.36	-	0.48	27.68	27.40	250005	
250009	21-26	内野	0.28	-	0.41	27.87	27.46	250006	
250010	21-25	内野	0.27	-	0.13	27.85	27.73	250007	
250011	21-26	内野	0.38	-	0.24	27.67	27.63	250008	
250012	21-25	内野	0.36	-	0.18	27.82	27.64	250009	
250013	21-26	内野	0.63	0.45	0.08	27.82	27.74	250010	
250014	21-26	内野	0.30	0.16	0.16	27.8	27.64	250011	
250015	21-26	内野	0.49	0.43	0.28	27.81	27.43	250012	
250016	21-26	内野	0.32	-	0.42	27.78	27.56	250013	
250017	21-15	内野	0.54	0.41	0.07	27.75	27.48	250014	
250018	21-16	内野	0.42	0.48	0.11	27.73	27.63	250015	
250019	21-16	内野	0.42	0.48	0.17	27.73	27.56	250016	
250020	21-16	内野	0.40	-	0.18	27.72	27.64	250017	
250021	21-17	内野	0.35	0.44	0.19	27.66	27.47	250018	
250022	21-17	内野	0.35	0.25	0.19	27.84	27.55	250019	
250023	21-18	内野	0.36	-	0.23	27.64	27.41	250020	
250024	21-08	内野	0.26	-	0.18	27.58	27.40	250021	
250025	21-08	内野	0.50	-	0.20	27.54	27.24	250022	
250026	21-08	内野	0.30	0.19	0.28	27.58	27.46	250023	
250027	21-09	内野	0.38	-	0.27	27.53	27.28	250024	
250028	21-09	内野	0.29	-	0.31	27.55	27.24	250025	
250029	21-09	内野	0.49	0.40	0.20	27.52	27.26	250026	
250030	21-09	内野	0.36	-	0.26	27.56	27.30	250027	
250031	21-09	内野	0.30	-	0.11	27.55	27.41	250028	
250032	21-09	内野	0.28	0.20	0.29	27.53	27.47	250029	
250033	21-09	内野	0.28	0.20	0.29	27.53	27.47	250030	
250034	21-09	内野	1.34	1.27	0.34	27.50	27.32	250031	
250035	21-09	内野	1.22	0.38	0.14	27.55	27.41	250032	
250036	21-90	内野	1.25	0.50	0.38	27.54	27.36	250033	
250037	21-90	内野	0.62	0.62	0.21	27.57	27.36	250034	
250038	21-90	内野	0.80	0.43	0.20	27.56	27.35	250035	
250039	21-90	内野	0.50	0.43	0.21	27.56	27.35	250036	
250040	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250037	
250041	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250038	
250042	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250039	
250043	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250040	
250044	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250041	
250045	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250042	
250046	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250043	
250047	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250044	
250048	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250045	
250049	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250046	
250050	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250047	
250051	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250048	
250052	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250049	
250053	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250050	
250054	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250051	
250055	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250052	
250056	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250053	
250057	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250054	
250058	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250055	
250059	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250056	
250060	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250057	
250061	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250058	
250062	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250059	
250063	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250060	
250064	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250061	
250065	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250062	
250066	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250063	
250067	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250064	
250068	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250065	
250069	21-90	内野	0.55	0.43	0.21	27.56	27.35	250066	
250070	21-90	内							

第3表 出土土器・土製品組成表

※重量の単位はgである。

遺跡番号	陶器土器		土器土器		土器土器		土器土器		土器土器		土器土器		土器土器		土器土器		土器土器		土器土器		備考	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
ISD001	10	87.89	133	819.30	3	83.39	158	411.92	9	97.21	3	4.67	20	100.91	3	101.15			239	1,717.64	3	12.64
ISD002			5	21.39			11	33.13	1	3.36			3	9.56	3	84.61			23	150.68	1	4.99
ISD003			7	19.69			14	23.56					2	15.83					23	61.06		
ISD004			4	32.04			6	18.32							1	25.12			10	90.36		
ISD005																	1	6.40	2	31.02		
ISD006																	1	14.74	1	14.74		
ISD007																			1	45.21		
ISD008																					1	5.26
ISD009			1	3.48			2	6.02													2	9.50
ISD010			2	6.08																		
ISD011																						
ISD012																						
ISD013																						
ISD014																						
ISD015																						
ISD016																						
ISD017																						
ISD018																						
ISD019																						
ISD020																						
ISD021																						
ISD022																						
ISD023																						
ISD024																						
ISD025																						
ISD026																						
ISD027																						
ISD028																						
ISD029																						
ISD030																						
ISD031																						
ISD032																						
ISD033																						
ISD034																						
ISD035																						
ISD036																						
ISD037																						
ISD038																						
ISD039																						
ISD040																						
ISD041																						
ISD042																						
ISD043																						
ISD044																						
ISD045																						
ISD046																						
ISD047																						
ISD048																						
ISD049																						
ISD050																						
ISD051																						
ISD052																						
ISD053																						
ISD054																						
ISD055																						
ISD056																						
ISD057																						
ISD058																						
ISD059																						
ISD060																						
ISD061																						
ISD062																						
ISD063																						
ISD064																						
ISD065																						
ISD066																						
ISD067																						
ISD068																						
ISD069																						
ISD070																						
ISD071																						
ISD072																						
ISD073																						
ISD074																						
ISD075																						
ISD076																						
ISD077																						
ISD078																						
ISD079																						
ISD080																						
ISD081																						
ISD082																						
ISD083																						
ISD084																						
ISD085																						
ISD086																						
ISD087																						
ISD088																						
ISD089																						
ISD090																						
ISD091																						
ISD092																						
ISD093																						
ISD094																						
ISD095																						
ISD096																						
ISD097																						
ISD098																						
ISD099																						
ISD100																						
ISD101																						
ISD102																						
ISD103																						
ISD104																						
ISD105																						
ISD106																						
ISD107																						
ISD108																						
ISD109																						
ISD110																						
ISD111																						
ISD112																						
ISD113																						
ISD114				</																		

第5表 鉄製品観察表

番号	挿洞	遺構番号 (出土位置)	遺物 番号	種別	部位	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
						(mm)	(mm)	(mm)	(g)	
1	第41図1	2SB001(2SH013)	1	刀	茎	75.90	21.60	6.40	45.84	
2	第41図2	2SB003(2SH042)	2	鎌	完 形	69.90	57.30	4.00	12.33	
3	第41図3	2SB003(2SH042)	2	釘	先端部	54.10	5.00	2.70	8.04	
4	第41図4	1SE001	2	釘	頭 部	37.50	11.80	11.80	8.56	身部は7.90mm×6.90mm
5	第41図5	1SE001	3	楔状鉄製品	中央部	46.00	10.50	10.50	20.68	
6	第41図6	1SE001	3	棒状鉄製品	先端部	31.50	7.20	7.20	3.12	
7	第41図7	3H区(2SD003)	1	匙?	し字部	15.60	5.30	4.80	1.90	先端部は5.50×5.40
8	第41図8	3H区(2SD003)	1	棒状鉄製品	先端部	24.70	2.20	—	1.74	断面円形のため厚さなし
9	第41図9	3I区(2SD009)	2	棒状鉄製品	中央部	52.70	6.40	—	9.93	断面円形のため厚さなし
10	—	2SD005	1	板状鉄製品	不 明	29.32	21.38	2.71	3.61	鍛冶滓付着
11	—	1SE001	17	板状鉄製品?	不 明	43.11	31.97	4.58	12.23	気泡多く軽い

第6表 鋳銅・鍛冶関連遺物観察表

番号	図版番号	遺構番号 (出土位置)	遺物 番号	種別	長軸	短軸	厚さ	重量	備 考
					(mm)	(mm)	(mm)	(g)	
1	巻頭図版4-2-1	3I区(2SD009)	1	増埴	23.00	23.29	7.22	8.23	
2	巻頭図版4-2-2	1SE001	10	椀形鍛冶滓	65.05	63.40	44.22	156.08	
3	巻頭図版4-2-3	2I区(2SI001)	4	如壁	27.37	27.08	13.28	6.77	
4	—	3H区(2SH018)	1	鍛冶滓	23.45	18.30	16.19	4.21	
5	—	2SA001(2SH028)	1	鍛冶滓	28.28	15.52	11.71	8.47	
6	—	2SA002(2SH027)	1	ガラス質滓	31.48	24.63	16.54	8.50	
7	—	1SE001	11	鍛冶滓	40.55	26.52	23.79	57.38	鉄を多く含む
8	—	1SE001	1	鍛冶滓	23.33	15.07	10.63	4.32	
9	—	1SE001	2	鍛冶滓	17.43	13.41	8.69	2.22	
10	—	1SE001	2	鍛冶滓	17.78	12.43	8.37	1.61	
11	—	1SE001	2	鍛冶滓	29.64	11.25	9.14	2.88	
12	—	1SE001	2	鍛冶滓	25.92	20.98	20.75	8.78	
13	—	1SE001	3	鍛冶滓	23.87	14.70	12.46	4.45	
14	—	1SD001	1	鍛冶滓	24.04	16.38	10.89	4.15	
15	—	1SE001	3	鍛冶滓	21.73	17.04	13.31	3.47	
16	—	1SE001	3	鍛冶滓	18.53	17.17	9.09	2.85	
17	—	1SE001	2	ガラス質滓	16.27	15.59	11.32	1.40	
18	—	2SD005	1	鍛冶滓	42.96	36.00	23.08	33.21	
19	—	2SD005	1	鍛冶滓	15.99	11.13	10.51	2.46	
20	—	2SD006	1	鍛冶滓	41.51	33.88	14.37	14.11	
21	—	2SD002	1	鍛冶滓	47.90	37.97	26.85	26.81	
22	—	3H区(2SD003)	1	鍛冶滓	25.30	21.11	13.61	8.49	
23	—	3I区(2SD009)	1	鍛冶滓	33.71	16.77	15.10	5.18	
24	—	2I区(2SI001)	4	鍛冶滓	20.82	18.44	16.30	9.40	鉄を多く含む
25	—	2I区(2SI001)	4	如壁	29.97	24.99	11.66	6.69	

第4章 まとめ

第1節 後領遺跡

1 中世

検出された遺構は丘陵の肩口下を廻る堀が明瞭ながら、丘陵上も厚い盛土による曲輪面が確認されている。遺構としてはこの二つにはほぼ収斂されるので、以下簡単にその位置付け等についてふれる。

まず堀であるが丘陵縁の肩口から斜面にかけて逆台形に掘り込んだものであり、内側地山から約6m(現存曲輪面からは7~8m)、外側からは3m近くの比高差を有するものであった。更に堀の間には地山を掘り残した明瞭な土橋状の障壁も1か所存在する。そして、この堀は調査区域外の東西に及んでいることが現状の地形からはほぼ確実であり、とりわけ東側ではその痕跡かと思われる平場が斜面上段を廻っている。

一方、丘陵上の曲輪であるが、一定の厚さに土盛りしていく手法が明瞭であり、斜めの堆積も意図的な所産であろう(モッコによる運搬とその敷き均しか)。問題は幅25mに満たず且つその間に向きと並行する堀を入れているような地に、何故最大で2m近い盛土造成をしたかである。

恐らくその理由は堀底との比高差をより大きくするためと、先端近くに櫓台を置いた結果かと推測する。というのは、西側が小河川によって自然の堀を形成しているとはいえ、南側は東側と異なり急崖でもなく山麓に何らかの障壁を設けない限り堀一重のみで、そこにこそこれら普請の要因があらうかと考える。

当遺跡は分布地図にも城跡として把握されておらず、今回の調査によって新しく確認されたものである¹⁾。それ故、包含地は別としてやはり城跡として固有の名称が必要となる。城跡の名称は大字ないし小字に拠るのが通例であり、大字内で既知の城があれば別だが刑部内では現時点で他に城跡は確認されていないので、刑部城と呼ぶことを提唱する。

その年代については、伴う出土遺物が視1点のみであることから検出された遺構で判断せざるを得ない。一宮川流域では比較的大規模な城郭(大凡東西400m、南北250m程)であり、とりわけ北側は明瞭な切岸整形を施す一方(間に2条の堀切)、今回調査対象となった南端部では肩口から切り落とした深い堀を構え、また、そこでは丘陵先端の狭い地であるにもかかわらず地山整形後に盛土している点など、戦国末期の16世紀も中頃から後半の所産と考えられる。

そうすると、当長柄町城それも一宮川本流域は16世紀後半の弘治・永祿期以降は確実に長南武田氏の勢力下にあるとみられることから、当城主も長南武田氏に従属した人物ないしは武田氏から派遣された家臣の一人であった可能性がある²⁾。あるいは、当地のような国人クラスの領主が不在の地では、刑部、金谷、田代・大津倉に及ぶ一宮川上流域の土豪層による番城で、そのなかの一人を物主として維持させたということも考えられよう。



第43図 刑部城跡東端堀切写真

何れにしても、市原の市西方面から茂原へ抜けるルート上の要地、それも自然の川を橋として市原方面に対しての点に当城の性格の一端が窺えるが、それは刑部から一宮川を約4.5km遡った中流域にある小榎木の要害城³⁾と年代・構造共に対応する。要害城が一宮川流域における北東の要とするならば、この刑部城は北西の要といえるかもしれない。

2 縄文時代

出土した縄文土器はほぼ中期後半～後期末に属するものであった。内訳は、中期加曾利EⅢ・Ⅳ式、後期堀之内式、加曾利BⅠ式～曾谷式、阿安行Ⅰ・Ⅱ式ながら、量的に多いのは堀之内式以降である。しかし、詳細にみると堀之内Ⅱ式～加曾利B式の古い部分がほぼ欠けており、必ずしも連続性はない。周辺では北から西方向の台地上に立地する亀ヶ谷遺跡⁴⁾、川在遺跡⁵⁾、一宮川中流域の石神貝塚⁶⁾、岩川・今泉遺跡⁷⁾等で該当する土器の報告がなされている。しかし、岩川・今泉遺跡を除けば表探遺物や小規模な調査で、且つ報告年次も古く、その全容が明らかになった訳ではない。

その意味では岩川・今泉遺跡と並んで当地における最もまとまった資料といえるが、それはあくまでも型的な観点であって、土器の有する様々な属性を引き出すには至っていない。今回は土器片の総点数や底部の遺存度からみた量的側面を加味したが、限られた条件でのささやかな努力と受け取っていただきたい。

土器以外では、石棒や土器片錘が目立つ程度ながら、貝がまったくみられない点も指摘しておきたい。

丘陵部の狭い調査範囲にも関わらず、数型式に亘る多量の縄文土器が出土したことは、当地におけるいわゆる拠点集落の一つといえるのではないだろうか。加えて、それが中期後半～後期末という一定の年代幅を有する点も、東総の縄文時代にある程度共通する現象である。それは結局、集落が固定し、各ムラの狩猟・採集を始めとした生活圏が確立されつつあったことを暗示しているのかもしれない。

一般的に当地（長生地域）では縄文時代に限らないが、遺跡のあり方は多様且つある意味で特殊である。それは谷底低地を除いて平坦面に乏しいという条件が大きいが、逆に丘陵上ないしは先端の平地・緩斜面に遺跡が集中し、とりわけその傾向は縄文時代に顕著である。後領遺跡は刑部地区内でまさにこの条件に合致し、狭いながらもその平場を活用して集落が営まれたものと思われる。

その結果といってもよいだろうが、生活残滓は丘陵縁辺の傾斜面に堆積し、そこから大量の土器や貝が出土することとなる。石神貝塚⁶⁾や岩川・今泉遺跡⁷⁾の事例がそのことを雄弁に物語っている。その一方、貝の出土がみられなかったことは、その地理的環境（後期の海岸線を茂原東部の九十九里平野内としても直線で約10kmほどの距離となる）からして、海浜部が生業圏外にあったことを物語っているのかもしれない。

このように、今回の調査成果は当地の縄文時代を考えるうえで貴重な調査例であることは確かながら、提示した課題を具体的に証明するためには残りの遺跡部分—それは集落本体に該当する—の情報が欠かれない。そのことを強調してまとめたい。

第2節 市神遺跡

市神遺跡の中世の遺構は自然堤防の北西側を中心に検出された掘立柱建物跡、塀・欄列跡、井戸、溝である。掘立柱建物跡や塀・欄列跡は軸方位が西に10°～20°振れるものが多く、その他にはほぼ真北とするものや東に大きく振れるものなども見られた。井戸は自然堤防の北西端で2基検出され、該期の土師質土器や陶器が出土した。溝はその位置や方向から二つに分類される。一つは、自然堤防の縁辺に廻らされたものと判断される2SD001と2SD002である。もう一つは自然堤防上を区画した1SD001・2SD005と1SD002・

2SD010、2SD006である。後者は直線的で、特に1SD002・2SD010と2SD006はN-4°-Eと平行しており、条里地割などとの関連も考えられる。掘立柱建物跡の軸方位と異なる点は、時期的な差や機能的な差が考えられるが今後の課題としたい。これらの遺構に伴う、あるいは周辺から出土した遺物は土師質土器小皿・杯、陶器鉢・甕などであるが、土師質土器小皿については底部が厚く器高が低い特徴が見られ、杯は底径が小さく、低い器高で体部下半が大きく内湾し口縁へと続くものである。これらの土師質土器の特徴は13世紀前半を中心とするものと判断され、陶器鉢の時期も同様の年代が比定されることから、遺構の年代も13世紀前半と考えられる。

その他の時代としたものは平安時代以前の遺構・遺物が該当し、遺物としては弥生時代中期後葉、弥生時代後期後葉、古墳時代後期後葉、奈良時代末葉から平安時代前葉、平安時代後半の5時期のものが出土しており、その内、弥生時代後期後葉には2SK001土坑、奈良時代末葉から平安時代前葉には2S1001竪穴住居跡と遺構を伴っている。遺構の認められない弥生時代中期後葉については、土器が比較的多くまとまっており、該期の生活痕跡が存在した可能性が指摘できる。古墳時代後期後葉については、土器のまとまりは希薄であり、現時点で生活痕跡の存否を推定することはやや難しい。平安時代後半についても同様であるが、前述の中世前葉に連続する可能性も否定できない。

いずれにせよ、比較的多くまとまっているとはいえ中世前葉も決して長期に及ぶ層敷地（集落）が存在したと言えるほどの資料ではないと思われる。逆に言えば、当地は弥生時代中期後葉から断続的に居住域として使用されるような土地条件であったと判断することもできる。そこで、市神遺跡の立地する一宮川流域の低地遺跡について概観してみたい。

一宮川流域の既調査成果では、弥生時代以降の生活痕跡は弥生時代中期後半の宮ノ台期以後に出現する。今回の市神遺跡や長南町今泉遺跡¹¹⁾、茂原市国府岡遺跡¹²⁾で該期の遺物が出土しており、国府岡遺跡では竪穴住居跡や方形周溝墓も検出されている。後期前半は希薄であるが、後期後半には国府岡遺跡で竪穴住居跡が検出され、下手Ⅱ遺跡¹³⁾、長南町今泉遺跡や茂原市宮島遺跡¹⁴⁾・小林西ノ前遺跡¹⁵⁾などで遺物が出土している。古墳時代前期には打手遺跡¹⁶⁾、長南町岩川遺跡¹⁷⁾、茂原市第六天向遺跡¹⁸⁾・和合遺跡¹⁹⁾・野際遺跡²⁰⁾・川代遺跡²¹⁾・中原遺跡²²⁾などが追加され、弥生時代中期後半から古墳時代前期には増加・拡大傾向にあると言って良いものと判断される。古墳時代中期の遺物が僅かに国府岡遺跡で出土しているが、現状ではほとんど見あたらない。古墳時代後期には市神遺跡・打手遺跡や今泉遺跡などの弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した遺跡で若干の遺物が出土しているが、鍋谷久保向遺跡²³⁾・谷口遺跡²⁴⁾・吹良遺跡²⁵⁾・小林西ノ前遺跡・中原遺跡などの新たに出現した遺跡で竪穴住居跡が検出され、前代との断絶がみられる。奈良時代から平安時代前半は小林西ノ前遺跡や中原遺跡では継続するものの、市神遺跡や徳増下谷遺跡²⁶⁾・国府岡遺跡・野際遺跡・川代遺跡では8世紀末葉から9世紀代に再び遺物や遺構が見られるようになり、新たに出現するものが認められ、一部は平安時代中期まで連続するようである。平安時代後期は不明な部分が多い点は県内全般に言えることである。中世には13世紀代から始まる岩川遺跡や市神遺跡、14世紀以降の宮島遺跡、15世紀以降の和合遺跡・小林西ノ前遺跡・新小幡遺跡²⁷⁾・中原遺跡などがある²⁸⁾。

立地環境²⁹⁾により時期別に変遷を辿ると、弥生時代中期後半に出現する遺跡は上・中流を中心として平野に面した丘陵平坦面や谷底低地内の自然堤防上に出現する。その後、弥生時代後期後半から古墳時代前期までに丘陵裾部の洪積段丘や小支谷の谷頭、下流域の砂堤帯にも展開し、開発の手が広範に及んでいるようである。古墳時代中期の遺跡がほとんど見受けられない点は、調査の及んでいない地点、例えば近世

から継続する集落域に重なるためであろうか。古墳時代後期には丘陵裾部などを中心に再び展開する。奈良時代には前代から続く遺跡が僅かに認められるが、特に下流域の砂堤帯に新たな遺跡が認められ、平安時代初頭まで続く点は7世紀代に大きな転換期をむかえたと捉えるべきであろう。平安時代前半の遺跡も多く認められ、広範に展開する点は荘園開発などと結び付いた結果であろうか。10世紀以降とりわけ11世紀・12世紀は不明な点が多いが、中世以降も1世紀前後の期間を以て集落(屋敷地)は変遷している。

以上のように見てくると、現時点で捉えられる断絶期の後には、上・中流域から集落等が確認され、その後、下流域の砂堤帯上に進出するという状況が認められる。古代刑部郷や車持郷という、古墳時代後期の部民制に基づく郷名が一宮川上流域に見られる点は、上・中流域が何よりも開発適地であったという顕れであり、今回の調査成果もその一端を物語っているであろう。

注

- 1 遺跡北東山麓に堀之内の屋号を有する民家(大野家)が存在することから、城館の可能性を示唆した文献もある。
小高春雄 2003 「長柄の中世を考える」『長柄の歴史』第4集 長柄歴史同好会
- 2 城の南麓には大野姓(鋳物師大野氏の系統か)の民家が集中し、または武田姓の家(墓地に大形石塔あり)もかつて存在した。
- 3 要害域については注1の文献の他に、「長柄町史」でもふれている。
- 4 佐藤達夫 戸田哲也 1977 「長柄町亀ヶ谷遺跡発掘報告-長柄町内の主要先史時代遺跡-」『長柄町史』
- 5 米田耕之助 藤野光行 1977 「市原市川に遺跡採集の遺物」『史館』第9号
- 6 石神貝塚については古くから注目され、簡単な報告や小規模な発掘調査も行われている。しかし、今回の調査結果と対比される資料紹介として次の文献があげられる。
菅谷通保 1990 「茂原市石神貝塚の加曾利B式土器(1)」『長生郡市文化財センター年報No.4-昭和63年度-』
菅谷通保 1991 「茂原市石神貝塚の加曾利B式土器(2)」『長生郡市文化財センター年報No.5-平成元年度-』
菅谷通保 1992 「茂原市石神貝塚並びに周辺の堀之内2式土器について」『長生郡市文化財センター年報No.6-平成2年度-』
- 7 三浦和信ほか 1990 「岩川・今泉遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 8 かつて行われた耕地整理の際に遺跡西側山麓部で大量の遺物が出土している。
- 9 耕地整理に伴う発掘調査において丘陵北側水田部で大量の遺物が出土したが、その南側に対応する集落が存在するものと思われる。
- 10 注7文献と同じ
- 11 ①菅谷通保ほか 1993 「国府岡遺跡群」財団法人長生郡市文化財センター
②白井久美子ほか 2007 「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書7」財団法人千葉県教育振興財団
- 12 津田芳男ほか 1998 「下手II遺跡」長柄町教育委員会
- 13 津田芳男 1995 「宮島遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 14 津田芳男 1985 「小林西之前遺跡」財団法人茂原市文化財センター
- 15 津田芳男 1991 「打手遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 16 注7、注11-②文献と同じ
- 17 三浦和信 1988 「第六天向遺跡」財団法人茂原市文化財センター
- 18 松本昌久 1994 「和合遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 19 風間俊人 1993 「野階遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 20 今泉 潔 2002 「茂原市川代遺跡」財団法人千葉県文化財センター
- 21 菅谷通保ほか 1994 「中原遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 22 武部喜久ほか 1983 「鶴谷久保向遺跡」山武考古学研究所
- 23 松本昌久 1996 「谷口遺跡・吹良遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 24 注23文献と同じ
- 25 加藤修司 1995 「地壇下谷遺跡」長柄町教育委員会
- 26 風間俊人 1992 「新小舞遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 27 一覧表にのみ掲載した遺跡は下記の文献による。
①夏身遺跡 菅谷通保 1998 「(2)夏身遺跡」『長生郡市文化財センター年報No.10-平成7年度・8年度-』
②狸谷遺跡 加藤修司 1995 「狸谷遺跡群」財団法人長生郡市文化財センター
③間谷遺跡 松本昌久ほか 1996 「長尾遺跡群」財団法人長生郡市文化財センター
④田向遺跡 風間俊人 1994 「田向遺跡」財団法人長生郡市文化財センター
- 28 一宮川流域遺跡の立地による類型化は、注25文献により加藤修司がおこなっている。また、時間的な変遷等については注11-②文献などにも見られる。

写 真 图 版





①遺跡遠景（南から）



②調査前全景（南から）



③南側腰曲輪縦堀（北東から）



④最上部南東側土塁調査区隣接地



①丘陵部トレンチ4 (南東から)



②丘陵部トレンチ4 拡大断面



③丘陵部トレンチ6 (南東から)



④丘陵部トレンチ6 拡大断面



⑤丘陵部トレンチ6内ピット (南西から)



⑥丘陵部トレンチ13断面 (北西から)





①丘陵部～西側下方トレンチ15断面（南から）



②西側斜面部トレンチ1（北東から）



③丘陵部～南側下方トレンチ14断面（南西から）



④南側斜面トレンチ7（南東から）



⑤南側斜面トレンチ7（北から）



⑥南側斜面トレンチ3（北西から）



西側～南東斜面部トレンチ



①曲輪断面D-D'西北部



②曲輪断面D-D'南東部



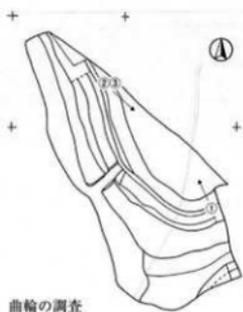
③曲輪断面西北部



④曲輪断面E-E'西北部



⑤曲輪断面E-E'南東部



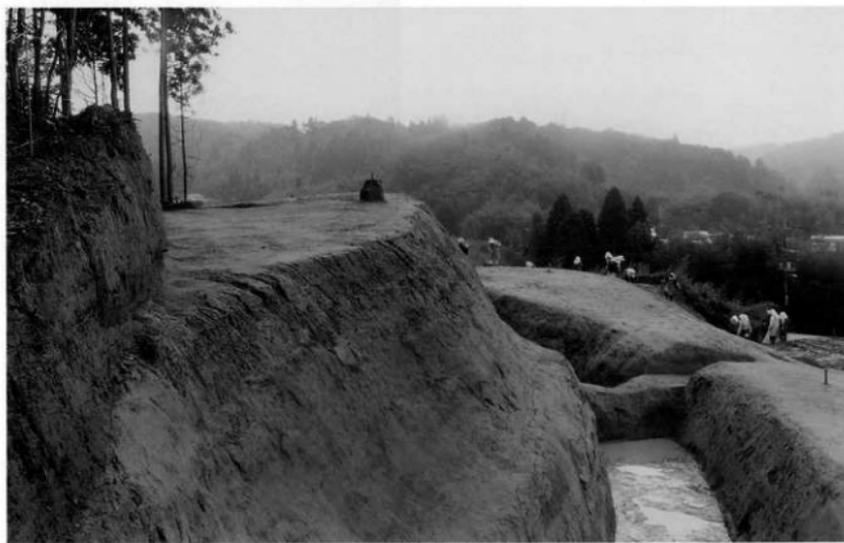
曲輪の調査



①曲輪表土除去後（南東から）



②曲輪表土除去後（北西から）



③曲輪・堀・障壁検出状況（北西から）



①堀北側 (南東から)



②堀北側障壁 (東から)



③障壁 (南西から)



④障壁 (北東から)



⑤堀・障壁 (北西から)



⑥堀・障壁 (南から)



⑦堀・南側斜面 (北から)



① 堀南側斜面



堀出土硯片



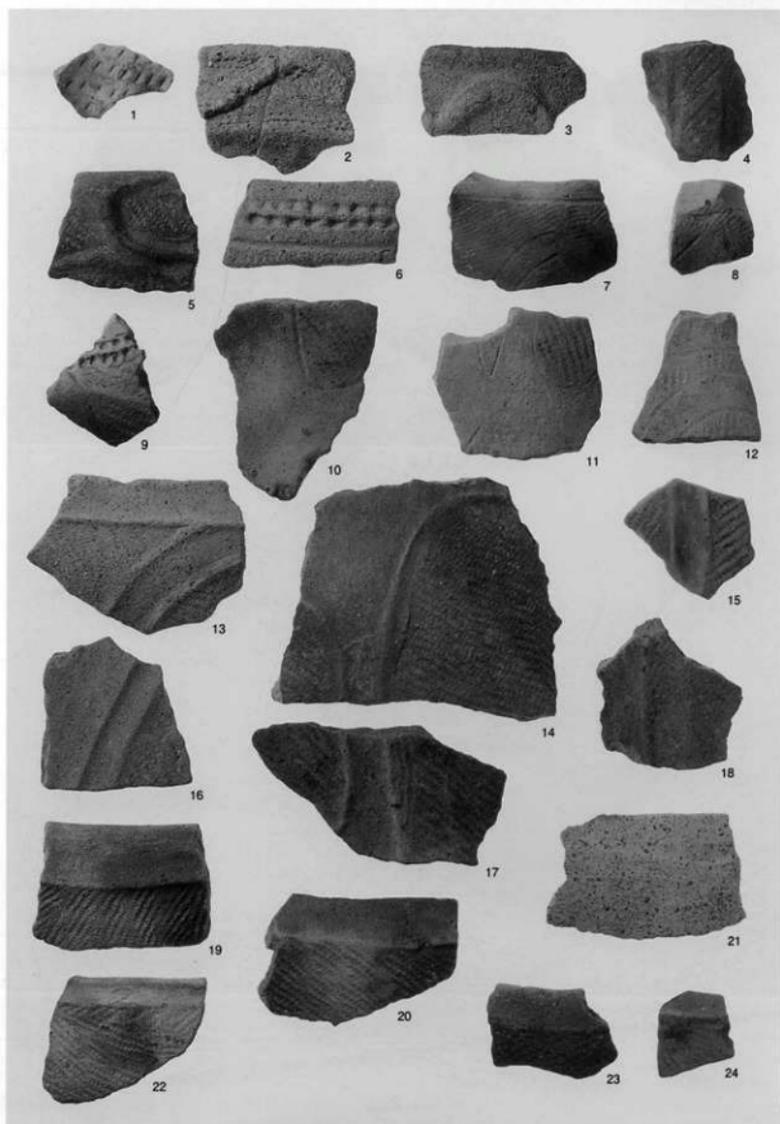
② 堀北側斜面



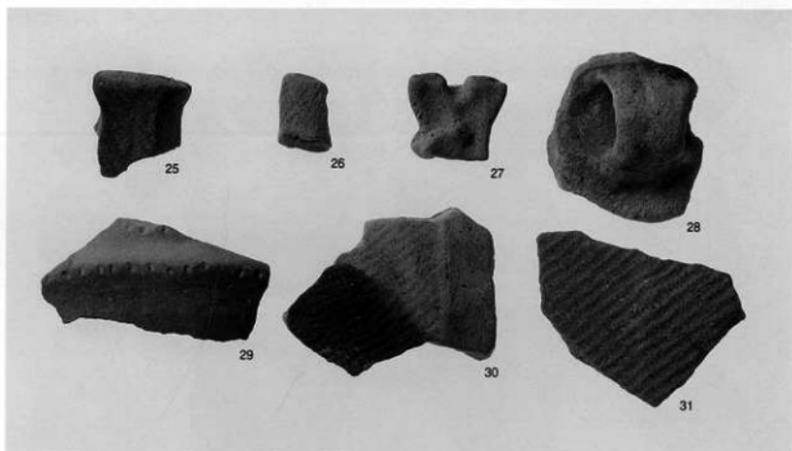
③ 南側堀断面 (南西から)



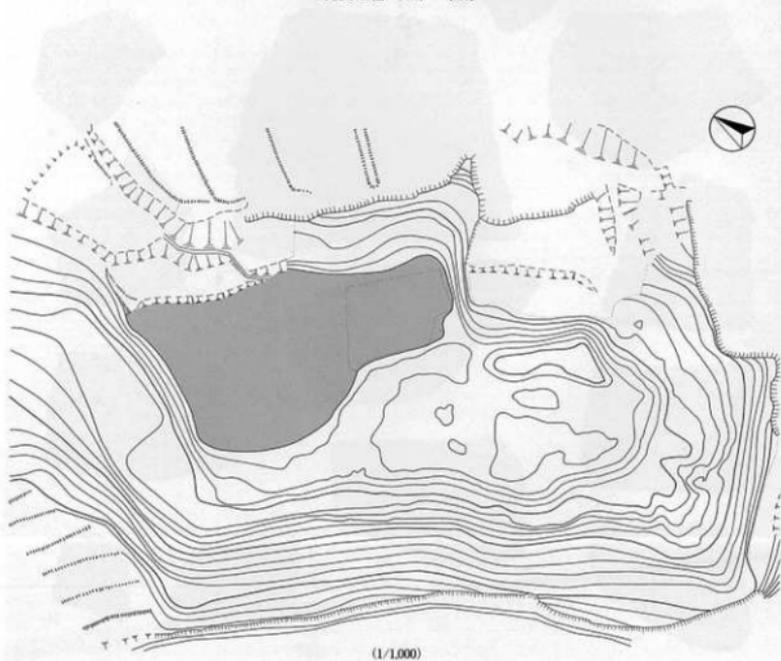
④ 南側斜面セクション (南西から)



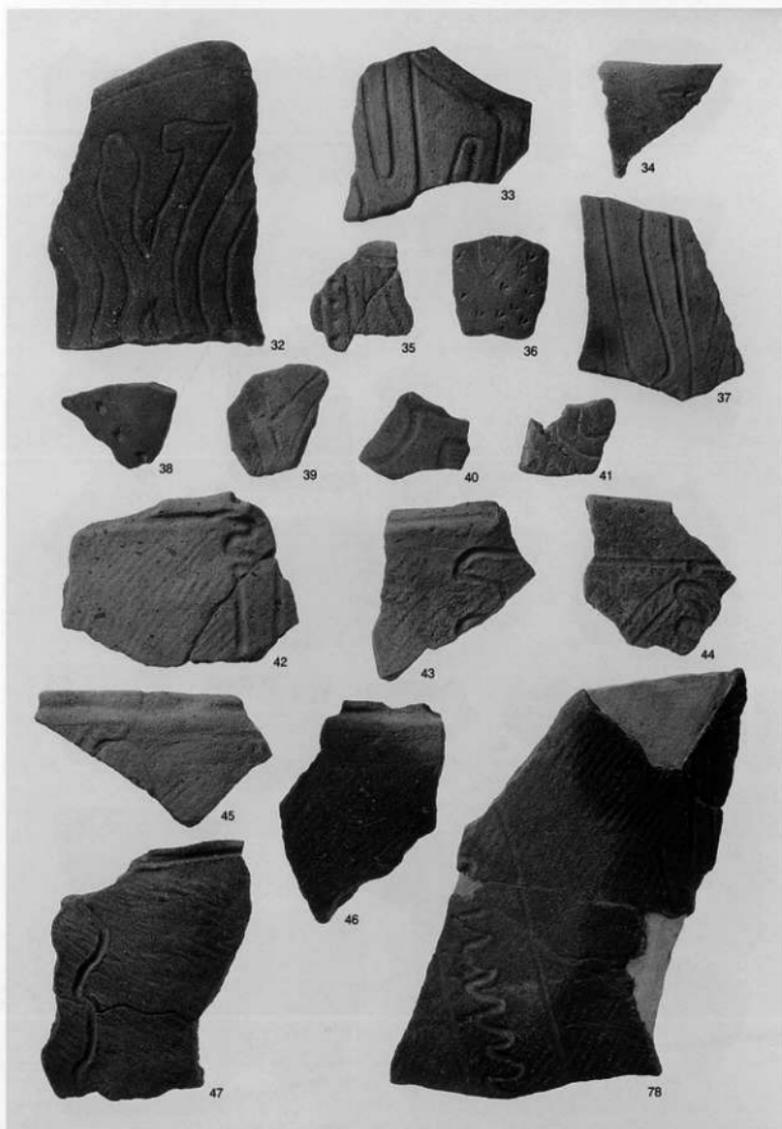
縄文土器(1) 前期・中期



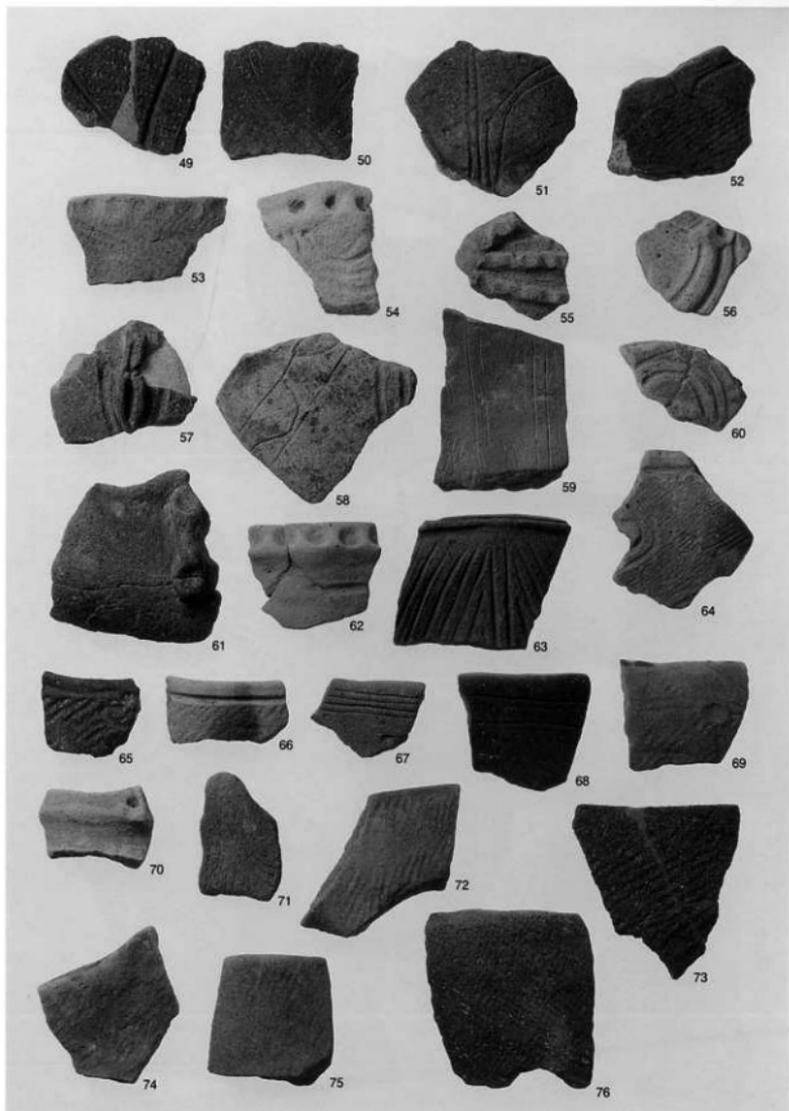
縄文土器(2) 中期



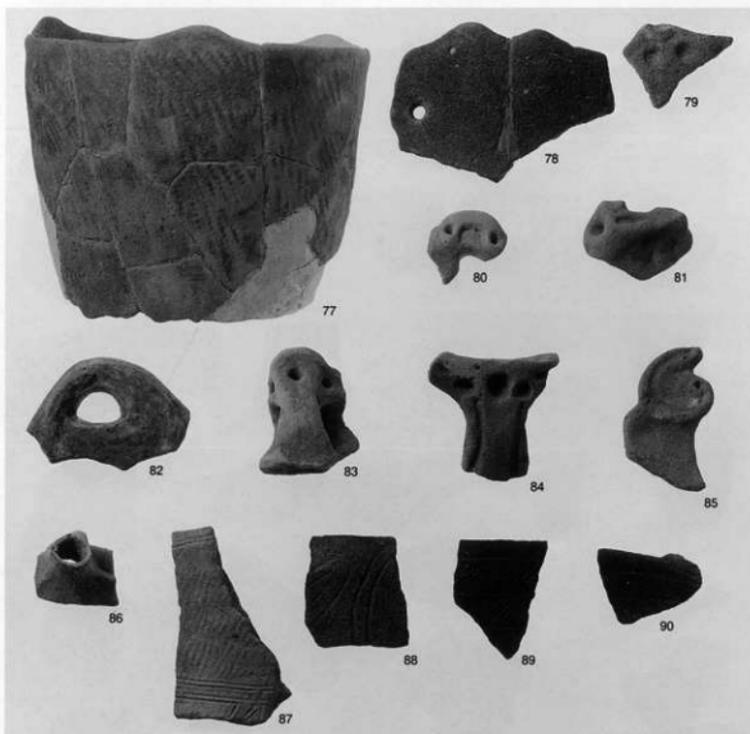
縄文集落推定範囲図



縄文土器(3) 後期



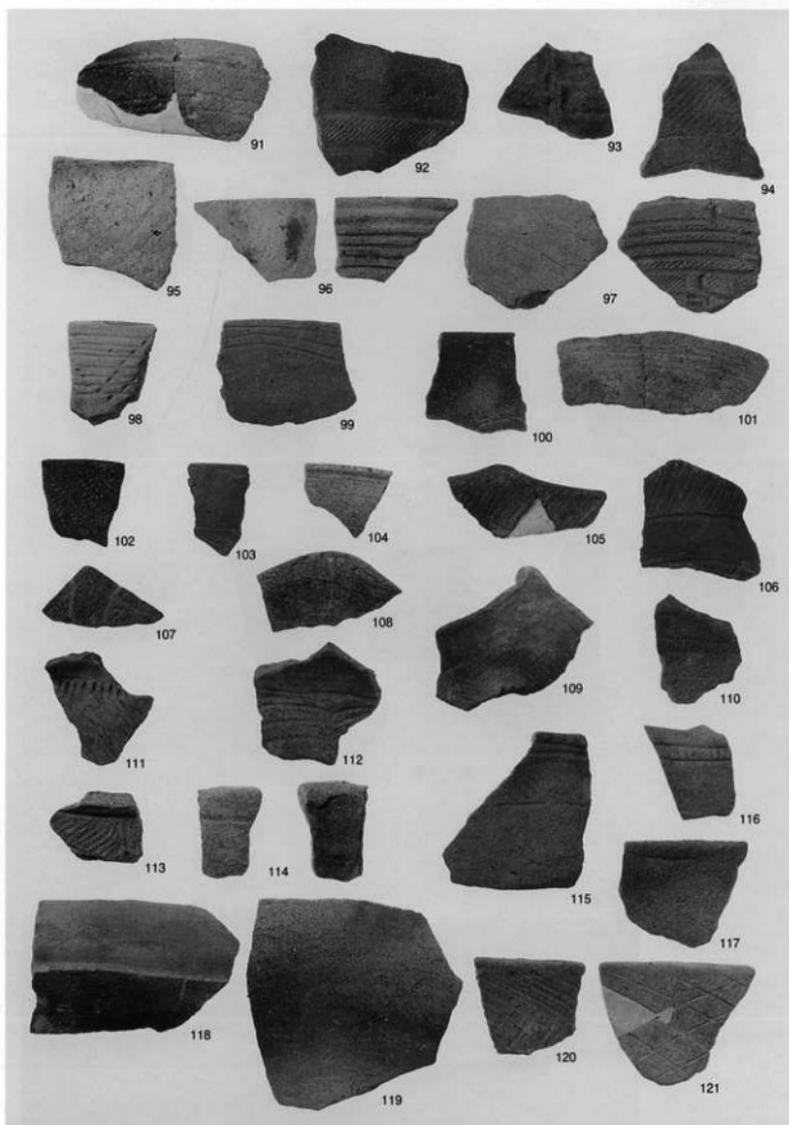
縄文土器(4) 後期



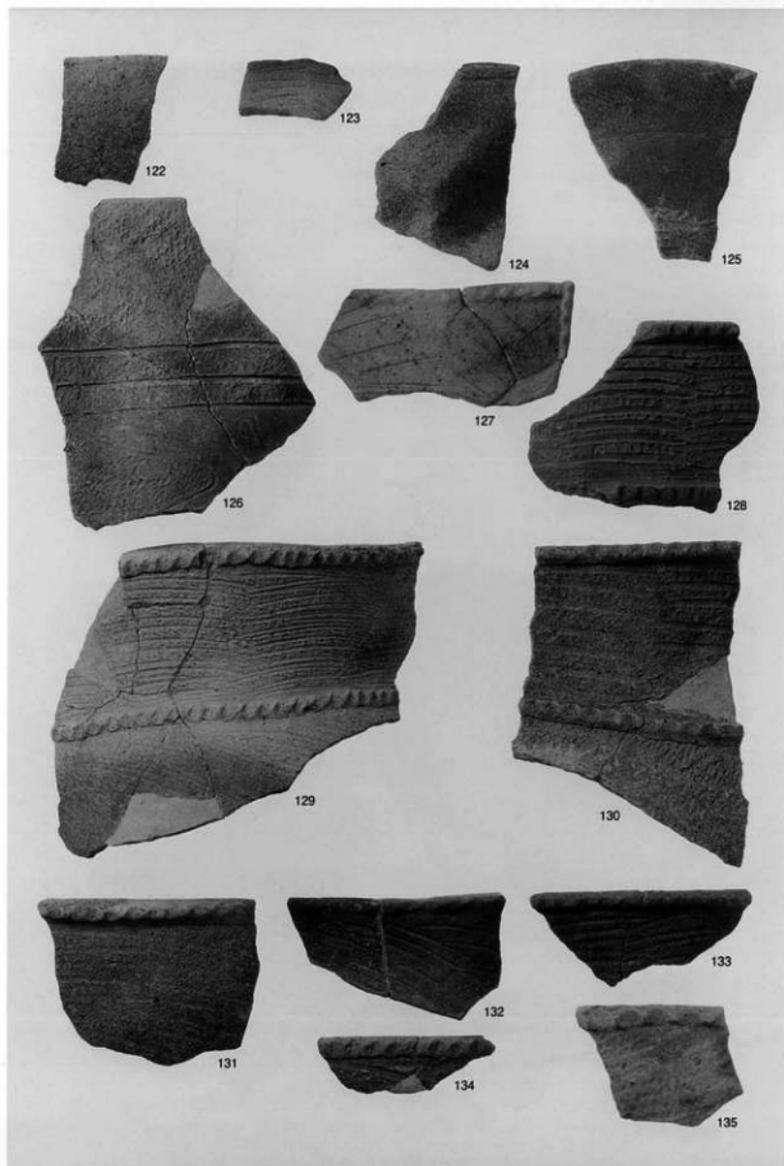
縄文土器（5）後期



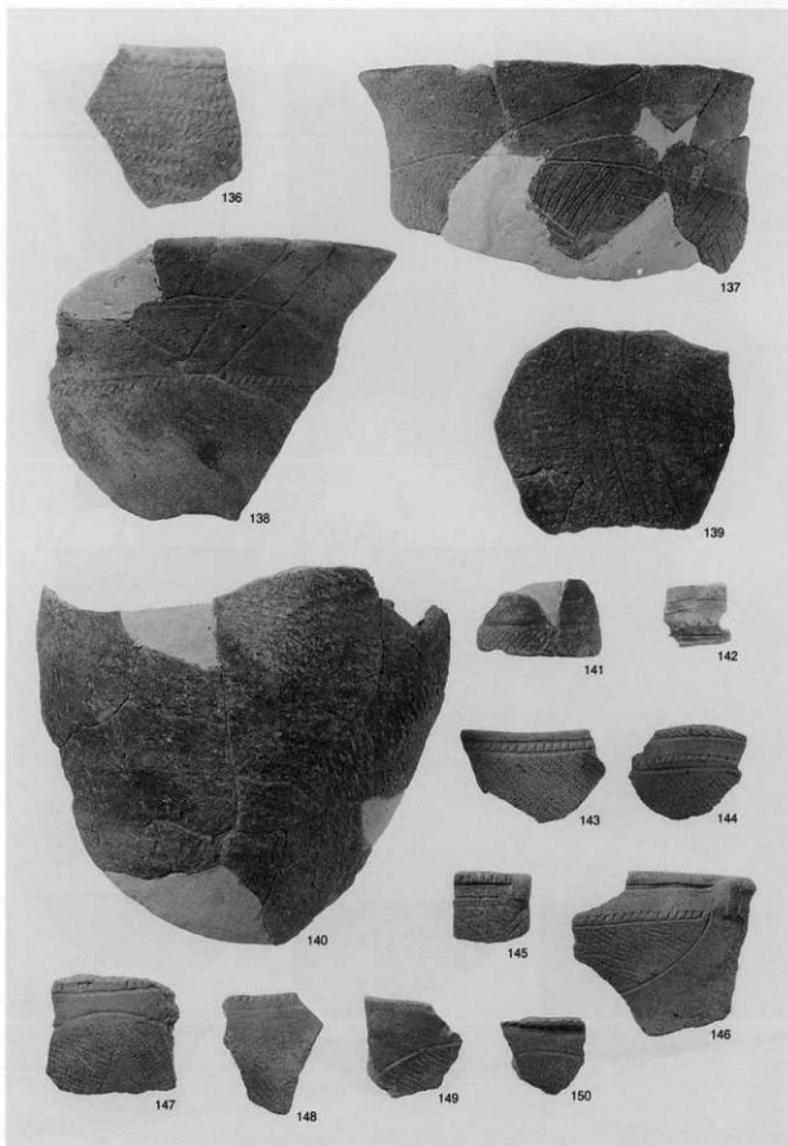
縄文集落推定地遠景



縄文土器(6) 後期

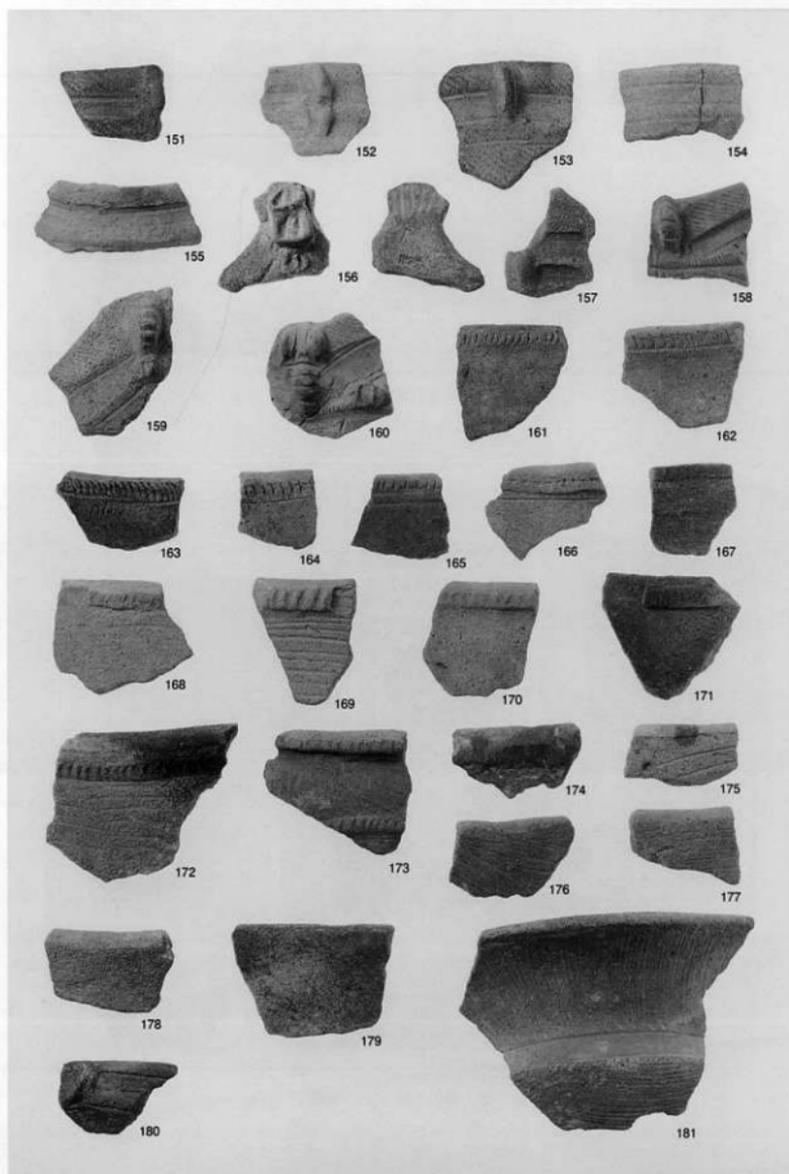


縄文土器 (7) 後期

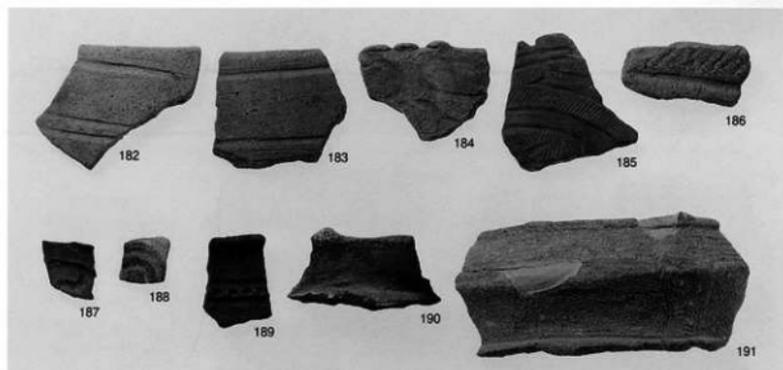


縄文土器(8) 後期

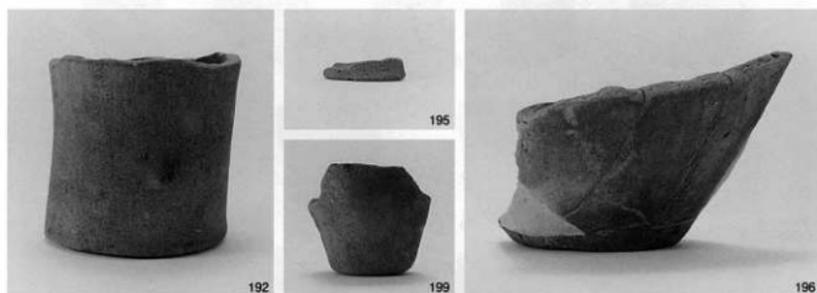
縄文 121-126頁



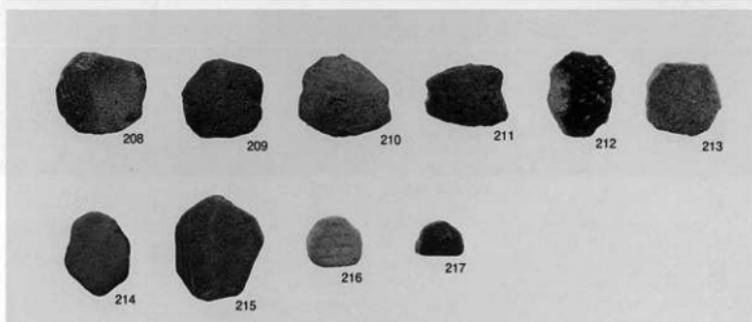
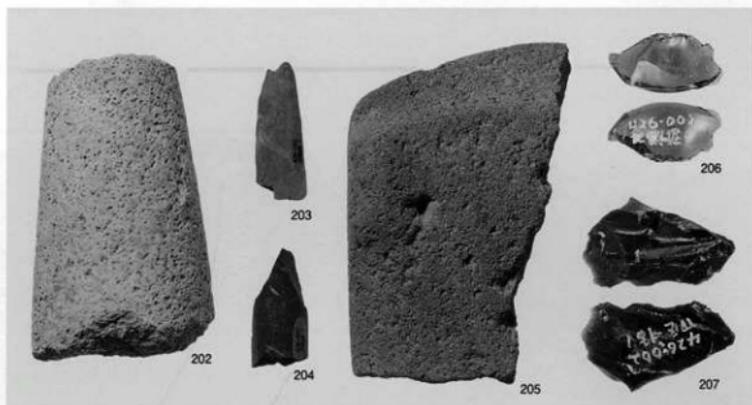
縄文土器(9) 後期



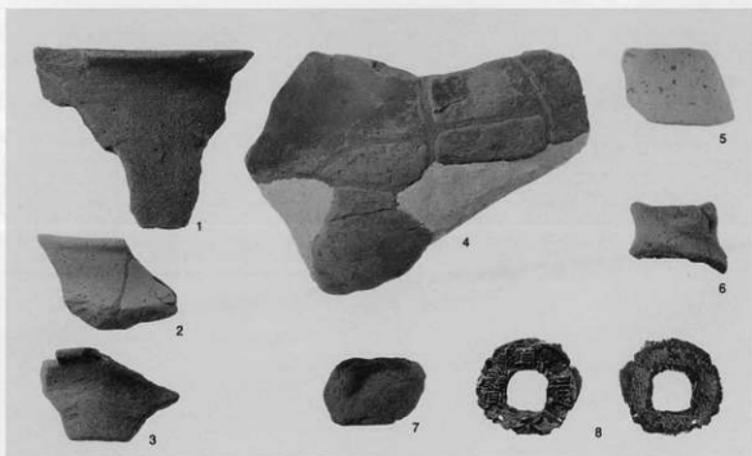
1. 繩文土器 (10) 晚期



2. 繩文土器 (11) 底部



1. 石器・土器片鍾ほか



2. 古墳時代以降の遺物



1. 調査地遠景（北東から）



2. 調査地遠景（北西から）

1. 1SB001 周辺 (南西から)



2. 1SB001 周辺 (北東から)



3. 1SA001 (北東から)





1. 2SB001 周辺 (北東から)



2. 2SB001 周辺 (東から)



1. 2SB002 周辺 (北東から)



2. 2SB003 周辺 (南西から)



1. ISE001・ISE002 周辺 (北東から)



2. ISE001 完掘状況 (南から)



1. ISE001 断面 (南から)



2. ISE002 完掘状況 (西から)



3. ISE002 断面 (西から)



1. 2SD001・2SD002 完掘状況 (南西から)



2. 1SD001 完掘状況 (南東から)



3. 1SD001 断面 (南東から)



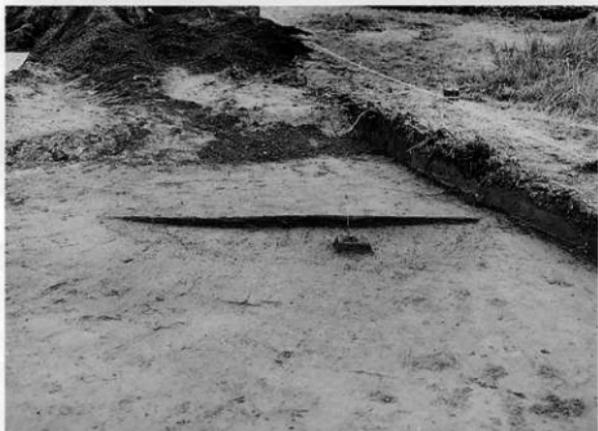
4. 2SD010 完掘状況 (南から)



5. 2SD006 完掘状況 (南から)



1. 2SK001 発掘状況 (南西から)



2. 2SK001 断面 (南西から)



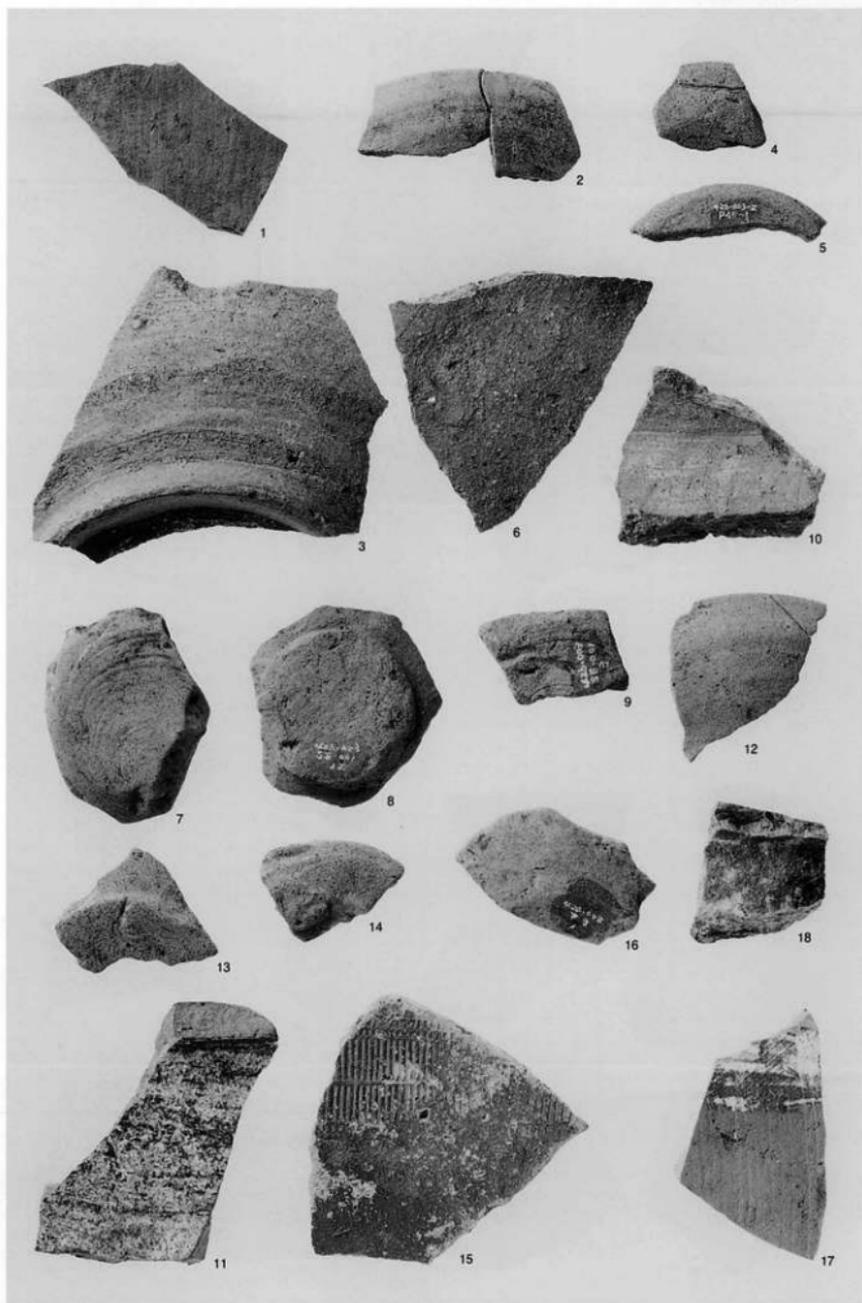
3. 2SK001 遠景 (北東から)



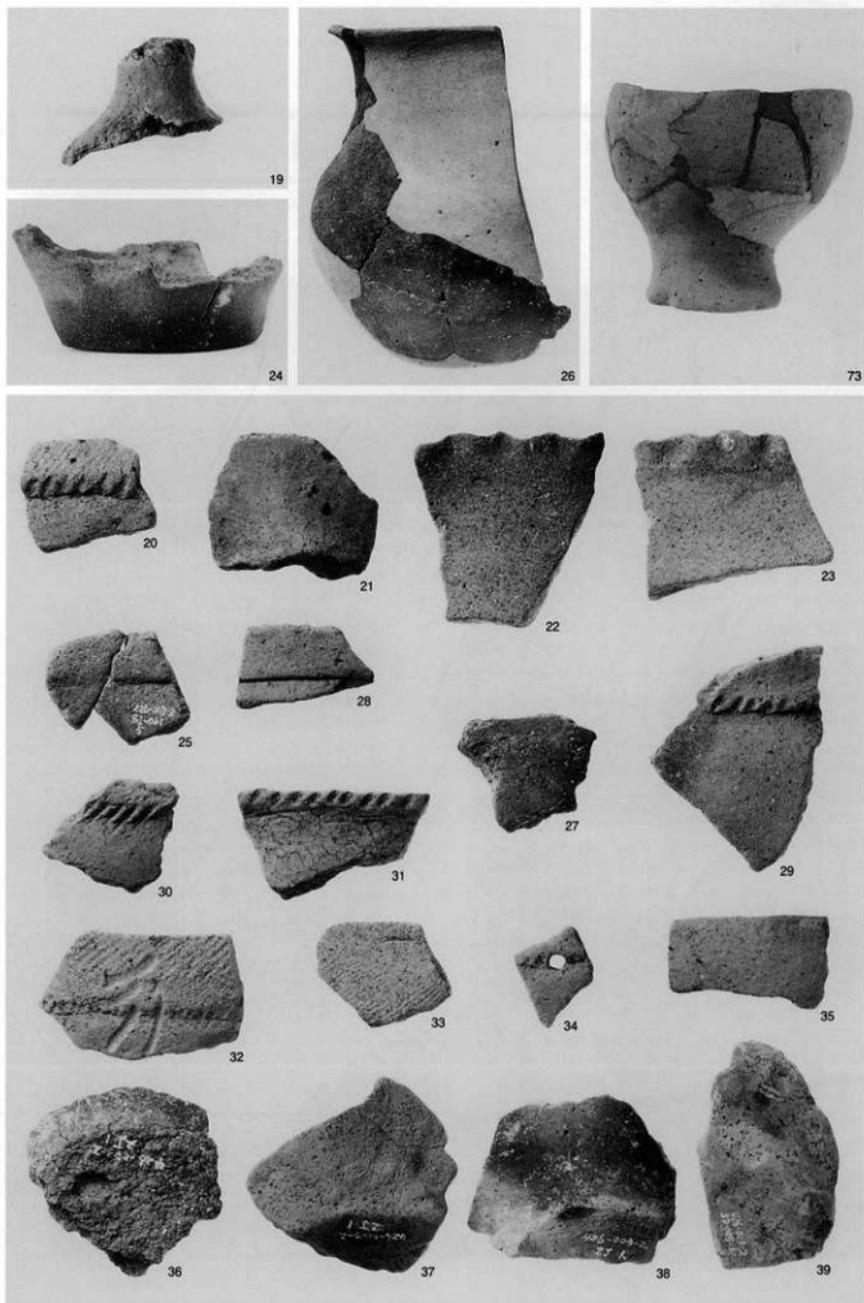
1. 2SI001 完掘状況 (東から)



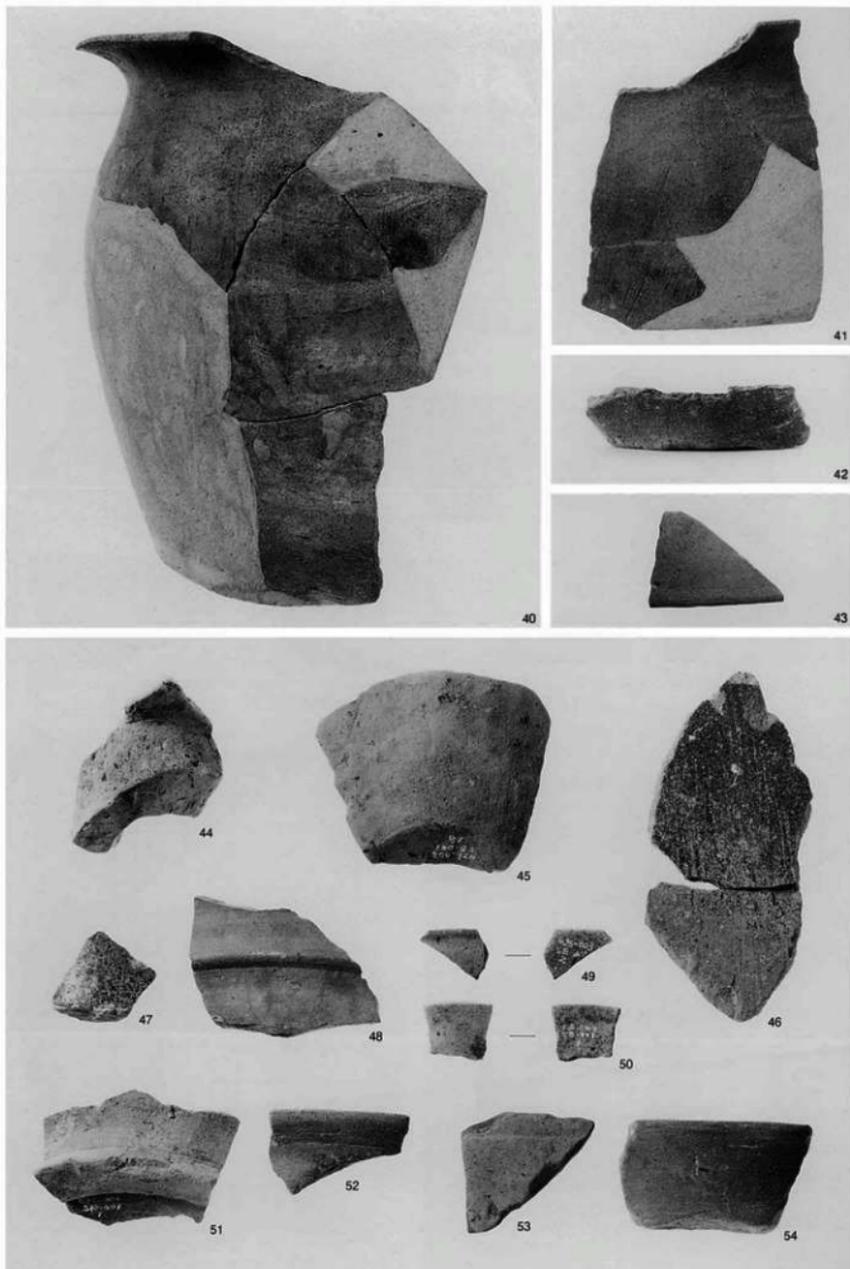
2. 2SI001 完掘状況 (北から)



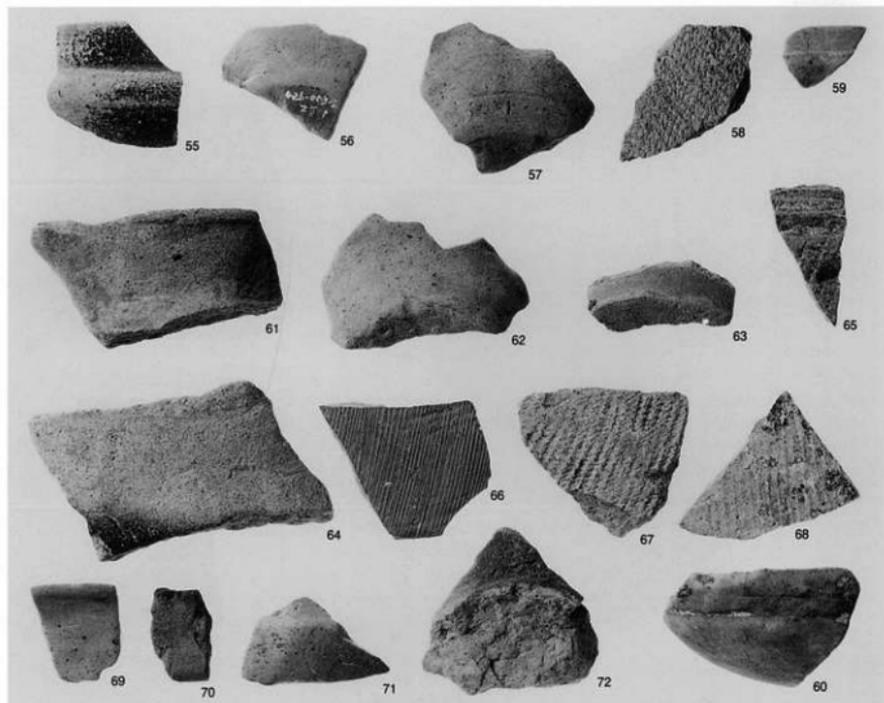
土器類1 (中世)



土器類2 (弥生時代・古墳時代後期手捏土器)



土器類3 (古墳時代後期から奈良・平安時代1)



1. 土器類4 (古墳時代後期から奈良・平安時代2)



2. 鉄製品

報告書抄録

ふりがな	しゅようちほうどういちらはらもばらせん(おさかへ・かなや)どうろかいりょうじぎょうまいぞうぶんかざいちようさほうこくしょ							
書名	主要地方道市原茂原線(刑部・金谷)道路改良事業埋蔵文化財調査報告書							
副書名	長生郡長柄町後領道跡・市神道跡							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第601集							
編者名	小高春雄・半澤幹雄							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿波809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦2008年3月25日							
所収道跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道跡番号					
後領道跡	千葉県長生郡長柄町 刑部字後領3054-3 ほか	12426	002	35度 25分 34秒	140度 11分 44秒	20061016～ 20061214	4,300㎡	道路建設に伴う 埋蔵文化財調査
市神道跡	千葉県長生郡長柄町 金谷字市神370-2ほか	12426	003	35度 25分 30秒	140度 12分 03秒	20060716～ 20060728	440㎡	道路建設に伴う 埋蔵文化財調査
			003-2			20071001～ 20071031		
							計 965㎡	
所収道跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
後領道跡	包蔵地	縄文時代	曲輪・堀・障壁・溝状遺構		縄文土器(前期・中期・後期・晩期)・石器・土製品 土師器(後期)		堀の構造(障壁)などから中世末期(16世紀)の城と判断され、刑部城という名を付した。築城による削平等により遺構は検出できなかったが、縄文時代中期から晩期の遺物が出土しており、該期の集落が存在した可能性が高い。	
	包蔵地	古墳時代						
	城館跡	中世						
市神道跡	包蔵地	弥生時代	土坑		弥生土器(中期～終末期)		中世前葉(13世紀前半)の掘立柱建物跡や井戸、区画溝を検出し、該期の屋敷地が明らかとなった。	
	包蔵地	古墳時代			土師器・須恵器(後期)			
	集落	奈良・平安	竪穴住居跡		土師器・須恵器・灰軸陶器			
	集落	中世	掘立柱建物跡・横列跡・堀跡・井戸・溝		土師質土器・陶器・砥石 鉄製品			
要約	<p>後領道跡は、一宮川上流域左岸の丘陵先端に立地する。堀や厚い盛土による曲輪が形成され、16世紀代に築城された城跡を検出した。この城(刑部城)は市原市西部と茂原市を結ぶ交通の要衝に築造され、長南武田氏領国の北西の境目域の機能を果たしていたものと想定される。</p> <p>市神道跡は、一宮川上流域左岸の自然堤防上に立地し、弥生時代の土坑、奈良・平安時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡等を検出した。弥生時代中期以降、断続的ではあるが集落等が形成され、当地域に於ける低地の利用状況を考える上で貴重な成果を得た。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第601集

主要地方道市原茂原線(刑部・金谷)
道路改良事業埋蔵文化財調査報告書
— 長生郡長柄町後領遺跡・市神遺跡 —

平成20年3月25日発行

編 集	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	千葉県県土整備部 千葉市中央区市場町1-1 財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株式会社 正文社 千葉市中央区都町1-10-6
